明治三十二年十二月廿四日發兌

女鑑



東京國光社

女鑑第百九拾五號

目録

網女



衛生

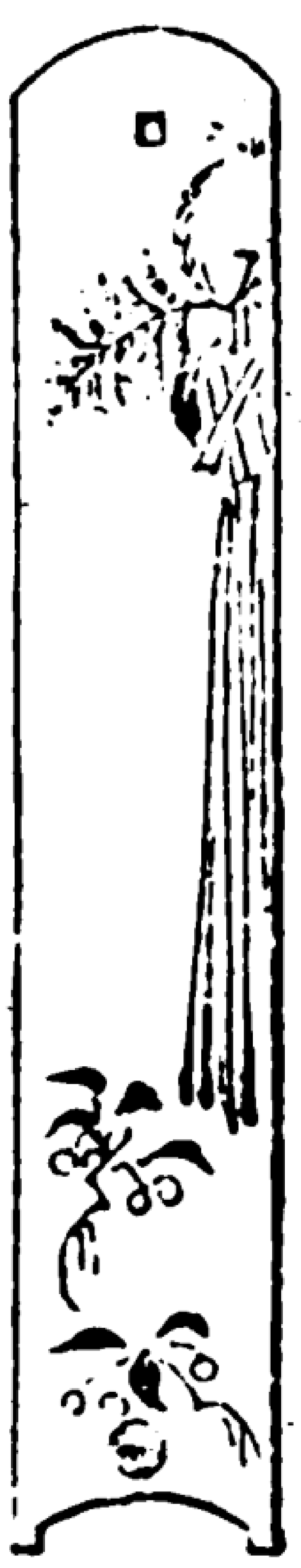
天より與へられし處の生を衛る、即ち、衛生にて、凡そ、天下に生を受けたるものは、朝に生じ、夕べに消ゆるを性としたる、はかなきかげろふすら、なほ分時の命を惜しむ。人として、生を惜しまざらんや。生ををしまば、生を衛らざるべからず。生を衛らずして、徒らに壽命長生を願ふも、又、難からん。人の命は、天にあり。人にあらず。長命も、短命も天命のみ、人事を以て、如何せんと云ふ人あれど、それはいたく非なり。短命、誠に天命なるあり。己をつゝしみまもりて、以つて命短きは、誠に天壽なきなり。されども己をつゝしみ、まもらずして、短命なるは、天命にあらず。己よりなせしなり。たとへ、長命に生れつきたる人も、養生せざれば、早世す。虚弱にて短命なるべきも、よく保養すれば、命長し。例へば、火を埋みて、

爐中に養へば、久しく消えず。風吹く所にあらはしおけば、忽ち消ゆ。蜜柑もあらはにおけば、年の内をも保ず。もし、深くかくし、よく養へば、夏までも保つべしと、貝原益軒翁も云はれたり。物萬事、養ふと、養はざるとにあり。露のひぬ間の槿も日影をいとひて、露を絶たしめずば、夕に至るまでもなほしをれざるが如し。而して、生を養ふや、衣食住起臥に意を注ぐなり。中にも病は口より入ると云へば、食物に注意すべし。さりとて、美食、滋養物を撰べとにはあらず。たゞ、大食をつつしみ、不淨を食はず。又、村食とて、時としては、おどろくばかり多く食し、時には、少く食するなどの事なく、又うたがはしきものを食はず、毒虫毒物を、よくよく吟味し、清きが上にも、清くして食すべきなり。世には、名も知らぬきのこを食して死せるあり。又ふぐを食して、世を早うしたるあり。いもり、蜘蛛等の害にあたりて、仆れしあり。之、皆、食をつゝしまざりし粗暴心より、自から、身を殺したるなり。又、滋養物とて、食し過せば、中々に、身体の害となることあり。草木に水と肥との養を過せば、かじけて枯るゝが如し。

住居衣服は、尤も、清淨ならしむべし。病毒は、とかく、不潔の所にあつまるものにて、虎列剌、赤痢、當今流行する所の黑死病等、不潔なる所に多し。中にも繁華の都會、貿易しげき港等は、人民雜沓して、空氣おのづから清潔ならず。諸國の病をさへ運輸し來る。流行病、多くは貿易場よりはじまる。されば、さやうの地に住する人は、尤も、意を注ぎて、住處、衣服等を清潔にし、病毒をして容れざらしむるやう、意を注ぐべきなり。

又、身体をそこねまじとて、つねに、あまりに暖く着し、襟をくゝりおく等、甚だよろしからず。これ、中々に氣管をよわくして、ともすれば、風邪におかさるゝなり。又、病は氣より生ずと云ふ。よく運動をなし、起臥を度にし、氣を快潤ならしむべし。もし、骨をしみして、身体を勞せず、或は、あまりに睡り過せば、氣滯りてめぐらず、飲食も亦消化せず、胃を損じ、氣を損じ、萬にぶく、活氣なき人となりぬべし。睡眠は習慣のものなり。よく〳〵はじめをつゝしむべし。心は身の主なり。しづかにして、安からしむべし。身は心の奴なり。動して勞せしむべし。心や

すく、靜なれば、天君ゆたかに、くるしみなくして樂み、身動きて勞すれば、飲食滞らず、血氣めぐりて、病なしと、彼の益軒翁は、また云はれたり。世の中のすゝむにつけ、さま〴〵の病傳染流行するものにて、此の夏は、トラホームと云ふ恐ろしき眼病流行し、今又、黒死病流行し來りぬ。あはれ恐るべし。畏むべし。今や人々、いよ〳〵食をつゝしみ、氣を盛んにし、身體を健康にし、空氣の流通をよくし。衣服、身体、四方を清潔にして、毒虫毒草を平らげ、病魔をしてとゞまる所なからしむるやう注意する事肝要なり。殊に女子は、衣服、住處、食物の調理等を專らつかさどるもの故、よく〳〵住居を清淨にし、空氣の流通をよくし、衣服を、しば〳〵洗濯し、食物をつゝしみ、又、一家和合せざるは、氣うつするの元ともなれば、よく、一家の和合をはかり、人々の健康長生をはかり、衛生に注意して、天壽を保たん事を、かへす〳〵も、心がくべきなり。





日本女子今後の覺悟（十二）

三輪田眞佐子

第一博智　凡そ智識は、直接にし、實歷し、亦は、驗徵するか。若しくは、間接に、他人より傳聞して、得らるゝものぞかし。但し、直接に得る智識は、元來、一人の身を以て、その一生に得るものなれど、勢ひ多きを得ざるべし。されど、間接に得る智識に至りては、千百萬人の耳目を以て得しところを、坐ながら傳聞するより、おのづから廣かるべきなり。今若し、この種の智識を得んとならば、人と交際するばかり便なるはなし。孔夫子の、われ若くして卑し。故に卑事に多能なりと、謙遜してのたまひしは、直接に得し智識多きは、勿論間接にも、種々なる人と相交るより得けん智識も少なからざると知るべし。

古人をして、牝鷄の晨するは、家の禍なりとか、亦は、女子と、小人とは養ひ難しなど、極論せしむる原因は、女德の欠乏より來るにあらざれど、女智の不足より來るものなら

ん。如何となれど、女子は、なべて交際少きものなるを以て、間接に得る智識豊かならず。従ひて、僅の見聞を根底となして、萬事を判斷するより、小事を大事と思ひ、難事を易事と想ふなど、世の實際と、その思想と一致せざるべし。由りて一言發すれど、家を禍し、一行施せど、人を害することもあらん。されど、今日亂用せざる區域内に於て、適當なる交際をなさば、この短所を補ふに足らんか。若し女子の必要なる範圍内の交際をも、なほ、危險として、悉く禁ぜんが。あはれ、愚をして、益、愚ならしめ、迂をして、いよ〳〵、迂ならしむるものなり。

第二愉快　古來聖賢の愉快を得よと、正面に敎へざりける所以のものは、たま〳〵、愉快を得る手段に不正なるもの、有害なるものあれどなり。故に善をなすを樂み、事を勤むるを悦ぶ如きは、最も、好みすべき愉快なり。わきて、人生は苦痛のみを以て、安すべきものにあらず。惡僻なき限りに於て、愉快を求むるは可なり。かの有益にして、正當たる交際上より生ずる愉快の如き類は、これに屬す。

見よ。朋ありて、遠方より來る樂は、その感限なし。あるは、この明月を獨り見んもと思ふ折から、知人の來りて、限なき物語をなすは、愉快にあらざるか。亦わが兒の許に、益友の來り遊ぶを見し母の心地は、知る人ぞ識る。あるは良人と相提携する友人の來り談

笑するは、れのづから、その妻の頼母しき感あらしむるならん。これ、皆、交際の賜なり。

第三　處世　有爲の大才を懷きながら、これを施す機會なき人なきか。毫も咎なきものを世人の度外に置くものなきか。これ全く交際なき結果ならん。佛者曰く、緣なき衆生は、度し難しと。實に一面識だになき人は、これを用ふるに由なかるべし。亦、世人より隔絶する家はその心中を知ること能はざるを以て、外見上かくこそ良けれ。かくもせよがなど思はるゝ關係も、等閑がちなる習とかや。さればそのため逆境に立たんか。實に憐むべきことにこそ。

されど、苟も、身を世に處せんと願ふものは、世と同すべからざれども、亦、和するを知らざるべからず。この和は、交際に外ならざるなり。蓋し、女子は、通例交際上、處世に關係することとは、比較上、男子よりも、少きものなれども、或る事情のため、自ら、社會に出づるか。若しくは、父兄良人の職業上より、交際の避け難きもの、例之ゝ所々に轉任する會社員、文吏、及び、軍人の如きは、任地の同僚、及び、隣保を以て、相助け、相應せざるべからず。故に、かゝる家庭の主婦たるものは、必ず、交際の仁義を辨へ、露ばかりも、父兄良人をして、内顧の患あらしめ、以て處世の道を妨ぐべからず。

今や、將に、明治三十二年も暮れんとするなり。そがため、おのづから、人の心も急ぐならん。都大路を行く人も、その歩、いよ／＼忙はし。定めて、讀者の家庭も事煩はしからん。希くは、この期に於て、適當に世事をつとめ、必ず、人に仁義をな失ひそ。亦、家事を澁滯ならしむべからず。これ、皆、交際の道に影響するものなり。

女子道德と自殺

白松園主人

光陰匆忙として、歳月移るに易く、白駒の歎、徒に積りて、今年も亦、將に暮れなんとす。あはれ我身の心元なきにつけても、とかく人のうへのかこたるゝは、よにすきでゝろとの嫌はあらめど、昨日の我にわきていふにはあらじかし。抑も萬物最高の位置に立てる人間が、然かも文明の世に生れ、日進の時勢に遭遇しては、益々古有の道德を發輝して、列强と旗幟を鮮明にせざるべからざるは、いはでもの事ながら、女子道德の標準を、我國往時に於ける、女子の自殺を以て、唯一の殷鑑となさんとする傾向あるは、今日の時勢に於いて、頗ぶる適切ならぬ事といふべし。其の主張する所に極端なるは、大抵、勢の免れざる所なれども、彼の歐化主義の反動として、自殺の事を事もなげに語りきかすは、うたてきことの限りといふべし。總べての希望、あらゆる快樂を拋擲して、人

生の最も貴重なる生命を捨つるに至るは、實に容易ならざる變道にして、豐富膨脹を企圖する國家が、苟くも取るべき主義に非ず。取るべき策をも取らず。計るべき方法をも講せずして、困難の境に處すること能はずして、直ちに一死する外なしとなし、自殺に出づるは、是頗ぶる野蠻時代の操行にして、文明時代の女子が目的にあらず。然るに現今の女子教育を見るに、我國の道徳とし云へば、多くは消極的の自殺を以て、女子極美の本分となすもの丶如し。嗚呼之無智朦昧なる匹婦賤女が、常に取る所にして、智識ある者の爲すべからざる處たり。然るに我戰國時代の婦人が、窮迫する所、稀に刃に伏したる者を、好標本として、酸鼻非慘の事跡を奬勵するは、時勢人心に適合せざるのみならず、我國將來女子教育上、決して策の得たる者にあらず。吾人は生命を重んじ、財産を輕んせずして、尤も克く困苦艱難に堪へ、必ず希望を達して、圓滿なる人生の快樂を享有せんことを教へんとす。矯めんと欲して僻し、救はんと欲して弊なるは、考ふべきことなり。彼の教育としての歴史話題の如きも、勉めて此の種の弊を避けんことを。吾人は明治三十二年といふとしの暮る丶に臨みて、大日本婦人の生命の尤も長からむことを祈る。



網女

山本正周

網女は若狹の國三方郡西津邑の小松原角左衛門といふ者の女なり。年十四歳なりける時、同じ村の刀禰茂太夫といへる者の子守に傭はれき。或日主人の兒を負ひて、門外に遊び居けるが、折節一頭の狂犬走り來りて、やにはに、背なる子に飛びかゝり、牙を露はして、咬まんとしけれど、網は、あはてゝ、背なる兒を下し、己が衣にて、兒を蔽ひ、地に伏し倒れけるに、群犬集まり來りて、手足の嫌なく、網を咬みければ、網は、處々に傷を負ひ、泣き叫びて、援を求めけり。聲聞きつけて、人々馳せ來り、犬を逐ひ、網を勞はりけるに、其の傷頗る重かりしかど、板に載せて、吊り行かんとするに、網は、主の子は如何にしませしぞ。御身に怪我はなかりしかと、己の苦痛を忘れて、主人の兒を氣遣ひ居けるが、網は、數ヶ所の傷に、犬の毒總身にまわりしものと見え、敢なく、息は絕えにけり。茂太夫驚きて、急に人を走らせて、網の母を呼び寄せけるに、母は、まづ、主の兒の安否を問ひ、其の恙なかりしを喜び、少しも我が子の死せしことは悲しまざりけりとなむ。揃ひも揃ひて、心掛の殊勝なる母子と謂ふべし。後に城主某、此の事を聞きて、不便に思ひ、一の碑を建てゝ、忠烈網子之墓と題し、三日の間、之を祭りて、村人に參詣せしめ、又、其の親を召し出して、租税を免し給ひけりとなむ。

烈婦奧氏

蓼花樓主

安藝の太守に仕へて、大扈從の役勤めける、一柳源兵衛、貧しかれども、良き妻を有ちけり。貞享元年

八月源兵衛、主君につき従ひて、江戸へ上るべきことあり。貧しき源兵衛には、江戸の参勤に供奉せん資力なかりき。一族の中、余吾彌一兵衛といふもの、いたくあはれみて、其の資をも得させつ。やがて鹿島立、間もなうなりける頃、中江某の邸に宴を設けて、余吾をも招き、散樂師をも召して、旅路安かれと盃をかはしぬ。げに酒は心を狂はしむる水なりけり。恩をかさに人を蔑すむとにはあらざりけむも、酔ひたる余吾の舌より、滿座にわたりて、源兵衛が江戸行の費は、誰が辨じけむと漏れぬ。源兵衛赫と怒り、拔く手も見せで、余吾が額を打ちぬ。余吾は刀に手をかくる暇もなくて、斃れぬ。源兵衛のかれぬ罪は知れり。急き使もて、其の妻につげ、自刄の仕度に衣裝を送らしめぬ。源兵衛は貧しかれど、良き妻を有ちけり。源兵衛が妻奥氏は、事の始終を聞きて、心騷ぎだもせず。物靜に、其の夫が振舞の、武士に耻かしからざりしか。あらぬかを質し、さて後に、死出の旅路の装を送らしめぬ。

奥氏は、未、うらわかく、未見も有たざりき。親なりける人の、あはれとおもひて、再び嫁がすやと言ふをば否みぬ。あるとき、一族の議まとまりて、奥氏は、再婚の事と定まり、はや結納さへも、取りかはされぬ。奥氏の心は、いよいよかたかりき。陽に承諾の色は見せて、心の計畫は、夙に定まれり。結納の取かはされし日、奥氏は自ら刄に伏しぬ。安藝の守の大扈從、一柳源兵衛は、貧しかれども、良き妻をもちけり。夫妻を合せ葬りける墓に、二十余年一日の如く、香華を供ふるものありけり。奥氏に侍りし、婢のまこゝろなりき。げに源兵衛は良き妻をもちけり。夫の名をはつかしめず、巳の操を汚さず、其の徳は侍婢にも及びぬ。貧しきは耻にはあらざりき。かゝる妻を有ちて、源兵衛の名もあがりぬ。げに源兵衛は良き妻を有ちけり。





茶の湯

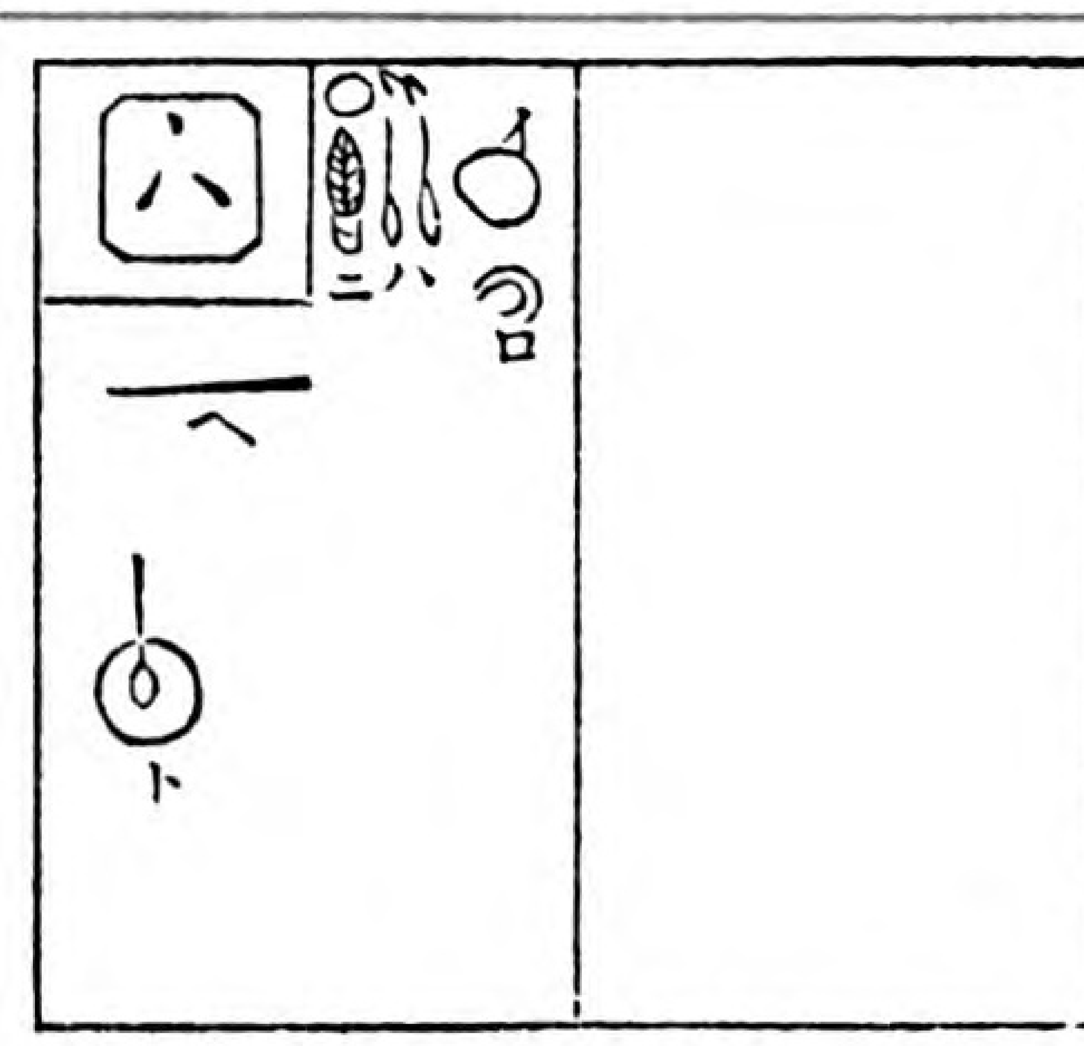
茶禮初學（承前）

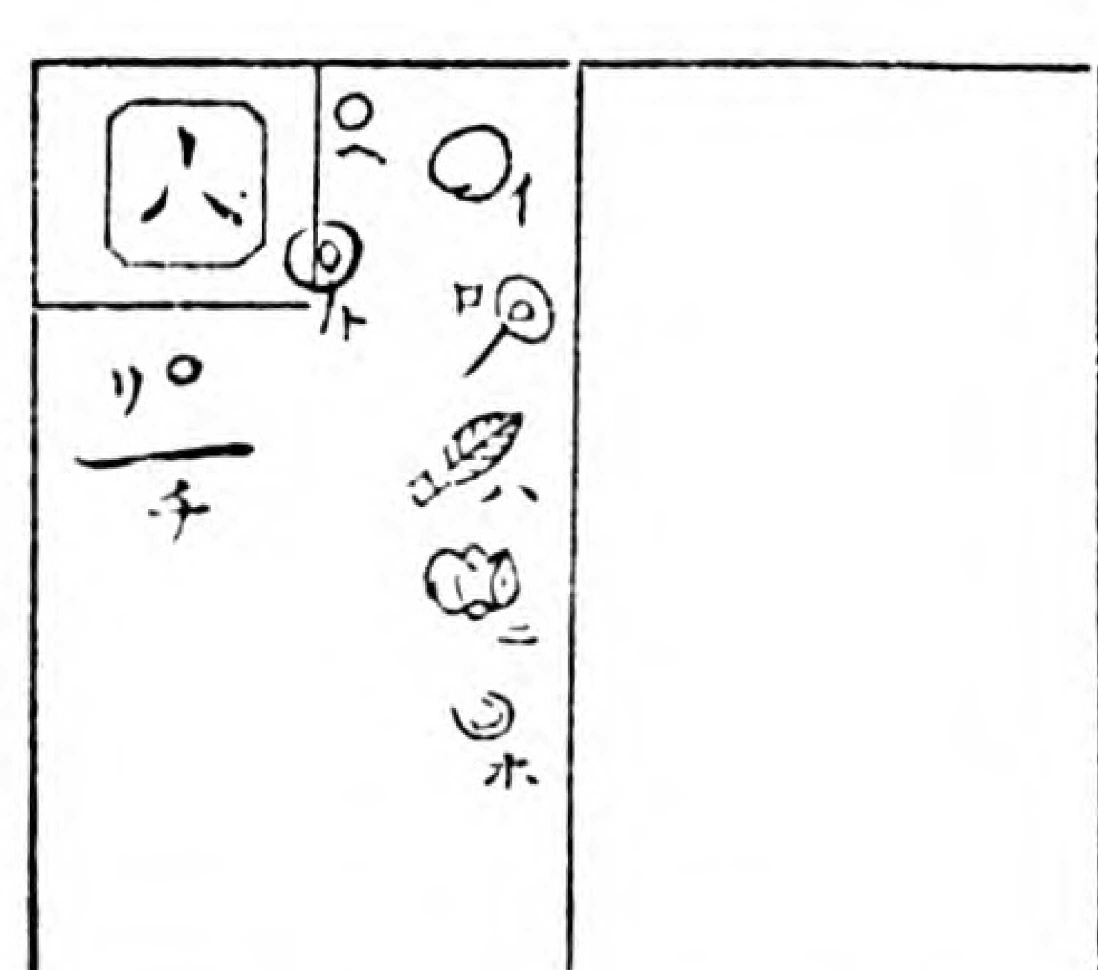
孤峰菴碌仙齋不羨
關　葦　雄

城州山崎妙喜庵
角爐圖、及、濃茶炭手前及薄茶

第一圖　イ、炭斗　ロ、灰器假置　ハ、三ツ羽　ニ、釜　ホ、環　ヘ、香合　ト、灰蒔トキ　チ、居前

第二圖　イ、炭斗　ロ、環　ハ、火筋　ニ、三ツ羽　ホ、香合　ヘ、居前　ト、灰炮烙　リ、香合ノ蓋　ヌ、香合所望ノ時出ス



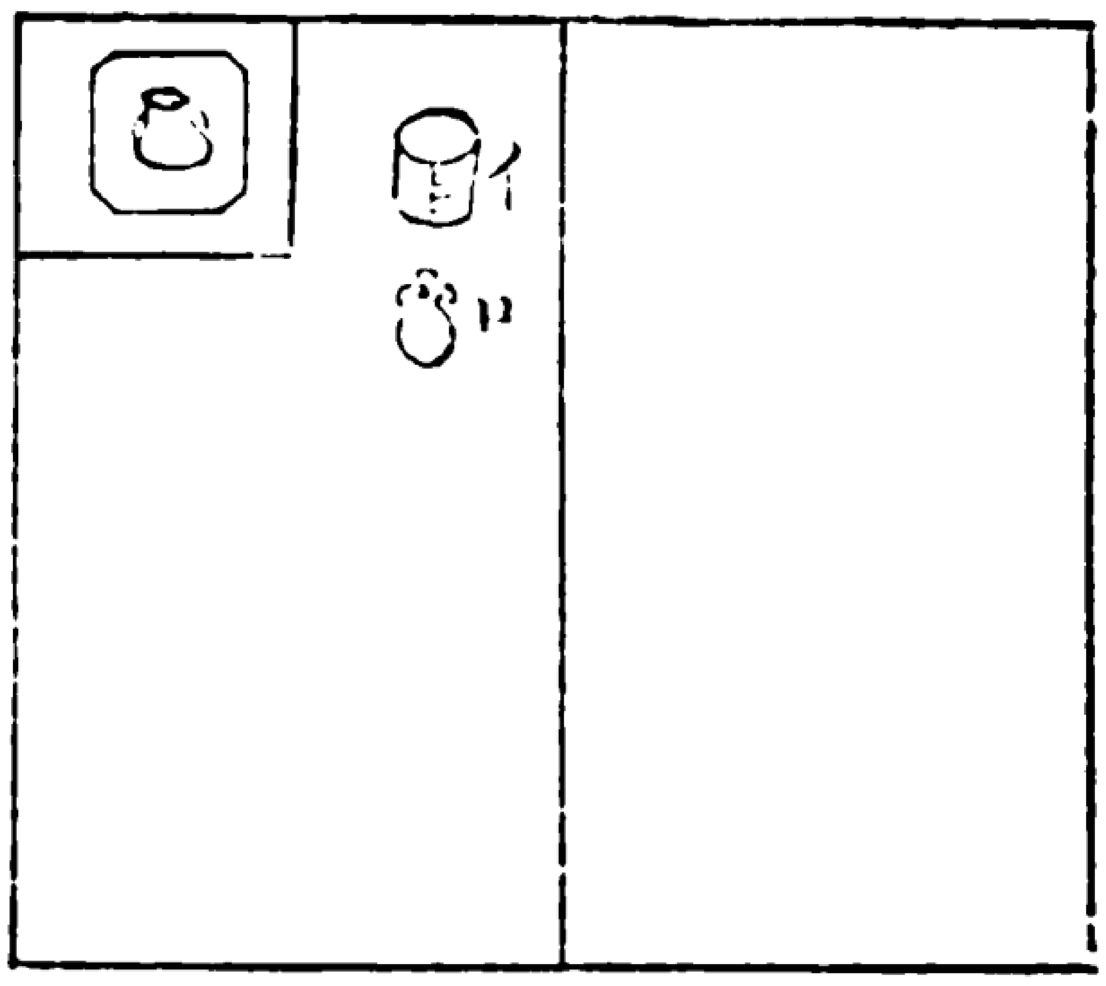


第一炭手前
第二同上

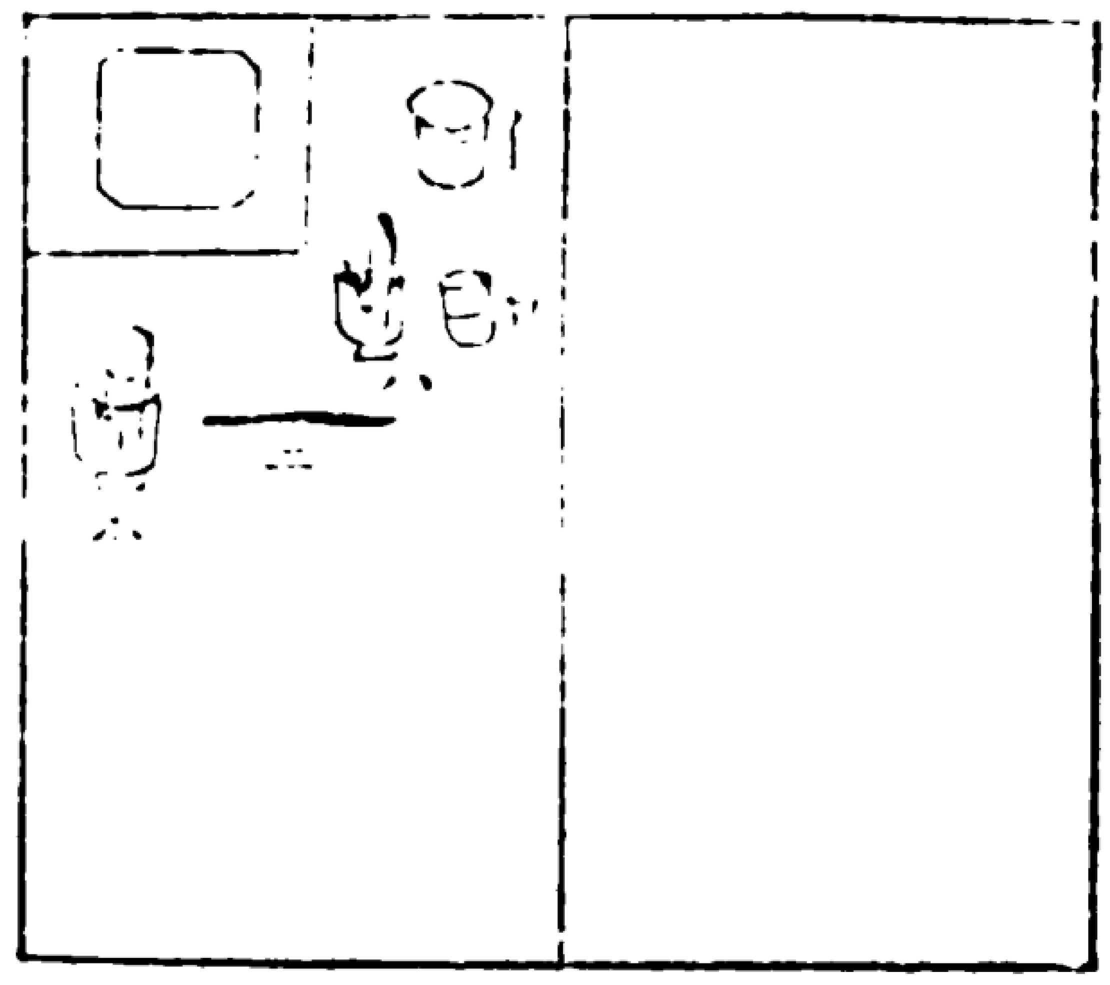
隅爐に限り、客方炭を爐邊に寄合て見る事なし。奈何となれば、爐角に在て、其の事質地に施行し難し。故に主炭をなして、既に釜をかけんとするに望み、客方より御釜、暫く御控へ可被降御炭拝見を願舛と

第三圖　イ、水指　ロ、濃茶入

第四圖　イ、水指　ロ、茶入　ハ、茶碗　ニ、居前　ホ、茶椀假置



客入テ後主茶碗持出シ置シテ茶入水指茶碗ト三ッ鉄輪ニ置合タル所
……
水指迄茶ル所水指過入置合タ従是客案内

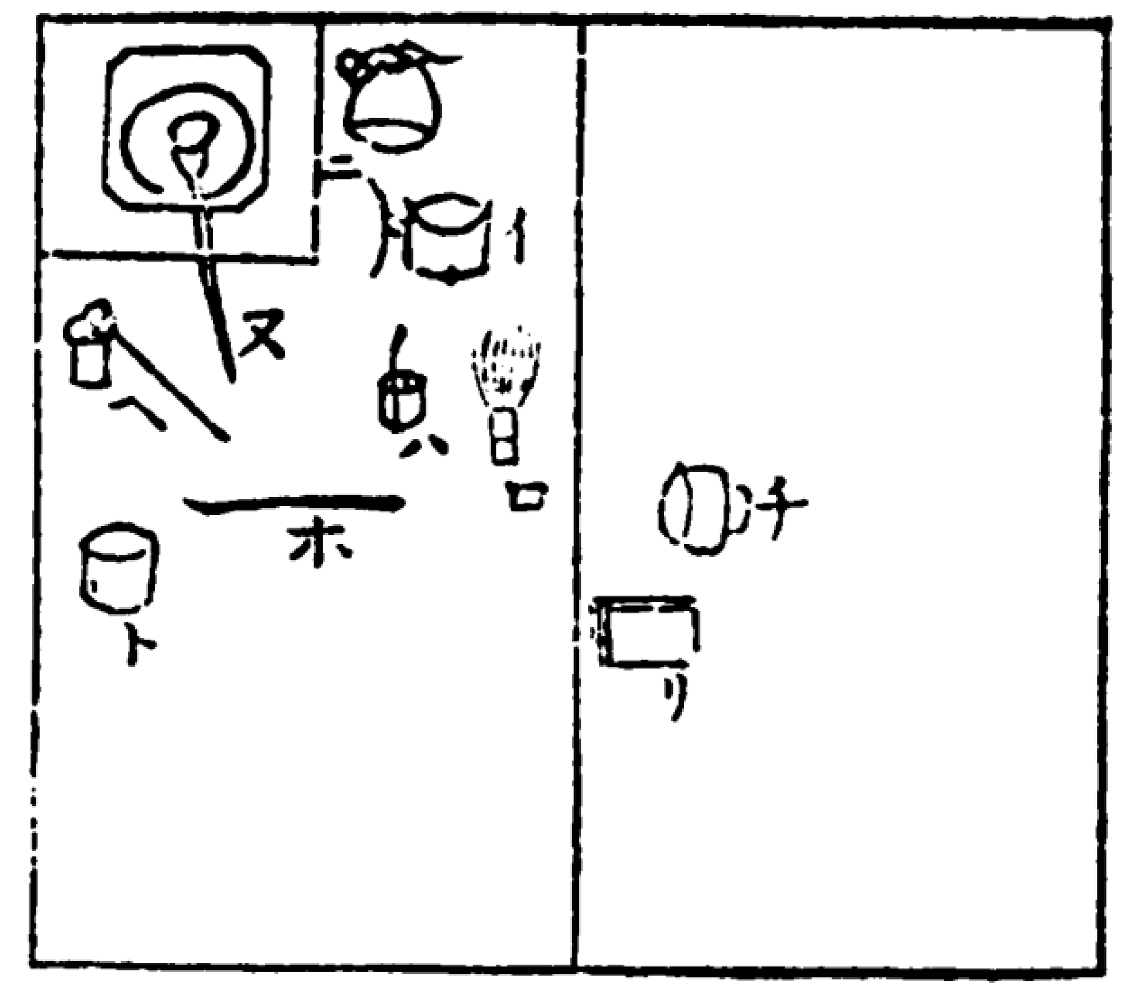


言述ぶべし。主方は、是を受て、灰焙烙を持立て、勝手へ入り、茶道口に控ゆべし。底て、客方は、上客より次客へ、御先きへと挨拶して、立て爐前へ進み、炭の置方巧拙を一覧すべし。序に炭取、及び上げ有之釜をも見るものなり。次客以下同斷の事を行ふべし。客方、末座迄見終りたらば、亭主は爐前に進み、香を焚べし。例の通り、客は拜見と言て賴むべし。主は圖式に示したる處へ出し、釜を掛くべし。此の時湯不足ならば、中水の手續あるべし。（但し中水を摑んと思へば、釜炭取の接近に寄たる儘、環を逃し置き、勝手へ入り、水指樂鑵の布巾を、じく〳〵に水を濕し、口に竹の蓋置をかけ、持出で、水を指、釜の蓋を〆、蓋置を片付け、布巾を取、釜の蓋を摘みを左手の指先にて押へ、右手に布巾を持ち、向前と、二つ拭ひ、夫から釜の肩胴、又前の方と、順次に拭ふべし。温度強き釜を、水氣を含む布巾にて拭ふ故、湯氣ハット立上り大に風致を副るものなり。而して藥鑵持込、又出て、釜掛るより、例の通、中水をして、釜の蓋を拭ひたるときには、三ッ羽にて蓋を不掃、直に炭取を持入るなり。次に座掃持出で、ざつと、爐邊炭取を置たる處自分の座したる處、掃籠べし。掃籠たらば、一旦、勝手口締切、客方より香合返りたる時出で、釜の蓋を切り、香合の方へ向ひ一禮して持入る。

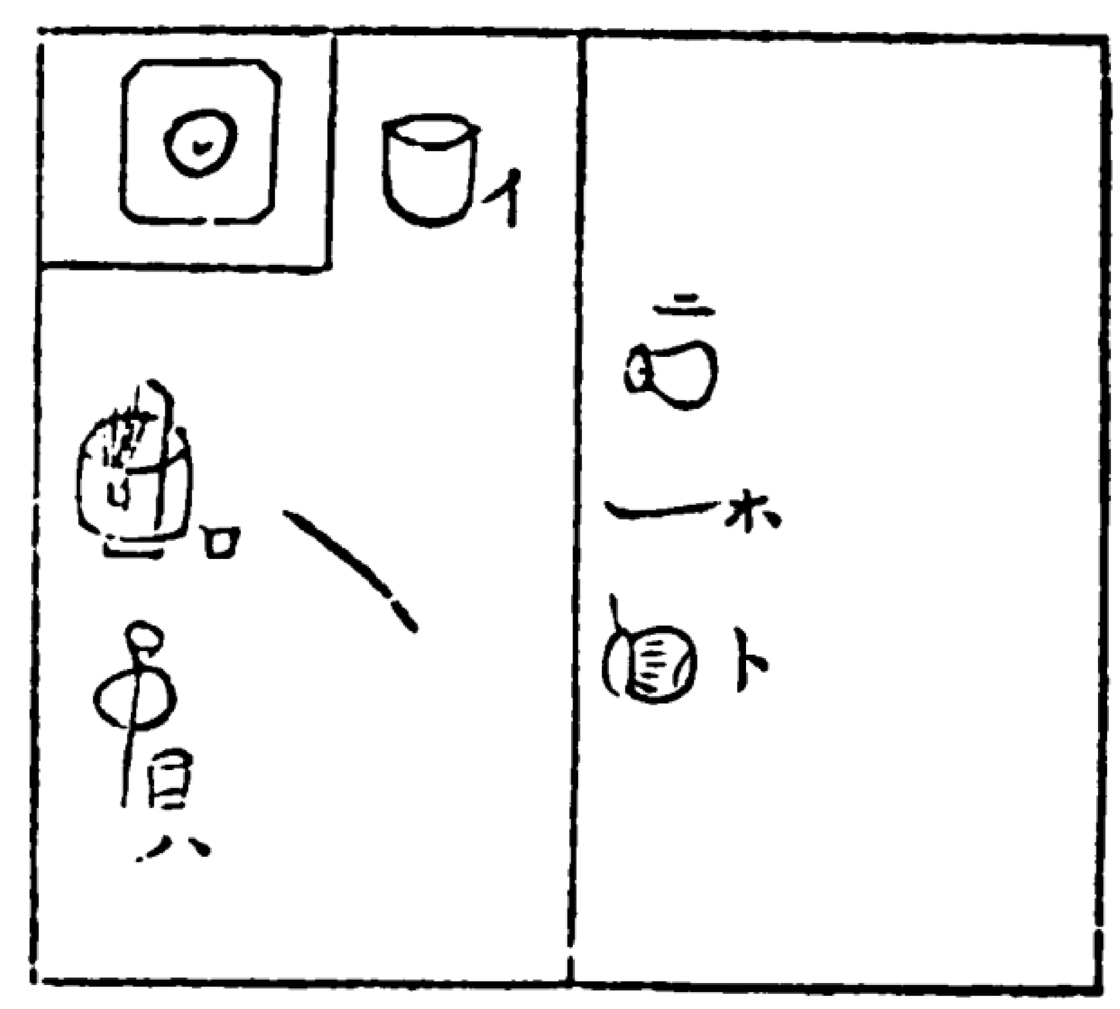
第五圖　イ、水指　ロ、茶筌　ハ、茶入上ニ茶杓　ニ、袋　ホ、居前　ヘ、柄杓　ト、建水　チ、茶碗出ス處　リ、帛紗　ヌ、柄杓釜ニ掛リタル處

第六圖　イ、水指　ロ、茶碗假置　ハ、建水柄杓蓋置　ニ、茶入任所望出シタル處　ホ、茶杓同シク　ト、袋同シク三器客方返スハ此反對ト知ベシ

第五圖　濃茶



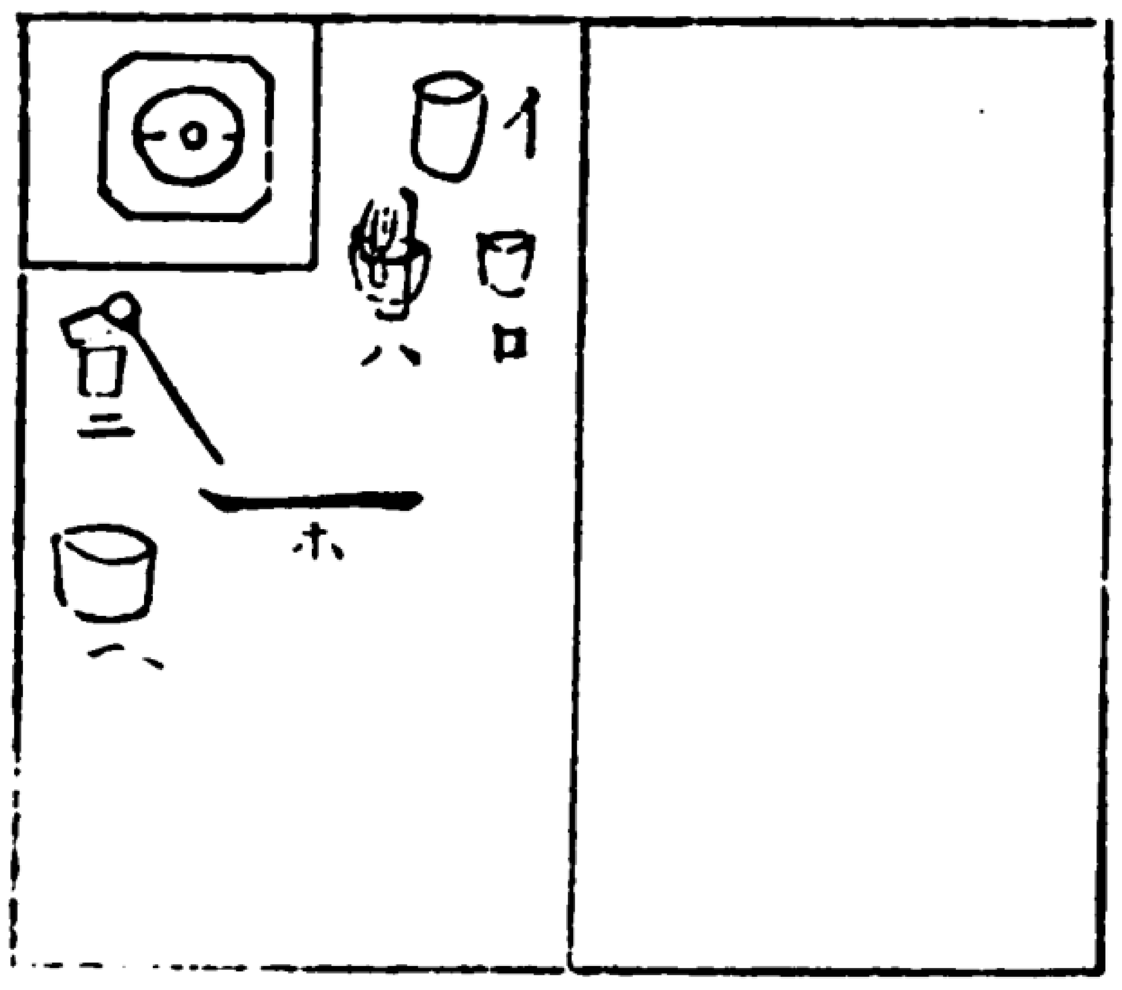
第六圖



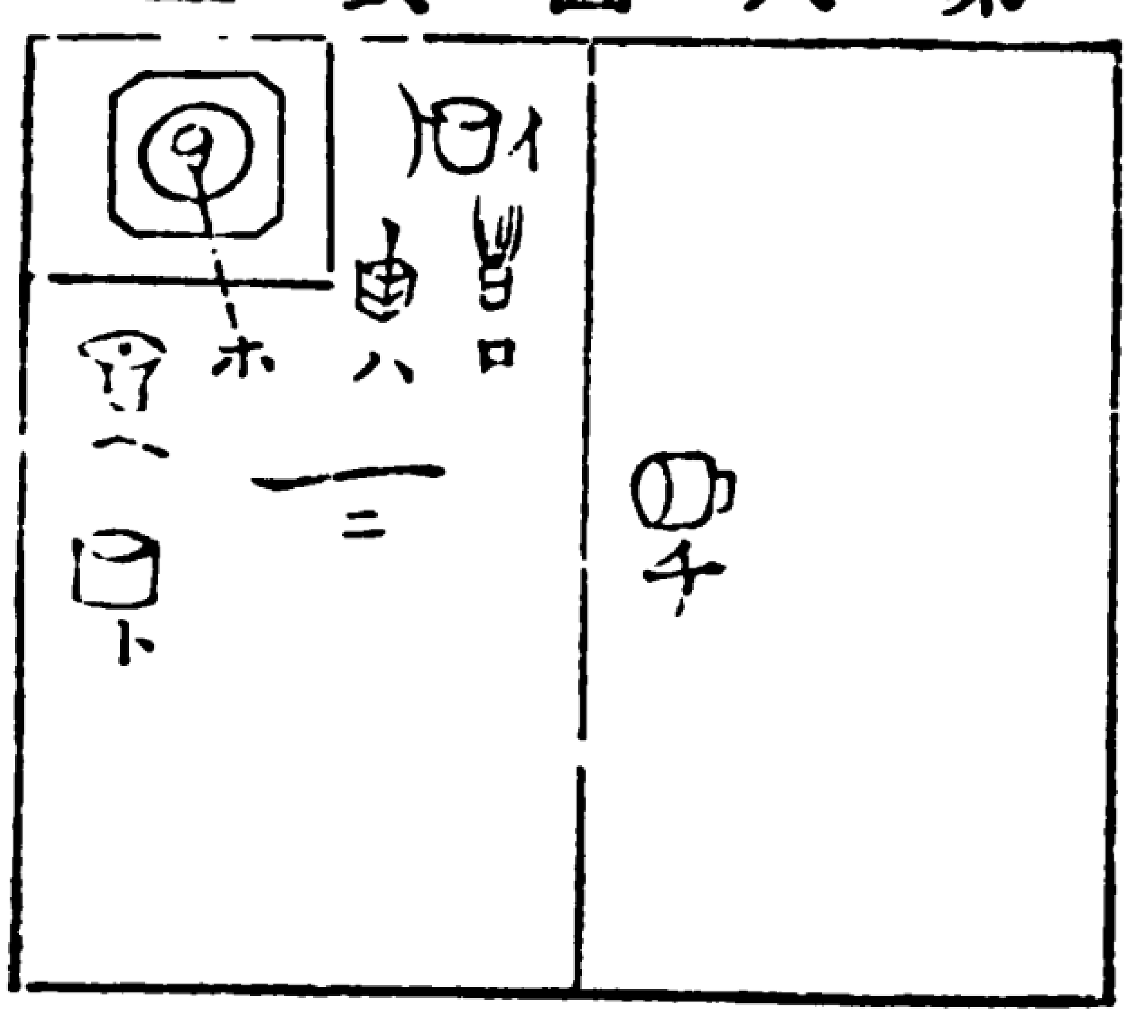
第七圖　イ、水指　ロ、薄茶器　ハ、茶椀内ニ茶巾茶筌茶杓　ニ、柄杓引タル處　ホ、居前　ヘ、跡

第八圖　イ、水指　ロ、茶筌　ハ、茶入　ニ、居前　ホ、柄杓釜ヘ掛タル處　ト、跡　チ茶椀出ス所

第七圖　薄茶手



第八圖　其二



女禮

有住つね子

稽古の仕方

同輩に盃を指し樣附受け樣

先たがひに、座敷の程よき所に座し、一禮なし兩手共、膝のうへに置く。其の時酌人は、三方へ銚子をくみ付け、左足よりしづかにあゆみ、双方の少し下座にすわり、中央へ、三方をすゝめ、銚子を前に置き、右手にて菊金の所を持ち、左手を膝わきへ付け、ひかひ居るなり。其の時、双方より程よき處迄すゝみ出で、先主人三方を引よせ、ふちを持て客の方へ向へ、三方の腰の中程へ兩手をかけ、すゝむる。客は、一度じたひなす。猶主人すゝむる。其の節たがひに、膝に手を置きたる儘、一禮なし、三方を少しわきによせ、右手をそへて、盃を取るなり。酌人左手にて、ねこ足の上を持ち、右左と二膝すゝみ、御酌をなし、すぐに二膝引きて、前

の通り扣へ居る。客人は、酌人のきたりたる方の手に、盃を持ち、御酒を受け、かるく戴き、のみほし、其の儘大ゆびにて、右左右と三度のみ口の露をきり、元の處へ置き、三方のふちに手を掛け、右へ〳〵と廻し、主人の方へ向へ、三方の腰の中程へ兩手を掛すゝむる。其の時、前のとほり、双方一禮なし、主人盃を取あげ、御酒を受ける。酌人は、前のごとくになし、すゝみ出、御酌をなし、二度扣へ居る。主人のみをはらば、前同樣、三度つゆをきり、三方へ置く、夫より双方元の座へ引、一禮なし、たがひに、次へ引くなり。酌人は銚子を、いつたんわきへ置き、三方を引よせ、自分の方に向へて、銚子をくみ付け、左手を三方の中に入れ、右手に銚子を持ち、二膝引て、右に立ち、左足より三足引き、右に廻り、左足より、しづかにあゆみ御勝手に入るなり。

臨時の客の應接（五）

三石直子

諸孃の、此度の女鑑を繙かるゝころは、年の末かけて春の初めなるべし。さては、最もこの臨時の客の多かるべきころなり。來む年のいとなみ、何かにつけて事しげきまに〳〵、一回ならず、其の次號さへおこたりしこと、いと面伏なるはざなりしか。いでや、例の綴稿を物して、諸孃の淸覽をこはむ。

正月といへば、例はあまり往來せぬ方々さへ、訪問するが多く、從ひて、酒食のこともしげかるべし。さて、主人も相伴して、獻しつ酬へつの酒宴にならば、盃コップなども別に出し、肴等も、更に出すべきことなから、其の客人の樣子により、又主人との交際の程度により、すべて斟酌あるべきことなり。但し失禮ならぬ樣、さすがに、また、入費多からぬやう、其の邊の心得しかとあらまほし。

客人に酒食を出し、時、時分ならば、密に主人に聞きて、供の者へも、座敷の都合を見はからひ、茶漬を出すやうにすべし。お利物は何なりとも飯の菜になるべき、有合の品にてよし。平なり、皿なり、澤山にもりて、香の物を添へ出すべし。酒は、様子を聞て、上戸ならば酒手にてつかすは差閊なければ、飲ませぬ方よし。途中粗匆ありては、却つて、客人へ失禮になるばかりか、迷惑をかけ、又、時としては亂暴などしいづるものなどありて、此方にても、思ひよらぬ迷惑を受くることあれば、こゝろすべきことなり。さて、飯櫃を持ちいで、打ちまかせおき、茶碗にたつぷりと茶を汲みて出しおき、食事をはりしころを見斗ひ、出で來り、よろしき様に挨拶して、道具を下げ、再、茶を出し、煙草の火などに、心づけつかはすべし。

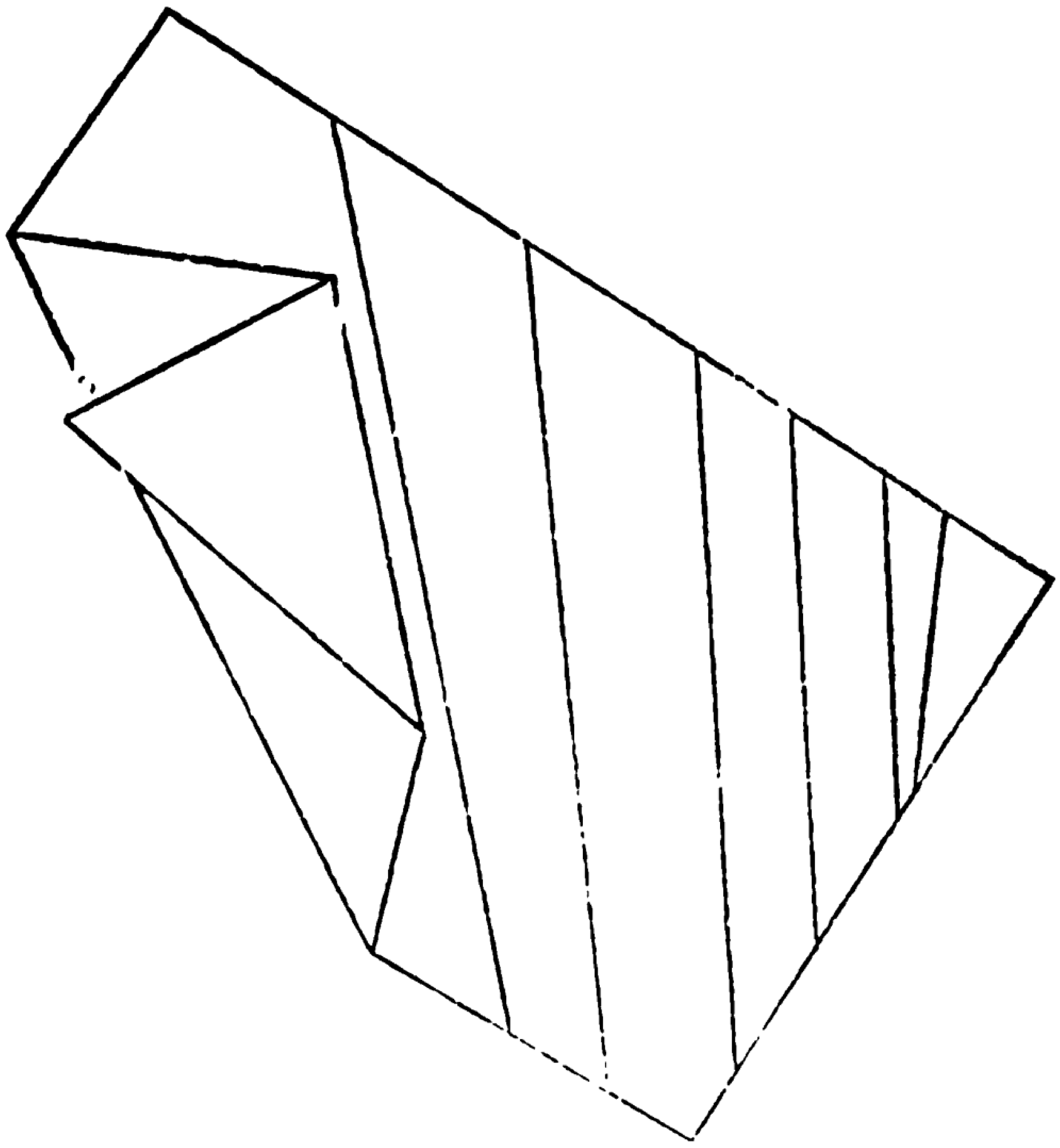
座敷の酒食濟みし後ならば、萬事都合よろしかるべけれども、濟むや否や、直に立ち歸らるゝ場合もあり。斯る時には、供の者にも、せはしき思せしめて氣の毒なり。客人にも、いくらか隙費せしめて、これ、亦失禮なるのみならず、今の世は、人車にてものする人のみおほかれば、其の車夫などに、食事後、直に勞働せしむるは、甚く彼等の身體を害はしむべければ、注意し、なるたけ都合して、座敷よりは餘程前に食事終らしむる様にすべし。

折方

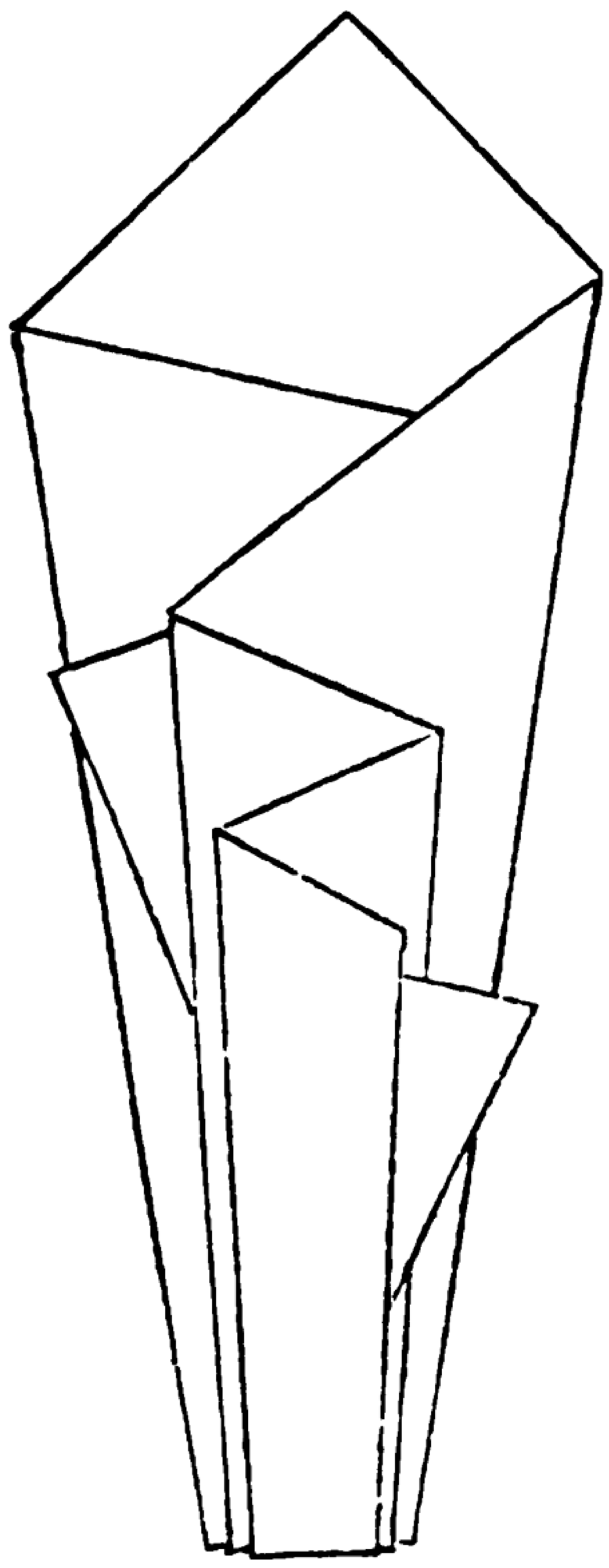
有住くわう子

毛抜包

（第一圖）



（第二圖）

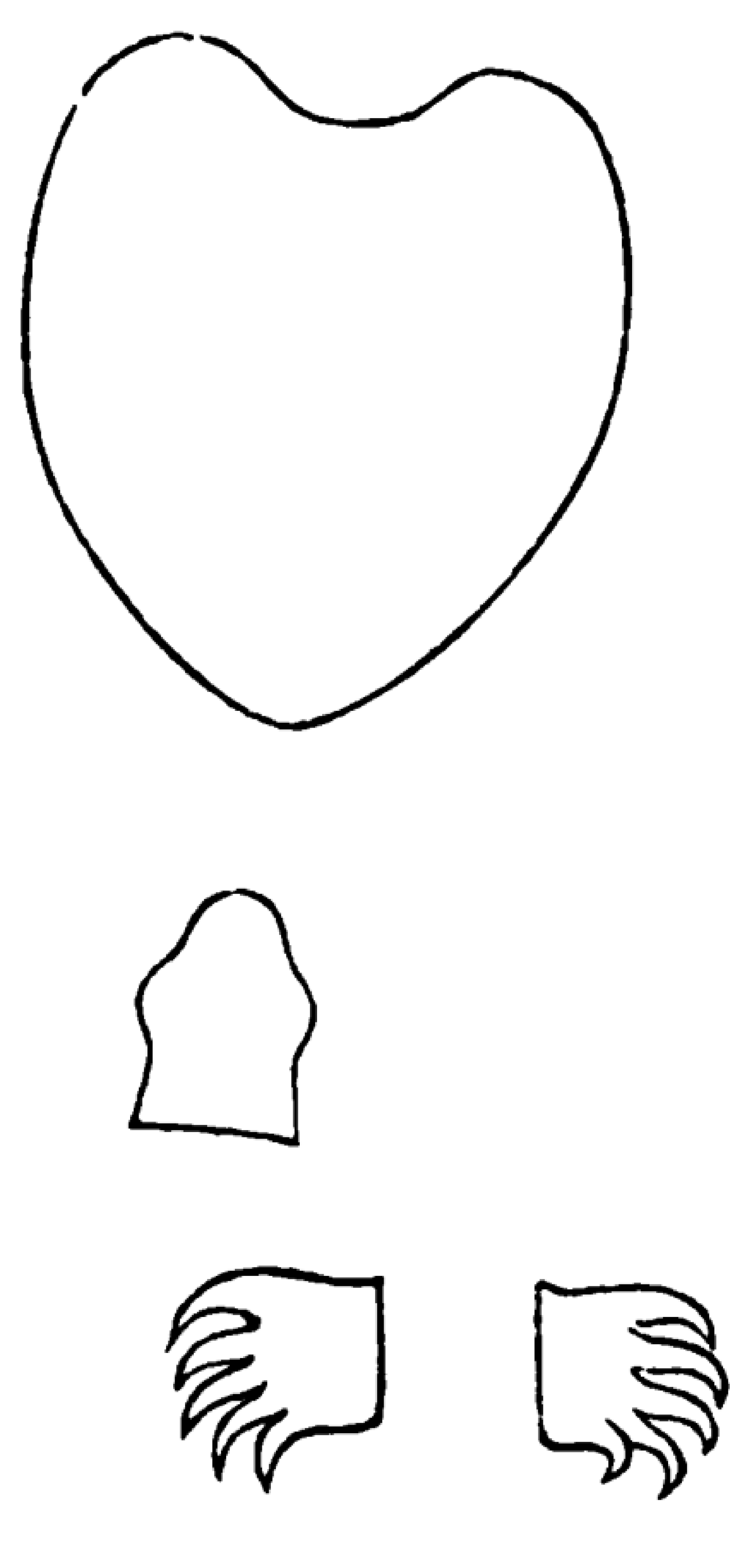


常に用ゐる所の品、水引かくる包方は、小木板に同じ。

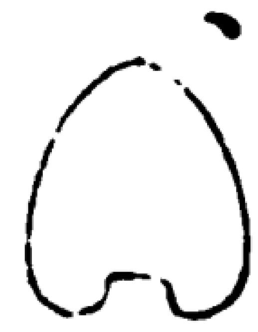
たちぬひ

背負ひ守り（承前）
龜の子形

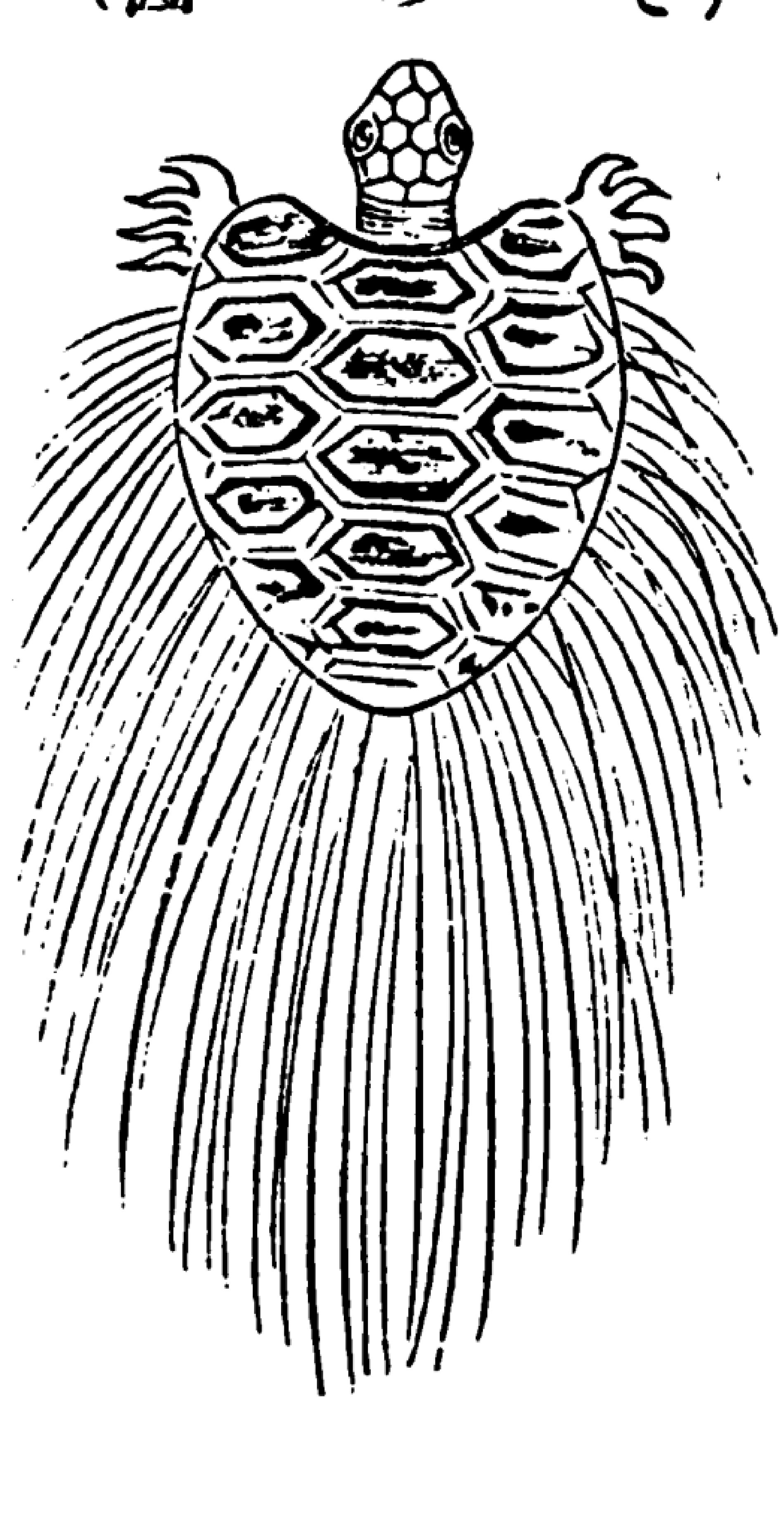
西山たい子



まづかやうの形を、厚紙にて切り、首と手とは厚紙のまゝにて、金泥、墨にて書き、胴には、綿を、多く、高く入れ、白き切を被せ、背を龜の甲の如く六角に書

き、その六角より、少しかやうの形したるものを、
小さき六角の形、即ち、別に九つばかりつくりて、
其の畫きたる六角の中へのりにてはりつけ、まはりに
ぐるりと絹糸を下ぐべし。但し、六角のものは、金紙
にてもよろしけれど、紙にては、ぢきにわろくなるも
の故、金らんのくずなどを用ゐればうつくしく、また
白き切を金泥にてぬるもよろし。まわりの糸は、ぬけ
ぬやうに、中は切らずにおき、龜の子の裏がはの厚紙
に濃きのりにて、ぢやうぶにはりつけ、首をつけ、手
をつけ、かやうの形したるものをつくりて、は
裏に、りつけて、とむるなり。圖を見て推すべ
し。但し何ものをつくるにも、眞中に、綿を、多く入
れて、高くし、まはりは低くすべし。之もまわりを低
くし、上の方より眞中には、他の物よりはまさりて高
くすべし。綿を高く入れたる方、りつばに見ゆるなり。
又、絹糸をはりつくる折り、其の絹糸の眞中を一すぢ
の糸にてくゝり、それを輪になしおきて、首の方に出
し。背につくる時の用意とすべし。すべて何物にても、
裏表はりつくる間に、一すぢの糸を輪にて入れおく時
は、背につくる時に便りよろしかるべし。

（その圖）



だいどころ

蘿蔔の粕漬

大根の葉を去り、能く洗ひ、二三日程、日光に干し、
味淋粕に、鹽を交ぜ、（味淋粕なき時は酒粕にても宜

し）樽の底に、粕をおき、大根をならべ、又、粕をおき、だん〳〵と、漬込み、ふたをして、めばりをなし、來春に至り、用ふべし。鹽は、薄き方風味宜しけれども、ながく貯ふるには、からめにすべし。

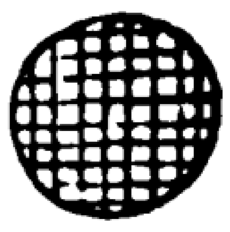
蕪青の粕漬

大根の粕漬と同じ方にて宜しけれ共「千枚漬の如く、薄くきりて、粕を、間へはさみて漬る時は、早く用ゆる事を得べし。

蕪青の辛み漬

小蕪青を、薄くきり、鹽をふり、おしをおき、一夜漬置き、翌日取出し、洗ひて、水氣を去り、更に、柚子の皮と、唐がらしを刻み込み、柚子の絞り汁に、醬油を加へ漬べし。

蕪のアチヤラ漬

蕪の皮を去り、圖の如く、庖丁めをいれ、一時間程、鹽水に漬置き、取出し、次に、一時間程、酢の中に、漬置き、次に砂糖のあくを去りたるものに、唐がらしをいれ、沸騰たて丶、其の中に、一日程漬て用ふべし。白菊の如く見事なるものなり。

刻み漬

大根の葉と根とを切はなし、能く洗ひ、葉の和らかき所を、小口より、こまかに刻み、根は短冊にきりて、當分に交ぜ、鹽をふり、能くもみて、樽、又は、桶に漬け、壓石をかけて、二三日、經て、用ふべし。

菜花園

冬の草木くさ〳〵（四）

○新生姜　生姜は生薑ともかき、しやうがと云ふは、字の音の急呼かと云ふ。又生荷などともかくなり。一説に蘘荷は女がなり。生荷は夫がにて、雌雄に比して、めうがせうがとのべて云ふなりと、古名くれのはじかみ、或はおなはじかみ、又つちはじかみ、後には單にはじ

かみと云ふ。種類に赤薑　白莖姜　大姜　清國大姜
印度大姜等あり。新生姜とは、促成軟化法を用ゐて作れるものにて、本月ころより賣出すなり。

○冬至梅　冬至前後に花開く。一重もあり、八重もあり。香はさすかにうるはし。

俳　なにはつに習ふ梅の冬至かな　宗因

同　盃に一陽得たり冬至梅　竹叟

十二月手入すべきもの（２）

澆灌すべきもの

牡丹　海棠　諸色の花木、皆宜しく肥を澆ぐべし。

培壅すべきもの

牡丹　芍藥　石榴　柑　橘　梅桃　橙　梨　柚　楊梅　瑞香　栗　棗　柹　桑　諸種の竹

整頓すべきもの

薔薇　荼蘼　紫笑　倶に霜を避くべし。

木香　細嫩條を删るべし。

竹木を伐り溝泥を浚ひ揚けて、寒氣に凍えしめて肥土となすべし。

菘類其の他

菘類は、秋末冬期間は、蔬菜品中、尤も多量に消費せらるゝものにして、種類多く、之が栽培、亦頗る盛なるものなり。此の種に屬するもの山東菜　白菜　躰菜　三河島菜　小松菜等なり。

△山東菜は形扁厚にして、葉色淡綠色にして、缺刻あり。性質柔軟なる事は、人の知る所なり。清國の元産にして、明治八年頃本邦に傳來せるものなり。

（山東菜の圖）



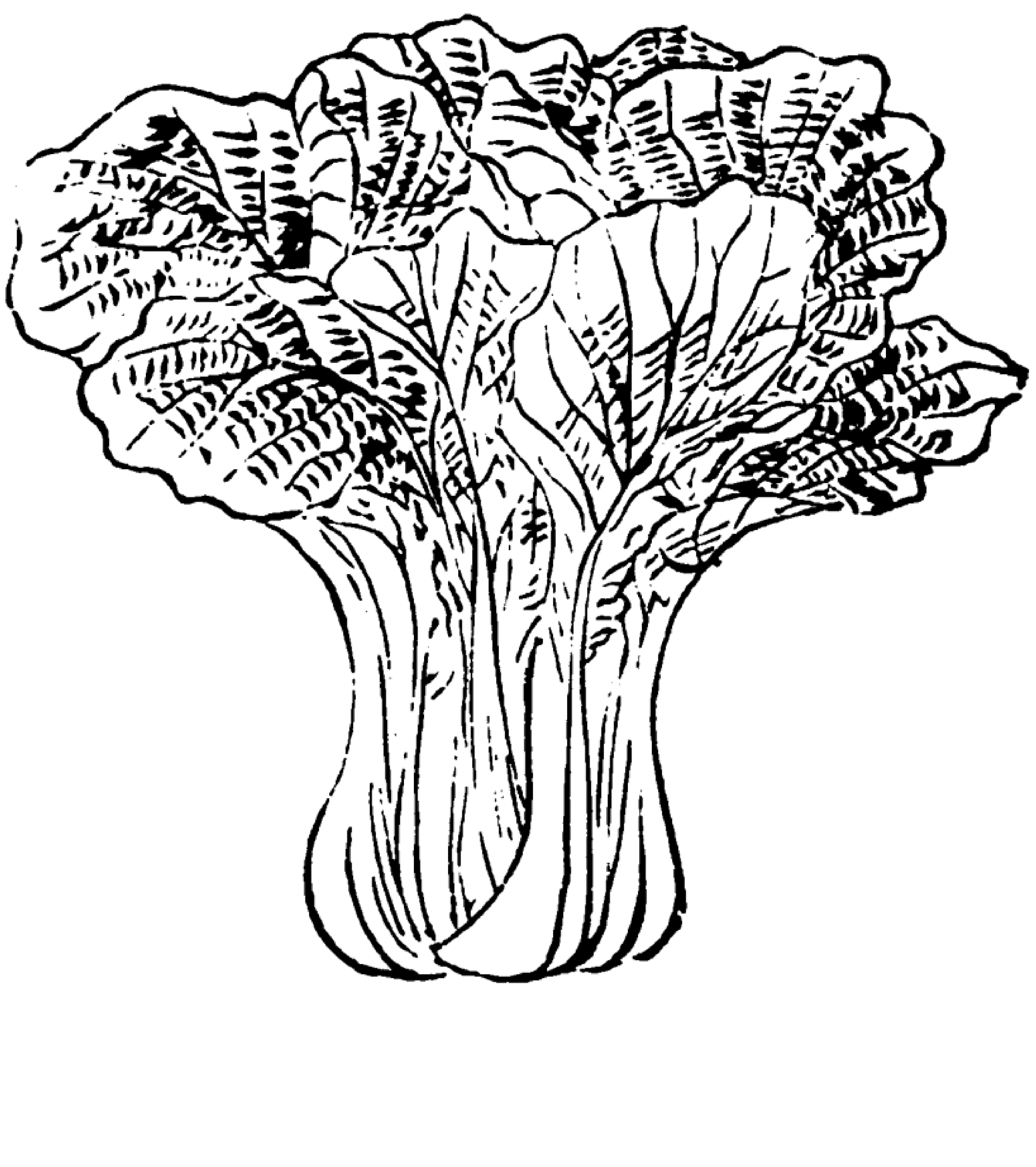
△白菜は莖状短潤にして、葉色淡黄綠なり。葉状は缺刻なし。質柔軟なり。前種と同じく清國の元産にして、葉に皺あり。味前者に劣れり。

（白菜の圖）



△躰菜は、莖状短潤にして、淡綠色なり。葉状缺刻なし。質柔軟にして、莖の下部に、葉接着せざる爲め、たやすく、前二者とを區別するを得。

（躰菜の圖）



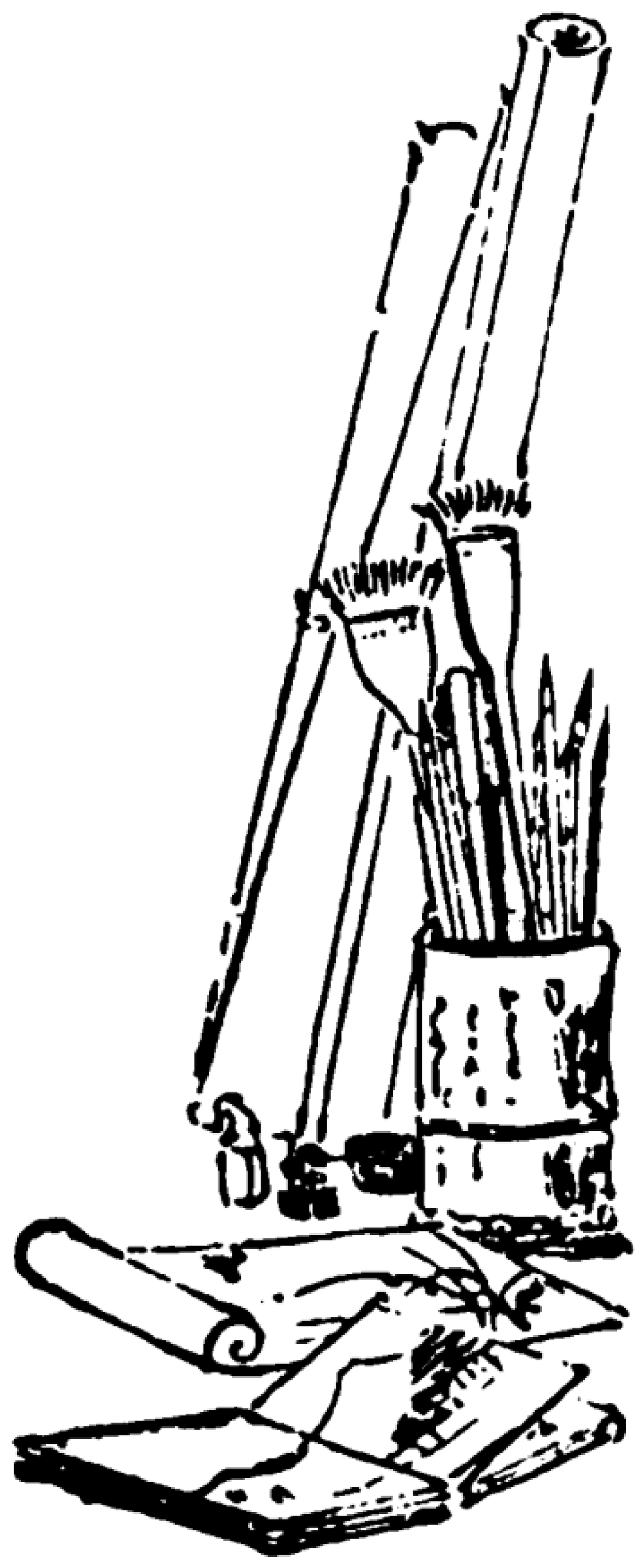
△三河島菜には、劔先種といへると、杓子葉種との二種あり。前者は、色綠にして、缺刻あり。質、や丶、粗剛にして、眞の三河菜にして、味後者にまさるも、外觀惡しき爲め需用少なし。

後者は、莖状缺刻なく、ことに質柔軟外觀、また、うるはしく、山東菜に似たる點あり。盛に栽培せらる。

△小松菜といへるは、莖状細少、淡綠色にして、葉状

缺刻なく、質やはらかにして、秋のものを小松菜と云ひ、冬のものを冬菜、春なるは鶯菜と稱す。

尚ほ、山東白菜と名つけ、山東菜の如く、葉直立することなく、横に廣がり、葉面粗にして、多少の茸毛を生じ、一見劣悪種の如く見ゆるものあり。然れども、此の種は充分に生長せしめたる后、藁、又は、繩にて圍繞し、軟化せしめば、肥大にして、品質善良なるものを得べし。白菜にも、朝鮮、又は、支那原產の白菜ありて、在來の需用增加し、栽培區域は廣りたると山東菜の比にあらず。其の他、三河島菜の如く、漬菜用に供せらるるものにして、各地の氣候、土質に應じ、多少變化したるもの少なからず。



學園

源氏物語講義（卅四）

下田義天類

あしたに起きさせ給ふとても明くるも知らでとおぼしいづるにも猶あさまつりごとは怠らせ給ひぬべかンめり。ものなどもきこしめさず。あさかれひのけしきばかりふりさせ給ひて大床子の御物などはいとはるかに思食したれどはいぜむにさぶらふ限りは心苦しき御けしきを見奉りなげく。すべて近うさぶらふかぎりは男をみないとわりなきわざかなと云ひ合せつゝなげく。

此の段も、陛下の御樣子を書き續けたる所なり。

○あしたに起きさせ給ふにもとは、前段の燈火を挑げ盡して起きおはしますと云ひたる所を受けて、書き

たるなり。夜々燈火を排げ盡して、起きおはしますのみならず。たまさか、臥所に入らせ給ふ時は、また、旦に起させ給ふとても、更衣の世にありし時は、明くるも知らで寐しものをと、思食し出させ給ひてとなり。

○明くるも知らでと思しいづるにもとは、彼の伊勢が詠める長恨歌のうたを、事實の上に思食し出させ給ひてと云ふ義なり。伊勢の歌の事は、第廿七回の講義に、委しく云ひおきたる通りなり。即、玉すだれあくるも知らで寐しものを夢にも見じと思ひかけきや。と云ふ歌なり。爰は、此の歌を思食し出したるには非らず。更衣御在世の時には、御睦かたりに夜を更して、その翌朝は、夜の明けしをも知らで寢しものをと、事實の上より思食し出したるにて、その事を叙するに、彼の歌の言葉を借り用ゐたるまでなり。主客を混ぜざるやうに心得べし。

○猶あさまつりことは怠らせ給ふ可かんめりとは、更衣御在世の折に、朝政を怠らせ給ひしのみにあらず。御逝去の後までも、猶、御政道を御怠り遊ばさるべき程の御樣子なりと、双紙地より評し奉りたる言葉なり。此のあさまつりことと云ふ語も、例の長恨歌より取り出したるものなり。彼の歌に、春宵苦レ短日高起從レ是君王不二早朝一とある、不早朝の語をその儘爰に引用して、事情の變りたる愁傷の上に、應用したるものなり。此の猶怠らせ給ふべかんめりとある、猶の字、最も味ある用ゐざまなり。細流抄（西三條公條卿の著にて二十卷程ある源氏の註釋本也）にも、爰を評して、長恨歌には貴妃の寵によりてなり。爰は、更衣の御歎に怠らせ給ふなり。猶の字殊勝なりと言ひ置かれたり。また、彼の評釋には、其の上を評して、此の細流の説よし。樂みと悲みと取替へてしたるにて、少しも彼を襲はずして、反りて新らしく、愛でたきひゞきとなれりといへり。その働きは、たゞこの猶と云ふ一字にあることなり。

さて、此の一句の意は、夜々まどろませ給はざるのみにあらず。あしたに起きさせ給ふにも、あはれ更衣の世にありし程は、彼の玄宗皇帝と楊貴妃との中らひを、伊勢のやまと歌に詠み置きたる如くに、朕もまた明くるを知らで寢しものをと、思食し出でさせ給ふに付けても、萬物憂げに思食させ給ひて、例の長恨歌に、從是君王不早起とありし事情とはこと變りて、彼の更衣は、世に座しなさすならせ給ひし後も、猶やッぱり、朝政をも怠らせ給ひぬべき程の御樣子なりとなり。

○物なども聞し食さずは、前條の次第なるが故に、陛下は食あがりものなども、聞食し給はぬ由なり。

○あさがれひのけしきばかりふれさせ給ひては、少し心得難き所あり。新釋に、‖の文字穩ならず。若くは‖のみとありしを脫せるにかと云へるは、然もありぬべき考なり。されど朝餉のみ、景色ばかり觸させ給ひてなり。朝餉は、供御調進の以前に、女房などの手より、假に奉る食上りものなり。下々にて云へば、朝の茶受など云ふ程のかりそめの物なり。元來我が中古以前の俗は、一日の食事は、朝夕の兩度にて、今の如くに三度づゝ食ふは、中古以後の俗なり。朝廷は、誠に近くまで、此の風を守らせ給へり。故に、朝御食をば、成る丈遲く差し上げ、夕御食との間の時間を、少しなりとも縮むる手段を取りたるものなり。殊に大盤所の調進は、毎朝、殿上の諸係員が出勤して調進に取掛る事なれど、自然時間を遲くなりて、晝近くに奉る事常の樣なれば、其の間に、假に一時の御凌として、女房衆より朝飯をほとばしたるもの、又は、粥などたきて進りしものなり。故に朝粥とも、朝餉とも云へり。因に云ふ。此の朝餉の爲に、眞の朝御食は、後次第々々に遲れ〳〵て、殆盡御食となりし故に、朝餉にも、又本膳を供進するやうになりて、遂に二食か、三食とは成れるなり。民間の二喰か、三喰となりしも、これと同じ姿にて、今

の様にはなりしものなり。さて、茲に朝餉とは、右の女房より假に進じたる朝御饌前の、御凌の料のものなり。夫にのみ、少しばかり御手を觸れさせ給ひてなり。

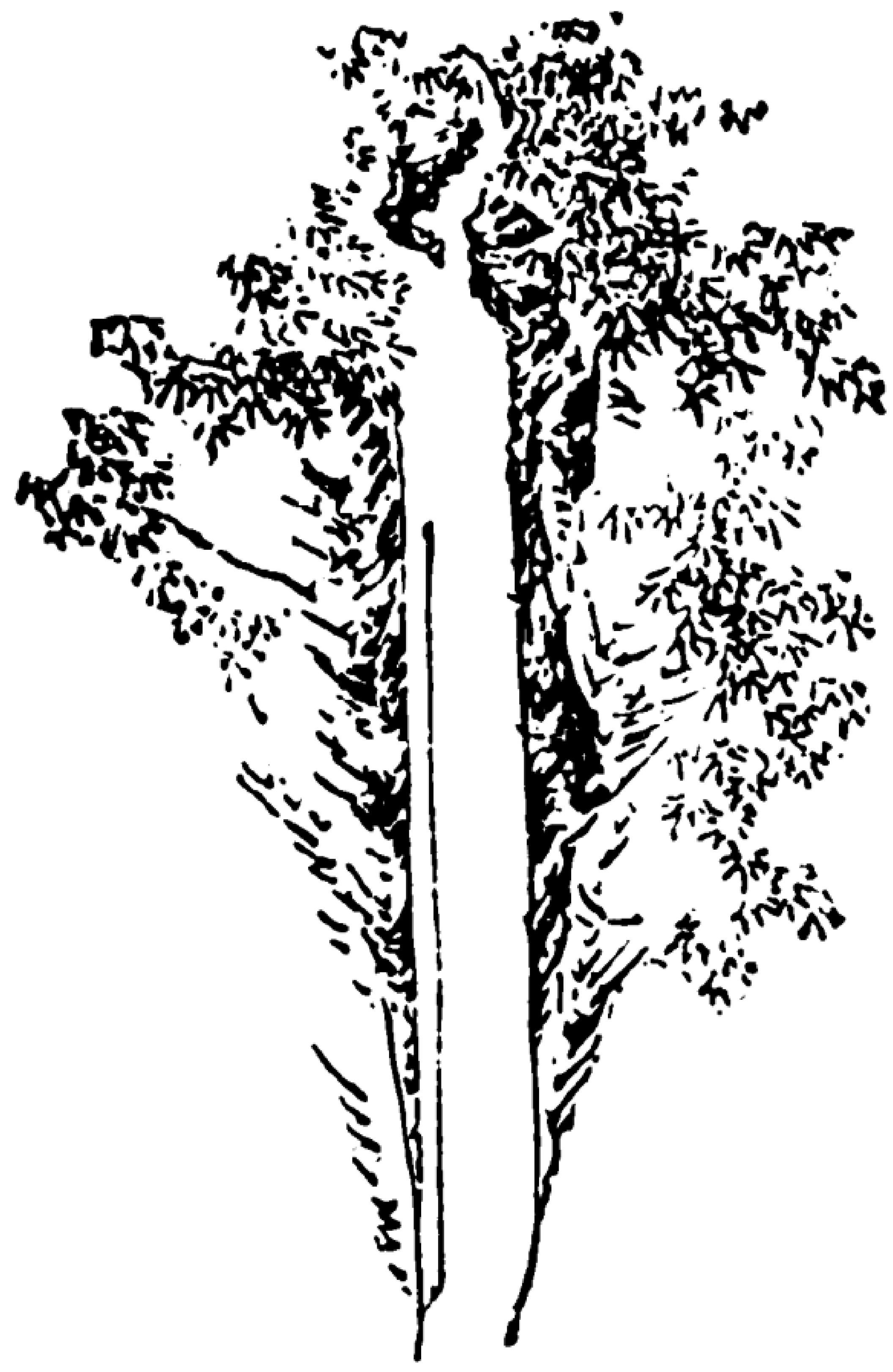
○大床子の御もの。大膳司より供進したる、本式の朝御饌なり。○いとはるかにればしめしたれしば。その本式の朝御饌に、御手を着けさせ給はむ御心は、いと遙に遠き事に思食したればと云ふ義なり。猶云ひ直せば、それを食し上らむなど、云ふ御元氣は、所詮六つかしく、遠く及ばぬ事に思食したればとなり。

○はいせむにさぶらふかぎり。陪膳に侍らふ限りなり。陪膳は給仕なり。朝餉は女房陪膳し、大床子は殿上人陪膳する由。西宮抄、大槐秘抄などに見ゆ。その人々は、殘らずといふ義なり。

○心苦しき御けしきを見奉りなげく。心苦しきとは、陛下の御いたはしき御景色をなり。物も聞食さず。御愁傷せさせ給ふ御景色の、御いたはしさを見奉る人々は、皆其の御心を恐察し奉りて、愁歎したりとなり。

○すべて近うさふらふかぎりは云々。たゞ、陪膳にさぶらふかぎりの人々のみに非らず。都べて、陛下の御側近く伺候するかぎりの人々は、女も男も、皆等しく、何とも申さむやうもなき次第かなと云ひ合せて、御同情に打れつゝ、愁歎したりとなり。さて此のすべて云々といふ所を、彼の評釋に評して云はく。陪膳にさぶらふかぎりは云々と云ひて、又近う侍ふかぎりは云々と云へるは、徒に重りたる如くなれども然らず。爰は、帝の更衣を寵し給ふ事のとぢめなる故に、殊に首を起して、都べて云々と云ひ、又立返りて、そこらの人の譏恨をも云々と語りて、終に他朝のためしまで引出しつゝと云へるにて、巻首に、人の譏をも得憚らせ給はず。世の例にも成りぬべきと云ひ、揚貴妃の例も引出つべう成り行くにといひ、遂に天の下の人のもてなやみ種と成りたりと云

へる事の、首尾を合せて結びたるなり。偖楊貴妃の例と云へるよりこのかた、彼の長恨哥の句を取りて、こゝかしこ挿み入れたるが、彼の意の儘には取らずして、皆事を替へて引用ゐたるなど、都べて妙なりとも妙なる事にて、諸越人の、いはゆる換骨奪胎の法といふべきこゝちせりといへるは、能く許し得たる言葉なり。合せ見て、この所を味ふべし。以上一くだりの大意は、よく聞えたれば、再びとり束ねていはむはかへりて煩はしかるべければ、こゝには差し置くべし。



漫録



續人名（十）

釋法忍

をとこ女にかぎらず、年よれど、ぐちにもなり、心にひかみもいてくるものなり。それが中にも、をとこは心さばけたるものにて、意に入らぬとは、當座にいひもし、しかりもし、おとなきものなれど、女はわかきときより、心におもふ事いひもやらで、くよ〳〵と、むねにつゝみ、それより、いろ〳〵のうたがひもおこり、さきにておもはぬ事までおもひ、すこしうらみ、ふかくねだみ、そねみもつよく、としよるにしたがひ、ぐちにもなり、ひがみも出來るなり。されど、世の中に嫁姑の中のよきはまれなり。ことわざにも、よめし

うとめの中のよきは、もつけの内なりといへり。いかなれば、かくまで、中のあしきことよ。つら〳〵かんがへ見るに、すべて、嫁は舅姑をつとにしたがふべきものにて、ことにいまだ年もゆかで、はじめて、他人の中へ出でうゐ〳〵しければ、ものごと心をくれ、どうぞ、しうとしうとめの心にかなひ、をつとの氣にも入りたきとのみおもひ、中々しうとめへあしくあたらんこと、おもひもよらず。もちろん、その内には、心たてあしきもあらんが、なれども、これとても初のうちには、なにかにつき、かつてもしれねは事なづくまでは、しうとめをたよりにすべきことなれど、ものごとゑんりよがちなるべし。しかるに、よめしうとめの中あしき、そのもとは、しうとめのおとなしからず、ものごとおもひやりのなきより、事おこると見へ侍るなり。その故は、わがかはゆきむすこに、よびむかへ嫁すからは、産のむすめどうぜんにおもひ、ずゐぶん不便をくはへ、としわかにては丶のふところを出で、みずしらずのたにんの中へきたり、さぞうゐ〳〵からんと、よめの心をくみわけ、ものごとあいあいしく、心へだてなくおしへならはせ、よめの心つかぬ事は、としわかなればそのはづとりやうけんして、心をつけ父うへへのつかへよう、夫へのつとめかた、人あしらひ、身こしらへ、立ふるまひ、せたいのとりはからい、めしつかひのつかひかた、おり縫ひ等に至るまで、とゝかぬ事は、手を取りて、くはしくをしへ、よしやよめのあやまちありて、舅をつとのきげんあしきせつは、そでよりとりなし、あやまちをつくのひつかはし、人のをらぬ時に、ねんごろにゐけんをくはへをしへ、とかくよめの身のたつやうになさをけかけて、いたはりつかはさば、いかなるよめにもせよ、その心ざし、身にくみて、實の母より有りがたうかたじけなくおもひ、しうとめをしたひ、つかへかたもよく、なにごともそむかぬ心になり、信をもつくすべし。かくあらんはどならど、よめしうとめの中のあしきことと有べ

からす。しかるを、さはなくて、よめに來るからは、なにもかもなる様に心得、おれのこれのとようしやなくせめかけ、そのしやうがそでない、こゝがわるい、あそこがわるいの、これはなるべきはづじやが、これしきのことのならぬは、そのとしまでなにしてゐた事ぞ、よめをとるは、なにのためぞ、なにかの世話をもさせ、心のしわをものむし、らく〳〵とおてらまゐりでもし、たふとい御くにへいかうぞかりのたのしみなるに、此のやうになにから何まで、世話になり、けつく世わのたねをもうけ、むねのやすむまもおじやらぬなど、てまへの新よめの時のつらさを打ちわすれ、をひきを付てたけりたつるにより、よめも大がいはどういはれても、てまへのたらはぬゆゑと、おもひあきらむれども、たびかさなれば、つらさのまゝ、さとのかゝ様おらむからはわるまいと、これよりへだつる心いでき、しうとめは、右の心から何かの事が氣に入らず、わが意にて心つかぬ事までも、ほんの子ならむ、からは有まいと、それよりよめをにくみたち、はしの上げおろしまで、目を付け、いろ〳〵なんくせをいひ、茶のみ咄にもどう、てらまゐりにも、たゞ、よめの事ぞかりかぞへたて、人をひとり見付ると、はや、おらがよめはどうで、かうでと、あること、ないこととり付けていひのゝしり、いぶしたてられ、よめは袂のかはくまもなくうらみ、かゝらぞ、かはむきもすゝます、おのづから、立居返事もおも〳〵しければ、おれにせわやかすさへあるに、かはふくらすの、ふてゝ、へんじもはら〳〵せぬのと、かれにつけ、これにつき、つらきめを見すること、扨〳〵なさけなき有さま、きくも中々かなしき事どもなり。まづよくものをりやうけんして見給ふべし。しうとめの四十五十になるとしの才覺と、十七八になるよめの心と、何とておなじからん。そのしうとめも十七八のよめざかりには、としよりたるときほどには、才覺はたらきもなく、さだめてうきめにあひぬらん。すべて、としをかさね、こうを

つみてこそ、上手とはなるものなり。いはんや、としもゆかず、心もかたまらぬものが、はじめて、他人の中へ出しものを、數十年、おなしせたいを取わつかふたる身の、いまだ年もゆかで、西も東も志れぬ所へ來りしものを、わが心のやうになさんとて、とやかくいふは、第一大きなるむりなり。そのうへわが身のわかゝりし時、何かに心つかざりしことをもおもはず、志うとめがかりのつらかりしをも、おもひやらで、よめをむごくつらくあたること、さりとは、心なき志かたなり。これひとへに、女はねたみそねみの心たかきうへに、としよりて、こゝろざしひがむゆゑなり。たうぶんてそわし手もたつしやなれど、心のまゝに自由をはたらけども、人げんの一しやうはかぎりあるものにて、行く年は水の志ばらくもとゞまらぬにひとしく、一年ましに老はかさなり、氣はつかれ、血はかはき、古木の枝のくつるゝがごとく、手足も心のまゝならず、こしひざはいたみ、立居じいうになりがたく、心はをれて、ればえはなく、何ほどかのつよき志うとめにても、よめのかいほうをうけねばならぬなり。そのときこそは、むかしのつらくあたりしことのはつかしからめ。またよめたちは、いかにつらかりし志うとめにても、孝行するが道なれば、いせんの事をわすれ、志うとめとしより給はんには、いよ〳〵あいらしくねんごろにかいほうあるべし。さすれば、志うとめも、その心ざしをかんじ、まへ〳〵の手まへの非を志り、かへつて、はぢ入り、それよりむつましくなるものなり。志かるを、ゑんだいうけとると、いなや、はや馬の野にはなされたるがごとき心になり。なにかのこと心のまゝにはからひ、いせんのつらさもおもはで、心ざしわがまゝになり、志かく〳〵、志うとめのいふこともちひず、つらくあたられたるを根にもちて、をりふしはやりを出すゆえ、これより中あしくなるなり。只とにかくに、よめたちは、いか樣にむつかしき志うとめにても、ずいぶんしんぼうし、かう〳〵につかへ、その家に居通

すやうに心がけ、つらくわたられし事を心にもたで、ずいぶん心をつくし給ふべし。また、しうとめたちは、しうとめがゝりの事をおもひ出しものごとおもひやり、としわかなれば、とゞかぬはづとりやけんし、ずゐふん、よめ御をいとしがり、なさけをかけて、をしへみちびき給ふべし。しかるうへは、たがひに心と心がゆきあひて、よめしうとめ中もむつましく、家にこゝとなければ、上下にざはひ、ますゝいへもさかえ、せけんのかゞみとなりて、人のもちゐもよく、子孫萬々年もめでたくはんじやういたしまゐらせ候まゝ、よくゝ、　御わきまへ遊し候様に希まゐらせ候。

世の中に繼母の、まゝ子をにくむ事、ならはせのやうにてせけんの、まゝ母の、よからぬうわさを聞きながらも、手前のまゝ子をにくむは、いかなる心ざしにや。たとへば御仕置場にてぬすみするにひとしく、さてゝあさましき事ども也。いにしへより、まゝ子をにくみて、道ならぬたくみことをせしたぐひおほけれども、てんとうのにくみをうけ、あるひは、そのたくみあらはれ、家を追出され、または、みづからあるにもあられず、くびくゝり、身をなげて、命をうしなひしためしおほく、みなゝ、御存じの御事にておはしまし候。是皆、女の色とよくとの心たかく、ねたむ心のつよきより、おこるにて候ふなり。その故は、後ぞひにまかりしつまは、せんさいのうわさをきくもいやがり、をりにふれ、そのをつと前妻のことをいひ出せば、はやはらあしく、むねをもやしねたむ心から、かはつきもあしくなり、さしてもなき事まで、耳にかけ、ことゞとがめなどして、あらそひあるひは、せんさいの命日に、をつとの香はなたむけるも、心よからず、口にはいはずとも、心の内はねたましとおもふなり。これ、一ッには、その夫、前妻のことをわすれざるをりんきし、二ッには、せん妻よりわがかたをたかくおもはれんとのよく心より、みずしらずのせんさいをにくみ、いきどほり、坊主がにくければ、けさ迄にくい

どやらの、たとへのごとく、おのづから、せんさいの子がにくうなり。なほ、そのうへにわが子が出來ると、いなや、まゝ子かじやまになり。わが子の愛におほれ、どうぞ、此の子におとしきとらせたいとおもふから、いよ〳〵、まゝ子をにくみ、惡ねん日夜にいやまし、いろ〳〵のたくみをなして、父にうとませ、あるひは、讒をかまへてわしさまにいひなし、または毒がいして殺すなど、是みな色と、よくより出る惡心にて、おはしまし候。もつとも、色慾はおなごばかりにもかぎらず、をとこの身にもあることなれども、をとこはおもひ明らめある故、色慾ともに、女より淺し。女はものごと、一すぢにおもひいるゝものから、いろにもたかく、ねたみもつよく、れもひこんだるよくねんもふかし。そのうへ、をとことはちがひ、りんきしつとのねんつよく、ぐちにてあきらめなければ、心くらくいかりもつよく、あとを引くなり。されば、いにしへより、蛇となり。生りやうとなり。人をなやますは、皆女なり。まことにはづかしきことに候へど、よく〳〵、御つゝしみ候うて、手前の心にゆだんし給はで、あしきかたへ御心をよせられず、てんとうのおそろしきことを御わきまへ、御心操直にもたせられ候やうこひねがひあげ候。

教梯抄（二十一）

新後撰集釋敎　譬喩品　前大納言經任

子をおもう親のをしへの無かりせば
かりのやどりも迷ひはてまし

新千載集同　安樂行品不説他人好惡長短　前權僧正玄圓

よしあしと人にかたるなゝにはがた
こと浦にすむ海士のしわざを

拾遺風体抄同

提婆品　法印正智

谷ふかきやまじのしもをふみ分けて
こほりをむすぶ袖ぞさむけき

新後撰集同

題不知　權少僧都實壽

夜もすがら窓のともし火かゝげても
ふみ見るみちに猶まよふかな

玉葉集同

梵網經序莫以空過徒設病勞後代深悔　慶政上人

あすよりはあだに月日をおくらしと
思ひしかども今日もくらしつ

風雅集同

前大納言資氏一品經歌とてすゝめ侍りけるに安樂行品若入他家不與小女處女寡女等共説といふ文の心をよめる

藤原爲明朝臣

名にめでゝ迷ひもぞするをみなへし
にほふ宿をぞよきてゆかなむ

新千載集同

宿命通の願の心を　了然上人

今ぞしる代々をこゝろにてらしつゝ
ひとなかがみと言しまことも

新續古今集同

見解のありける僧にしめし侍りける　佛國禪師

をり得てもこゝろゆるすな山ざくら
誘ふあらしのありもこそすれ

續現葉集同

屬累品流布此經廣令治益　權律師實性

やまざくらにほひを風にまかせてぞ
花のさかりを四方にしらする

同　同

賢聖名字品捨貪欲入空道信のこゝろを

法印守雅

なぞもかくこゝろの月のこゝろから
すむべき影をすまさざるらむ

家集　釋教の歌の中に

皇太后宮太夫俊成

たきゞこり峯の木の實をひろひても
えがたき法はきゝはしめける

新勅撰集神祇　神祇（三十首）

天慶六年日本紀竟宴歌國常立尊

中納言維時

天の未たをさむるはじめむすび置きて
よろづ代迄にたえぬなりけり

同　同

月夜見尊

源公忠朝臣

月よみのあめにのぼりてやみもなく
あきらけき世を見るが樂しさ

同　同

天兒屋根尊

橘仲遠

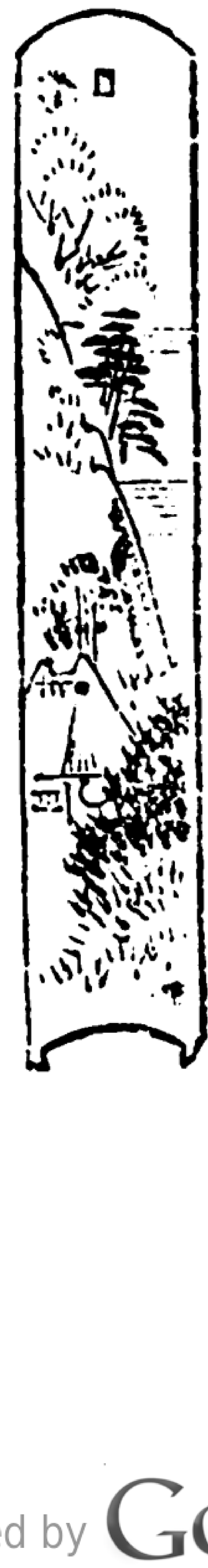
あさな／＼てる日のひかります毎に
こやねのみこといつか忘れむ

千載集同

加茂社の歌合とて人々すゝめてよみ侍りけるとき述懷のうたによめる

加茂重保

君をいのるこゝろをそらに見てたまへ
わけいかつちの神ならばかみ



（未完）

辨似抄（承前）

赤松景福

かは
古今二　散る花を何か恨みむ世の中に我身も共にあらむものかは
月清集　明けぬとてまどろみもせず子規初音は夜に限るものかは
此等は反語なり。さて、散る花の歌は、我身も共に世の中に有むものかは、あるものならずといひ、明けぬとての歌は、初音は、夜に限るものかは、限るものならずといふにて、其の理を斷りていふものなり。
新勅八　くれは又我宿りかは旅人のかち野の原の萩のしたつゆ
古今三　蓮葉の濁にしまぬこゝろもて何かは露を玉とあざむく
同十八　難波瀉恨むべきやもおもほえずいづこをみつの蜑とかはなる
此等は反語にあらず。只かといふが如く疑辭にて、前例の其の理を斷りていふものとは、全く異なり、是、玉の緒卷四にいへる「かの意のかは」の例なれど、此の内に、又、輕重の辨あるを、彼書には、其の由あらねば、爰に辨す。右の新勅八の歌は、彼、萩の下露はくれぞ、又、我宿りならむかといふ程にて、こは輕し。次の古今の歌二首、其のはちす葉の歌は、何故に玉と見せて、人を欺くぞといひ、其の難波潟の歌は何事を恨みて尼になりたるぞといふにて、此等二首は、詰問の語氣なれば重し。又、玉の緒同條に、
「右の外も、なに、たれ、いくなどの類の下にあるかはは、總て、皆かの意なり。」とある。此の說誤れるを以て、こゝに確例を取りいでゝ辨す。
古今二　咲花は千種ながらにあたなれと誰かは春を

恨みはてたる、是たれの下にあるかはなれど、決して、玉の緒にいへる「かの意のかは」にはあらで、反語のかはなる事著し。故に何の類の下にあるかはの内にも、反語ならぬと、反語なると、兩樣ある事なり。こは鈴屋大人の偶取はづされたるなるべし。

小簾　　小簾

萬葉七　玉垂のをすのすき透り獨居てみるしるしなき夕つく夜かも

萬代集　玉垂のをすの隙のみ繁ければ桂けても人をたのむべきかな

かやうにをすとよめるはよし。萬葉集に小簾或は小簾とかけるを、何もをすとよめり。小櫛小車など添へていへる語例、いと多し。

續詞華集　こすのとに宵の燈火消やらてほのめく影は盛なりけり

かやうにこすとよめるは、元は小簾とかける小字は、をともこともよまるゝより、如此讀み違へたるなるべし。又、後世小枕とかきてこまくらとよめるものはいかゞ、萬葉二に家にきて我屋を見れど玉床の外にむきけり妹か木枕とあるは、字の如く木の枕にて、訓はこまくら（木をこといふは常に多し）なるを思へば、小枕は木枕とかくことなるべし。又、今、雜誌などに、こてふを小蝶と書けるも非なり。是は二字ともに字音にて蝴蝶なり。莊子齊物論に、夢爲蝴蝶とあり。又、唐詩に蝴蝶夢中家萬里など多し。蝴蝶とも、蛺蝶ともいひ、單に蝶ともいふは、蜘蛛の二字を分ちて、詩には蛛字（蛛網、蛛絲の類）を用ゐ、歌には蜘字（蜘の糸、蜘のすの類）を用ゐるが如し。正字通に據るに、蝴本胡とあり。されど胡は蝴の略字にあらずして、胡字の方古きを、やゝ後に虫を添へたる者と見ゆ。猶字體の事はおのがものせる撿字と云ふものにあり。

こよろぎ　こゆるぎ

古今十七　玉垂のおかめやいつらこよろぎの礒の波わ

け沖に出にけり
同　二十　こよろぎの磯立ちならし磯菜つむめざしぬらすな沖にをれ浪
此等はこよろぎとある例なり。
拾遺戀四　いかにして今日を暮さむこゆるぎのいそき出てもかひなかりけり
後撰集　君を思ふ心を人にこゆるぎの磯の玉藻や人もからまし
新拾遺　徒に又このたびもこゆるぎのいそかて法の舟を送るな
此等はこゆるぎとある例なり。

右二例いづれもよし。こよろぎといへる方稍古く、こゆるぎといへる方、後に多くして、越ゆると言に言挂け、又磯を急ぎに言桂けたるも多し。此の地名、萬葉卷十四に相摸路の余呂伎の濱のまさご成子等し悲しく思はるゝかも、和名抄に餘綾（與呂伎）とあるも是なり。今、韻鏡等に據りて按ずるに、綾はろの音に用ゐたるなり。かくて餘綾の二字をよろぎと讀むはぎを省けるにて、是和銅年代の制によりて字を省ける地名なり。かゝれど、元はよろぎと云へる上に小字を添へて、小初瀬などの例にて、をよろぎと云ふが轉りてこよろぎといひ、又轉りて、こゆるぎといふなり。されど、此の地は小字を併せて、一の地名と、早くいひなせれば、單によろぎなどいはむは中々よからじ。又こといふも前のこすと同例なるものから、此等は今更にをよろぎと讀み改むべきものにもあらず。かうやう古に泥むべからざる事も、これかれありかし。

（未完）

廿二番歌合（承前）

諏訪　忠元　寄贈

判者小杉榲邨先生

河邊鳥

五番

左　持　井上正直

夕川のみつに影さすふし柳
さきのみしろく暮のこりけり

右　水野鈔子

しら波のよせてはかへす河つらに
なれてさわかぬ鷺の一むら

判詞に

このつがひもまさりおとりわらず。

左のかた、狩野家のゑがける、畫幅見たらむやうなるわりさまなり。いとをかし。右のかた、その實景見るが如く、これもありぬべきさまなりや。

よく吟じあぢはふに、いづれも同じほどのものなりとす。

六番

左　渡邊須磨子

川ぎしの柳の枝を木つたひて
さへづる鳥の聲ぞゆかしき

右　勝　前田利聲

あしたづのたてる川べによりくるも
おなしいろなるしら波にして

此の番ひ　右勝

判詞に

さへづる小鳥の聲、ゆかしからぬにはあらぬ。左の方、しら波たてゝ川邊のあしたづ、悠々然たる右の方、このしらべ、いつれならむと味ふに、あし鶴のおほらかさは、並畫のおよふ處にあらずなむ。

七番

左　水野忠敬

おもふどち河べちかくもたちよれば
しらぬ小鳥のあさるさまみゆ

右　勝　青木修

川そひにたてる柳の影とめて

こゝろなかくもあさるゑらまき

このつかひも、また、右の勝たり

判詞

左の方、初句におもふどちどうち出給ひて、全首にかゝる所なきはいかに。この句うきたりや。右の方、其のさまいとをかしくとゝのひたり。されど左のたゞさるにくらべて、右の、川ぞひ柳にこゝろなびきぬ。

八番

左　勝　諏訪忠誠

風ふけは波のまに〱うきしずみ
身もかろげなる川のみづ鳥

右　増山喜美子

船くだす棹におはれて墨田川
きしのひかたにかもめ鳴なり

この番ひ　左の勝

判詞に

左の方、三四句に浮沈み、身もかろげなるとつゞけ給ふごとく、いとかろらかなる御口つきなり。右の方、前にもよみ出給ふ、作者ぬしにひとしく、その墨田川のせんなきこゝちす。いつれの川としても、かならむは、いとあさはかなるこゝ地し侍り。

九番

左　南部明子

朽のこる河せのきしの柳かげ
しむしは鷺のたち所なる

右　勝　諏訪忠元

君か代のみやことなりて墨田川
うかぶかもめの我は顔かな

このつがひ、右の勝あきらかなり。

判詞に

左の方、これもまた、繪にかけるが如きさまみゆ。いとをかしき御口つきなりと申さむ。右の方、げにこのみやこ鳥は、所から御歌から大に

時を得たる、作者の君の、われはがほなるおもゝちもうかびて、いと〱をかし左の鷺、かひなでならねども、こゝのみやこ鳥にはけをされ侍り。

十番

左　勝　　牛山寛

津の國の生田の川の水鳥は
　いまもその名に流れてぞきく

右　　南部菊子

明ぬとて寝ぐらをいでゝ川くひに
　なにをからすのおり立てなく

此のつかひ、左あはれふかし。

判詞に

左の方、大和物語の典故を下にしめ玉ひて、名にながれたる、そのころをきゝとめ給へりとの御つゞけがら、いとをかし。

右の方、からすの川杭にたてるさま、いとからびたる墨描見るがごとく、ころもすてかたく侍れど、物語の心のふかき水鳥は、ことにあはれにきゝなされてなむ。

十一番

左　勝　　南部麻子

きしに立ち淺せにおりて水清き
　河べはなれずあさる鳥かな

右　　増山三雪子

日数ふる雨ににごれる川みつを
　わびてたるるはかもめなるらむ

此のつかひもまた左にかちをとらる

判詞に

むさぼるそのさま、見るごとくなる。これ即ち禽鳥などの境界、いふまでも侍らずなむよみ給へる。

左の方の作者君

にごれるをいとひて、立さらむとかまへたるは、げにその世の大かたの人ごゝろ、この鳥にだにしかざるが如し。よく時事にうちあひて、をかしきを御句

調は、わびてやたてるといはむ方なけむ。あはれ清潔なるかもめのこゝろは、賞すべきも、このてにをはのすこしき當を得かねたりと見る。判者の眼には、なほ、むさばる鳥に、かちをもむさぼられたりとぞみゆる。右の方の作者君

十二番

左　建部縫子

しもさゆる佐保の川霧ふかき夜に
ともまどひして千鳥鳴なり

右　勝　勝田筆子

山川のみきはにたちて朝夕に
あさるは何の鳥にかあるらむ

此のつがひ右のかた勝

判詞に

左の方佐保川の千鳥をよみ出給ふ。こは冬季の景物に獨立せる題なれば、こゝの題意には、いとふつゝかなり。歌合には、すべてかうやうの事は、心し給ふべきならひなるをや。右の方けどはき山川なればにや。朝夕にあされる鳥の名もしられぬなるべし。こは少しく漠然たるおもひなきには侍らねど、左の不注意にくらべてこのかた難なきこゝ地すればなむ。

露のなごり

井上頼文

さきに、長男、頼直の、さちなくなれりしをいたみて、たむけたまへる、きみたちの玉の御ことの葉は、しのぶの露となづけて、本紙にのせ侍りしが、それよりのちに、又とぶらひこされたる、きみ〴〵の、なさけあつきことの葉の玉見るにつけて、

ことの葉のなさけの露のおき添て
しのぶにあまる涕なりけり

となん、うちなげかれ侍る●

岡部　譲ぬしより

きえにける稲葉の露のおもひきや
　またしのぶにもかゝるべしとは

きえにけるしのぶの露のしのぶにも
　おもひみだれて悲しきものを

森幹三郎ぬしより

おのれ、去年の末つ方、はじめて、宿の妻むかへたりけるが、其の後も、家の内、安く穏に、殊に、妻なる者の、朝夕まめ〳〵しくかしづきまつりけるを、並びゐまに、老の御心に、如何ばかり嬉しと見そなはしつらむ。遙かなる後の世の事まで、何れくとなく頼みきこえさせ給ひけるに、さてそは、浮世なるらめ。五月の廿日過る頃、心地あしとて、病の床に打ふしけるを、たゞかりそめの事と思ひきや、やがては、聞くも恐ろしき、脳充血といふになりぬときくに、打おどろかれて、夜の目も合はず、みとりに心を盡しゝかひさへなうで、げに僅ばかりの患に、はかなくなりぬる心まどひ、抑如何ぞや●一家暫時は夢なりけり。しかるに、無常の風は、此處のみならで、ゆくりなくも、非上うしのみ許に吹入りて、うしが、いのちと頼みかしづきたまひける、御子のみうせまし〳〵と聞くに、更に、新なるなげきさへたちそひて、同情の涙せきあへず。げに、思へど、これも彼も、いと短きほどの契なりけるよと、打ちなげかれて、

かなしさのさこそはあれどなき人を
　しのぶ心はわれもれくれし

殊に、こぞは、ひめみこに別れさせ給ひて、其のなげきいまだつきなくに、又、この度のうき目、みさせ給ひけるみ心のうち、おしはかられて、

あはれやな散りしかざしの花のみか
　掌の玉またもくだけし

いまひとつ

くだけゝむむめての白玉あはれ〳〵

　　くだけにけりなめての白玉

福島末方ぬしより

かなしさはよそにきく身もよそならず
　　すぎしわが子におもひくらべて
よそにきくわれさへ袖をしぼるかな
　　さきだちし子の昔おもへど

銀杏のくち葉（續）

井上頼文

十日あまりすぐして歸るさ、舟に乘らんとするほど、雨いといたくふり出でぬ。中村氏こゝまで送り來て、こん夏は、大北の銀杏子と共に來たまへ。綱舟の興あるさまなど見すべしと、ねもごろにいはる。舟より下りて、車走らする間もとく、二見につきて、君と語らんと思へど、心いそがれて

飛鳥の鳥羽たちいつる小車は
　　天かけるごとはやも行かなん

と心のうちにうたへども、道あしければ、すゝむこと、いと遲し。

ひる過る頃、松阪屋につきて、君が病のさまを訪へど、四日、五日以前より、熱度高くのぼり、胸つかへ、咳さへ、しば〳〵出でゝいと苦し。きのふまでは、つとめて、こゝにありしかど、たへがたくなりにたれど、今朝、早く歸らんと思ふものから、猶たちいでんも淋しかりしに、けふとはれしこそ幸なれ。ひるげたうべて後にとて、車二輛あつらへ、何くれと支度とゝのへらるゝ折から、ふと、きみが傍を見れば細かに書きつめたる冊子あり。そは、何ぞと問へば、こは幼き生徒に、文法を授けん便にもと、思ひいづるまに〳〵書きつゞれるなり。かゝるもの、家にて記し居れば、病のためあしからん。やめよ〳〵と制せらるれば、ひそかに持ち來りて、心のすゝめるをり〳〵に筆とれるなりと。病の床に伏しつゝも、猶學業に心を注がるゝほどおぼえ

て、いとたのもし。

かくて、車いそがせ、君は二軒茶屋にて母へのつとにとて、餅いひもとめらる。君が、母ぎみを思ふ心は、はつかの事にもあらはるゝなりけり。君は鍛冶屋垣内に、われは、藤の木にかへりぬ。

そののち、君は、おのれがかりずまゐに、しば〳〵音づれられき。

ある日、君は、ねもごろなるふみに、鷄卵あまた添へて送りてこされければ

　そこふかき心をくめは伊勢の海の
　　ま玉にまさるこれのたまもの

とかへしす。

それより君は、心ちあしく、歩むこともかなはずなりぬと聞けど、いとまあるごとに、必ず、訪ひてさま〴〵の興あることゞも、かたらひて、かたみに、むすぼゝれたる心を、なぐさめき。さるほどに、君が病は、やう〳〵に重りゆきぬ。或る人は、君と、おのれとの病を評して、銀杏子は、此の冬の霜とゝもに消えはてぬべく、非蛙子は、來ん春の菜たねの花とゝもに、散るべしといへりとか、風のたよりに聞えし。いと〳〵心ぼそく覺ゆれば、猶ちからを添へんとて、しば〳〵、おとづれき。されど、君をなぐさめむと、長物がたりして、なか〳〵に病のさはりとなりなばと、あやぶまるゝに、君は、いつも、身を起し、蒲團の外にすこしのりいで、やせほそりたる手して、くゝり枕なでつゝ、いましばしかたらひてよ。山里にもあらねど、このごろは、人めもかれはて、いとさびしきをと、とゞめらるれど、強ても立ちかねて、病のため如何とは氣づかはれつゝも、時を移す事しば〳〵なりき。

その後訪ひける時、君は、ひとしほやつれて、今はたより少く見えぬ。せきいづる咳にむせびつゝいはるゝは、わが友、泉舘霽月君、または、おのれと同時に業を卒へたりし、磯部濱萩君たちは、學び得たる學術も

て、各地方に一旗幟を立て、いづれも文壇の木鐸たり。さるに、おのれは、とかくいひさして涕ぐまれぬ。おのれも、同情の涕せきあへざりしかど、わざと、こと事に曰ひ紛らして、いさめなぐさめ、かへるにのぞみても、君は心よわし。心よわくては、病にうちかつことあたはじ、心をつよくし、よく養生して、早くすこやかなる身に復したまへ。もろともに、とくすこやかなる身となりて、ふたゝび、二見の清遊をこゝろみてんなど、はげませど、君はハンケチもてせきくる涕ぬぐひつゝ、うちしをれて、うなづかるゝのみなりき。さるにてもおもへど、おのれ、あまたの生徒を引卒し、畝火、奈良山ふみならして、千古の蹟をたづね、須磨、明石の浦波に舟うけて、往昔のなごりをとひ、西に東に行きめぐりしかど、いさゝかのつゝがもあらざりしを、新に、皇學館を舘町に建築したる時、舍監なる堀尾氏は、臨時召集にあひて、大阪にゆかれしかば、おのれは、その補闕として、「舍監心得」といふを命ぜられ、またあらづくりなる學館に、とのゐすることゝなりにき。もとより、あらづくりにて、かべもあばらに、板間もあはねば、しはすだかりの月かげ、氷の如くさえわたりて、がらす戸に、きらめき、木の葉ふきまく朝熊おろし、まくらより、あとよりおそひきて、身もとほらんばかりなりき。折しも、風のこゝちにて、咽喉カタルの起りたるを、強てしのびつゝ、夜は、舍監の事ども取りおこなひ、晝は教の鞭取れりしが、もとゝなりて、つひに、氣管支カタルとはなりにき。三橋ぬし逸見ぬしたちのあつきすゝめによりて、あづまのみさとにまゐのぼり、青山醫學博士の診察を受けたるに、おもひの外に、いと重き病なりき。かくて、さまざまにいたはりしかど、なほ、今にすがすがしからず。或る人の評の如く、よし、こん春の菜たねの花と散りうせずとも、かくてのみあらんには、生けりとも、生けるかひなし。おのれがともどち、おのれがゞなびのはらからは、或は都にいでゝ、博士と肩をたくらべ、或

は文の道にいさをしを立て、あるは、高きつかさ位得て、世に時めき、或は敎の庭をたちならして、多くの子弟を導き、家の名もわが名も立てゝ、親のおもてを興し、親の心をも慰むる人のさはなるを。おのれ、もとより拙きさがなるを、まして、病にさへなやまされてあれば、世のなかにながらへぬとも、菜の花と散り過ぎたると、何ぞことならん。人は片田舍より、花の都にいでゝ時めくを、われはあづまのみさとに生れながら、かくてあるよとおもへば

かしこきは都にいでゝ山かげに
　　すむは淸水とわれとなりけり

とうちなげかるゝはや。

おのれがなげきにくらべても、きみが霽月、濱萩といひさして、淚ぐまれし心の中、おしはかられて、腸もちぎるゝ心ちす。

明日も、行きて、君が心をなぐさめんなど思ひしを、さはることといできて問はざりし程に、君はつひに、このうつし世をさりて、天がけりたまひきと聞ゆ。さながら夢こゝちして、はかなさ、いはんかたなし。あはれ、ともにすこやかなる身となりて、ふたゝび、二見に遊ばんといひける事の、まぼろしやうにて、

またこそとちぎりしものを二見潟
　　ふたゝびとたにあふよしぞなき

とうちなげかる

あはれ、あはれ、月の桂も手折らんと、思ひがけつる君はや。文の林に分けいりて、言の葉の花を摘んといそしまれし君はや。名をあげ、家をおこし、おやの心をなぐさめんと、はげまれし、身のさかり人はや。ひとり漠々たる、曠原の霜ときえかへりて、はかなくのこれるは、さびしげにたてる、一片の石ぶみのみ。嗚呼かなしきかも。

けふしも、君が一周年のみまつり仕へまつるとして、有瀧ぬしが、まごゝろもて、吾がまじはりふかゝりし人々のたむけの歌文つどへ、ふみ好みたまへりし、君

がみたまをなぐさめんとす。この席上を見れば、君が皇學館の文會に、かまくびもたげて、筆とられしおもかげの、目に見ゆる心ちす。あはれ、みたまも、國風ぬしの、篤くねもごろなる志を嬉しみ、君しのぶ、人々の心の華の、色をも香をもめでまし、これのまとゐにつらなりて、共に文やつくりたまふらん。共に歌やよみいでたまふらん。あなあはれ。（終）

家兄遺文（八）

白松園主人

左の一篇は、家兄が上京せる、明治廿六年の冬に、草せる、日本詩吟譜自序の文なり。當時轉轗流離、學資に窮して、具さに艱苦を嘗めける時なりければ、せめて暫時の資をもつくらむやとて、日頃、音曲を嗜めるにより、我國詩吟の譜を作らむと志し、即ち凡そ一ヶ月余の日子を費して、遂に一の詩吟譜を創作しき。我國古來一定の詩吟譜といふ者は、嘗つてなかりけるを、兎にも角にも一定の曲譜を案出したるは、斯の道の嚆矢にして、音樂界に幾分の裨益を與へたる者といふべし。然るを、世にはしれ者多くて、其の頃、芝區正則尋常中學校にありける、尾崎彌太郎といふ者あり。此の者音樂學校、出身とかにて、少しく音樂の心得あるにより、家兄は友人の紹介にて、彼に會ひ、詩吟譜出版の事につき、書肆への照會を乞ひぬ。然るに、彼は、いたく、此の譜を羨ましくや覺えけむ。校閲といふ名を出し呉れんことを求めぬ。家兄は元より校閲せられし者ならねば、斷乎として、その求めに應ぜざりき。是に於て、彼は家兄の窮迫を奇貨とし、口實を設けて曰く、書肆は出版を望めども、余の名に非ざれば不可なりといへり。君なほも、之を拒むに於ては、余は書肆との關係を絕つべしと。家兄は、苦めん爲めの、彼が手段を知りたるといへども、焦眉の急を救ふに出なけ

れど、乃ち名義の點は君に任すべし。只よく、之を計へと答へぬ。嗚呼尾崎何者ぞ、いかにもして學資を得んが爲めに、汗を絞つて作りし者を、横奪して、貧書生を苦めんとせり。彼れは遂に、大膽にも、著者の名義を削りて、己の名に改めたり。則ち、恣に尾崎氏作曲とせり。且つ家兄に與へし金は幾何ぞ、僅に拾金のみ、他は事に托して、すべて與へざりき。著作界の盗賊といはんよりも、無情無慘の大惡人といひつべし。己は、斯の學專攻の身にてありながら、業餘の嗜好よりして作りなせる、一書生のわざにだも及ばず。嗚呼彌太郎何等の狗鼠ぞや。吾人は、かかる卑劣無慘の畜類を筆誅するにつけても、東京音樂學校の、此くの如き似非音樂者を出せるを怪まざるを得ず。左の文は、此の頃余が篋底に存ずる、家兄が當時の草稿のまゝにして、出版の文章と、聊か異りし所のあるは、尾崎彌太郎が、己に合はざる所、則ち余は山口縣の産なり云々以下を削りたるにて、却りて前に、蛇足を添へたる者なり。今、之を掲ぐるにつけて、其の所以を明記し、世の似非學者等が一餐に供せんとす。

○日本詩吟集自序

詩は、支那歌なり。之を吟ずるに、支那音を用ゐずして、直ちに、我國の訓讀を以てせんとするは、甚だ困難なるわざなり。限りある音數を、限りなき訓讀を以て吟ずるに、完全の調子を得むこと、固より難けれど、日本詩吟の不規率にして、調はざること、當に然るべき理なりといふべし。然れども、此の不規率の中に、自ら長所ありて、其の口調一種特別の、いかにも捨つべからざる興味存するあり。强ちに、其の不規律をのみ咎むべからず。

日本詩吟は、古來再度の變遷を經たり。而して、其の盛衰は、詩賦と相伴へる者の如し。我國初めて、詩賦の隆盛を極めたるは、延喜時代にして、當時その妙を得たる達者、上流に立ちたりしかば、一時、其の風

を受け男女皆寤寐にだも、手に詩集を擱かず。口に詩句を絶つ暇なかりし有様にて、名句、雲の如くに起り。名吟、海の如くに湧き出でき。思ふに、此の時に方りて、世上一般に行はれたりし、一定一様の朗詠風ありしならん。而して、その口調も、亦、定めて、流麗なりしならむ。一例を擧ぐれば、二月三月日遲々、をキサラギ、ヤヨヒ、ヒヴラ〳〵、と訓讀を下したるなどを思へば、今代の漢文直譯口調の如く、其の音詰掘澁滯せずして、優美流暢の口調なりけんも、慥に信を措くに足るなり。又、土佐日記に、からうたども、時に似つかはしきをいふ云々かくうたふに、ふなやかたのちりもちり、そらゆく雲も、たゞよひぬとぞいふなる、といへる。又少し世は下れど、源平盛衰記に、平忠度が、和歌の師、藤原俊成に別を告けて去るとき、馬上に在りて、前途程遠馳㆓思於雁山之暮雲㆒といふ古詩を、打揚げ〳〵詠じつゝといへる。又平重衡が、鎌倉の幽舍にありて、燭暗數行虞氏涙と詠ぜしなど、此等は人の善く知れる所にて、其の口調音節、想像するに余りあり。或は、その口には、唯朗讀の艶なるものに過ぎずして、想像する程の曲節はあらざりしならんとも思はるれど、右らの事跡に據るときは、强ちさのみも評定せられず、必ず然るべき一定の曲節ありしならむ。而して、此の曲節は、後世文學の衰ふると共に、其の跡を絶ちて、復び世に傳はらざるに至りぬ。然るに元祿の比に至りて、文學ふたゝび興りて、詩賦も盛に行はれ初めたりければ、當時の學者書生、口に任せ聲に應じて、雅俗擇ふ所なく、直譯の口調を以て、節を擊ちて高吟し、案を叩きて痛歌す。練習日を積むに從ひて、自づから、其の聲節に適ひ、其の音度に合ひて、知らず〳〵一種の新調子を作り出しぬ。然れども昔時の優美の跡は、復た見ること能はず、更に一變して、雄壯快活の口調とぞなりにける。然るに維新以來漢學頗に勢力を墜すに及び、詩吟も之に從ひて、漸く衰へ、今は、僅に青年書生の間に存すれども、節度

既に錯亂して、復た往時の影を見ざるに至る。之に加ふるに、近時和洋の樂、朝野共に盛に行はれて、優を競ひ美を爭ふ世の中となりぬれど、零落して見る影もなく成り果てたる、亂調子の詩吟を以て、此の中に立たむことを思ひもよらぬことにて、主人公たる詩人さへ、夙く見捨て顧みず。故に今の時に當りて詩吟を弄ぶ者は、唯、かの優美風流の才に乏しき、硬骨書生のみにして、詩吟は再變して、書生の占領物、即ち書生唱歌とはなりぬ。

詩吟はかく零落し果てたれども、既に前にも云へるが如く、素と大に捨つべからざる特色の存するあり。則ち閑雅悲哀は、他の音樂唱歌の長ずる所なれども、雄壯にして雅致ある者は、獨り詩吟の占むる所にして、彼の軍歌に類する如きもの〻、決して企て及ぶ能はざるなり。南樓月明なる夕、遙に朗吟の聲を聞く時は、神澄み、骨鳴りて、或は流水の滔々たるが如く、或は蛟龍雲に吟ずるが如く、一躍して天涯を磨し、更に眞空を壓する勢ありて、其の音儼然として犯す可からず。此の故に劍舞を以て之に和する時は、最も善く節に中り、怯夫も之れが爲めに勇に、懦夫も腕を掲げて起ちぬべき感あり。此くの如き興味は、音樂唱歌の學びんとして學ぶ能はず。擬せんとして擬する能はざる所、是、その特長にして、詩吟の決して捨てられざる所以たり。されば詩吟は、雄壯なる唱歌、快活なる音樂なり。此の故に婦女子は勿論、優柔なる懦弱男子は、敢て口吻にだも發する能はず。此れ又詩吟の一種特別なる所たり。か〻れど詩吟は、徒に硬骨書生の占領物に歸せしめて、止むべきものにあらず。世間の音樂唱歌と共に、肩を並べて立つべきものたる事、疑ひなきを、兎角果々しき勢力を得ざるは、眞正調子の埋沒して、復び世に出でざればなり。試みに聞け、當今書生が詩を吟ずるを、節度音調錯亂を極め、更に一定の體を存せず。所謂調子外れの音聲にて、甲は法外に高く、乙は法外に低く、人毎に其の調を異にし、十人吟ずれど、

十人皆違ふ。而して知らざる者は、以て詩吟の本態と思ひ做せり。嗚呼詩吟の零落、今日に於て極りぬといふべし。

然はあれど、かく錯亂を來したる者は、素より不規率唱歌にして、往時流行の時と雖も、人毎に其の曲多少の差ありて、細部に至りては一定せざりき。前にも述べたる如く、支那人の如く、直讀一下すれど、何事もなけれど、限りある句に、限りなき訓讀を附して、之を單一の曲節に容れんとするは、甚だ困難の事にて、且つ五言あり、七言あり、訓讀宜しきを得ざれど、五言は節余り勝ちにて、措き處に苦む、七言は節足らずして切迫すかゝる不規率杜撰の曲なる上、當時の學者、意を注ぎて、節を探り、譜を撰はんの志ある者なく、唯我流を謡ひ固めたる程の物なれど、未だ一人も詩吟法に就きて、是非を下したる、一片の言だに聞かず、況んや、一定の曲譜などの、出で來たらん理なし。嗚呼詩吟の曲譜は、混沌として開黑の空中に朦朧たり。朦朧にさぐりて、甲之を乙に傳へて乙訛りて丙に傳へ、丙再び訛りて、丁に傳ふ。訛謬の極を受けたる硬骨朴素の書生輩が錯亂を來したるは、怪むに足らざるなり。

予は山口縣の產なり。予が父若くして、九州に遊歷し、專ら漢學を修め、歸りて、子弟を敎授しき。平素音律を好みしかど、彼此を折衷斟酌して、一派の詩吟を唱へ、子弟をして和せしめたり。予も亦幼きより、頗る音律を嗜みて、好みて父が口調を學び、練習數年にして、終に其の節度確定して、變せざるに至りぬ。然るに近年世に行はるゝ、西洋樂の一端を伺ひてより、初めて日本詩吟の不規率なるを感じたると共に、古來一つの曲譜なきを歎き、時機あらば試みんと思へる折柄、事を以て上京したり。初め上京の途に就くとき思へらく、東京は處がらとて、詩吟に於ても定めて、卓絕せる調子を聽くことあるべしと。思ひきや。其の拙きこと、遙に西國より甚しからんとは。

是に於て予は、素志を達せんの心勃々として、禁するに由なかりければ、思を密め心を盡して、詳細に其の音を徴する事、夜を以て日につぎ、終に一曲の詩吟譜を得たり。此の譜や、普ねく世に行はるゝ西洋譜の例に倣ひて、其の音節一も漏す所なく、五言七言の律と古詩とを問はず、皆此の譜によりて吟ずるを得べし。是に於て、其の節度秩然として、恐くは終世動く時なからんか。されば以前樂器に和する事能はざりしも、今は八音共に和するを得べく、優美と雄壯と兼ね、備りて、冀はくは、かの錯亂的詩吟をして、靡然として、向ふに至らしめんことを。

我邦固有の唱歌は、其の曲甚だ婉曲にして、西洋譜といへども、充分に現はすこと能はずして、隔靴の感を免れざる所あり。よし勉めて之を現はし得とも、其の譜に拘泥して歌ふときは、其の音澁滯して、優美の曲、反りて野卑拙劣に聞ゆるなり。詩吟も亦然り。吟する者は、宜しく此の譜を以て基礎と定め、通唱千遍漸く熟するに從ひて、適宜に修飾を下すときは、蘊奧の妙を極むるに至らむ。

（以下次號）

はゝその露

はゝそ

勇といへば、皆さんは、ひぢをはり、目をいからして、虎がかけり、獅子がくるふかのやうにおぼし、勇者と云へば、何でも手負ひ獅子をしとめ、野猪をほふるやうな、力のものとおぼしめさんが、それは猪武者の向ふ見ずと申しまして、ものしりたる人の勇ではありません。その身をつゝしみ省、よんどころなく、事に逢うて、畏れぬを誠の勇者と申します。むかし寛文の頃、大和國、郡山の城主本多大内記政勝と云ふ人の家士に荒木又右衛門と申します、劒術の先生がありましたが、うまれつきたる英雄で、ちいさい時から、武道に志あつく、劒術に心をとめましたそうな。その年、まだ十



三か、十四の時であります。同じ朋輩の子の同じ年頃のものとつれ立ち、鳥をとらうと思ひまして、只二人、鳥籠をもちまして山へはゞをかけに行きました。其の日、鳥が、よくとれませんでした。二人は、今少しとらう〳〵と思ひまして、大分、山深くには入り、くれ方になりまして、山を出やうとしました。ところが、其のあたりには、日來山賊がすみをつて、物騷の聞えがありましたれば、又右衞門は、道をかへて行かうと申しました。すると、今一人の子は、左樣な所こそ面白いではないか、案内せむ。いざ僕のあとをつきて來たまへ。何こはき事があるものかとて、大手をふりたてて、さもいさましげにゆきます。又右衞門は、其のしりへにつきて行きました。

さて、此處から郡山城下へは、三里ばかりの路程でありまして、家などは一向にありませんので、夜分にはなります、つね〳〵から物騷のうわさがある所ですから、往來の人も絶えまして、月かげはのくらく、樹木

のたてこもりたる岩窟の中に、人のいびきの聲が高く聞えました。これは、面白い〳〵、かねて、此の邊りには、山賊ありて、往來のさまたげをすると聞きをつたが、あれこそは、この賊のいびきの聲よな、いざや、彼に小便しかけてやらうとて、その岩穴の中に用捨もなく小便をしこみました。すると、山賊はむつくと立ち上り、これはめづらしき小供よ。年頃己は、此の山にかくれ居て、ものをはぎとりをるが、皆、一目さんににげゆきて、汝等のやうな魂魄のすわりしものは、一人も見ず、是より先は、道も遠ければ、れくりやらんとて、二人があとについて來ました。小便しかけた童子は、少しも畏るゝけしきもなく、わざと大聲立てて、山姥の謠曲をうたひてきました。ところが、にわかに、つまり、聲もふるへました。山賊はから〳〵と笑ひて、さてこそむけの皮があらはれたるぞ。きさまが、大膽は眞實の大膽ではなく、つけ氣質と云ふものぞ、我のつき來たのは、きさまが氣象をためさんとにはなくて、今一人の童子の心のをさまりたるを伺はうとて、つけ來たのである。あつぱれなる、氣のれちつきかなとはめましたさうな。此の山賊は、後に聞きますのに、由井正雪のくみの者のよしでありました。誠に勇とは、此の又右衞門のやうなもので、勇ばかりではありません。智も、智のあるふりするのは、誠の智ではありません。能あるたかは、爪をかくすと云ひまして、誠の智者は知のあるふりをせず。誠にものをよく知つた人は知つた皃を致しません。識つた皃、見たふりをする人は皆知らぬ人であります。

みあたり次第

高雄の松

日頃の雪ふりにたれこめられて、いとつれ〳〵なるまゝ、隣の隱居屋を問へむ、物知り翁は、相手まちかほに、たばこをふかしつゝありけり。今日も講釋きゝにまゐりはべりと差し入れば、翁は得たり顏に

も、茶茶菓などすゝめて、齒のかけめよりもるゝ音聲おさへながら云ひ出てたり。そは、あてやかなることにはあらねど、わかきひめたちの心得てあるべきふしのあれば、こゝにかゝげてん。

炭、　翁火鉢の炭をさして、此の炭は烏銀と申して、切炭　池田炭　炭頭　輪炭　炭團　などゝ、色々種類があります。日本國の茶人の用ゐるのは、攝州池田邊にてやく池田炭で、切炭とも云ふのだ、輪炭と云ふのは、池田炭の大なるものを、薄く切りたる、形車のわのやうなる故に、さういふのだ。炭頭とは、炭の俵、一俵の内に十とか十五とか大きなるのがある。それだ。炭團、あれはたゞ、炭を粉にして、丸くなしたるのである。

炭竈の名所　一体炭と云ふもは、どんなことをして、こしらへるのですかととへど、炭竈だ。山のかたそに穴をほり、埴土で、あたりぬり、なかに一ぱい生木を立てならべ、小さ口を二所につけ、三日も、四日も、烟りが、ふし〳〵とくすぼつて居る。それを歌によむので、名所には、山城の小野山、をしほ山、常陸では、つくば山などがさうである。拾遺集と云ふものに、

深山木を朝な夕なに樵りつめて
　さむさをこふる小野の炭かま

と好忠公は詠である。夫木集にもある。

冬がれの炭やき衣なれぬとて
　人をぞ人のたのむものかは

詞花と云ふものに匡房公がよんであるには、

山ふかみやく炭かまの煙こそ
　やがて雪けの雲となりけり

金葉集中に師時公が

炭がまにたつ煙さへ小野山に
　ゆきけの雲と見ゆる成りけり

とよまれた。新古今に式子内親王は、

日数ふる雪げにまさる炭がまの
　けぶりさびしき大原のさと

炭之故事　支那の國では、古、胡桃炭と云ふものが有たさうだ。これは、唐宋の世には、爐の炭にくるみを用ゐるを上品なものにしたが。それだ。

獸炭　といふものがある。之はやはり、支那唐の世の羊琇と云へる人、炭を、獸の形に作り、酒をあたゝめたと云ふ事がある。是はかうして、作しらへたさうでまづ、炭十斤鐵屑十斤合せ、搗て糯米にてねり、乾かすので、なか／＼、火は、きえぬものだと傳へてあります。

榾　と云ふものがあります。ほた火とか、骨薰炭とか云ひます。一體がくいふは、株杌で、木の根を灰の中にうづめ、其の上に火をたけど、自然に火うつりて、山中などで、埋火の用とするが、歌にもほたのうつみ火などよみました樣です。

廻炭　とは爐中に、炭をくむ稽古のため、はじめあるじの置きたる炭をあげて、客人、おもひ／＼に置なをすをいふんです。

と云ひ終はつて、得々せんたり。翁あまりわれは顏なれど、一つ云ひこめんものと、やア、甚だよき事を承りました。まう一つ御聞申したき事があります。それは、

賣炭翁　とはいかなる事でありますか之こそよもしるまじと思ひしにそれは何にだゝ炭賣る人の事で。忽ち東坡は賣炭翁の詞として、

積火變深紫　牙角猶恐怒と云ふ句かある。

かう云ふ意味である。今の若書生には、少々六ケ敷かもしれないとのゝしりつゝ解釋せり。

火につみ上ぐれど、まつくろになり。牙や角のやうになつた火のいこりていかるやうに見えると云ふ事です。余大に赤面。さらば、

埋火　とはなぜですかといへば譯は前云ひてありしが、たゞ、爐火の事よ。だから歌には、爐火の題には、埋火のとよまれてある。夫木集に俊成卿は、

山賤のほたさし合せ埋む火の

あるともなくて世にもふるかな

式子内親王も

埋み火のあたりのまとゐさよふけて

こまかになりぬよひの手すさび

と御よみになられました。と少しも朧げなる所はなしなは云ひつゝけて、

火桶は、桐火桶も、火鉢も、皆同じ事、今こそ、火鉢とばかり云ひて、火桶は土製のみと思へども、昔は、皆、火桶とばかり云ふたものです。

手爐とは俗にしう炉といふにて、また、懐炉とか、手爐とか云ひまして、小さき火鉢の事です。私は、此らの事にかけは、博士ですと、天狗になり上りました。

余も困じはて、何にかして、此の鼻をかきくれんと頸をひねりて考へました。一ふく吹ふて、炉ぶちで煙管をうつとたん、一つよき事をおもひ付きました。炭やき博士さん、内では、春の頃は木地の炉緣、冬の火をたくさんおこして、あたりもやけてこげる様の時に、塗炉緣を用ゐるは、あちらこちらではありませんかと云へば、翁、其の事で御ざる。春はほこり立ゆゑ、木地、冬はこれ〳〵と、黒塗の炉緣なでさすれり、餘りに耻しめられて、己れもやけになり。はては、炭斗　助炭　爐は火燵と見あたり次第とひかくれば、翁わらひつゝ、わからぬなら云ひます。

炭斗は烏府と申して、炭入るゝ器であります。ふくべ、籠など色々あります。

助炭は炭を助くると書きて、炉のおほひのことです。

爐は圍炉裏、地炉とも云ひます。炉は、今、茶人の用ゐるは、方一尺四寸であります。山家のもの、又、寒國のものは、其の製大きく、昔、堂上にありしものは、其の製大なるものでした。

火燵は置火燵もある。是は、むかしはない。近世の好みでしやう。かういふ狂歌もあると、わらひつゝ

棺桶へ片足はおろか極らくへ

みなさし込だこたつ成りけり

といはれて、いと〳〵恥しくなりて、たまらぬものから、裸足になりてはしり出したり。

禽獸の言行

田端の隱居

逢頭突鬢、垂冠曼胡の纓、短後の衣、目を瞋らして詰難し、前に相うち、上に頸領を斬り、下肝肺を決す。之れ闘鶏に異なるなしと、莊子の説く所なるが、げに世のためにも、人のためにも、身のためにも、何の爲にもならぬ事にて、いたづらに人と闘ひ、人と争ひあふは、誠に鶏のけあふに似たり。遂には、人の身も、己が身をも損するのみなり。烏賊と云ふ魚は、躰中に黒き汁を含みをりて、畏るべき他物來れりと見れば、忽ち、其の墨をはきて、あたりの水をにごらし、巳が身を其の中にかくすと云ふ。人は、其の墨を見て、反へつて烏賊のありかを知りて捕ふと云ふ。おろかのものなり。巳れがあやまちをかくし、人をくらましあざむかんとする人を、烏賊の心とす。

鵺と云ふ鳥は、怪しき鳥にて、その鳴くを凶兆とせり。あるとき、此の鳥、東に行かんとせしに、道に鳩にあひたり。御身は、何處に行くぞと問はれしに、我、我が鳴く聲を、人皆、忌めむ、東に行かんと思ふなりと。鳩笑ひて、御身、今の鳴く聲にては、例へ東に渡り、南に赴き、何處のはてに行かるゝとも、至る所人にいとはれんと。之は、例へはなしにもあらんが、惡をかくして、世を忍びありくは、此の話の鵺の如き物なり。

月夜に取りたる蟹、蝦、蝦蛄の類は肉少しと云ふ。之等は、性いたく臆病のものにて、月夜には巳が影のうつるを見、他物來れりと思ひ、畏ろしくて、あなにのみ引きこもりをりて、餌食せぬ故に、肉少しとぞ。あまりに臆病、巳が影におそれ、己れが足音のひゞきにもふるふ、蟹等の如き人あり。此の病、女子に、多く見る所なり。

意氣（七）

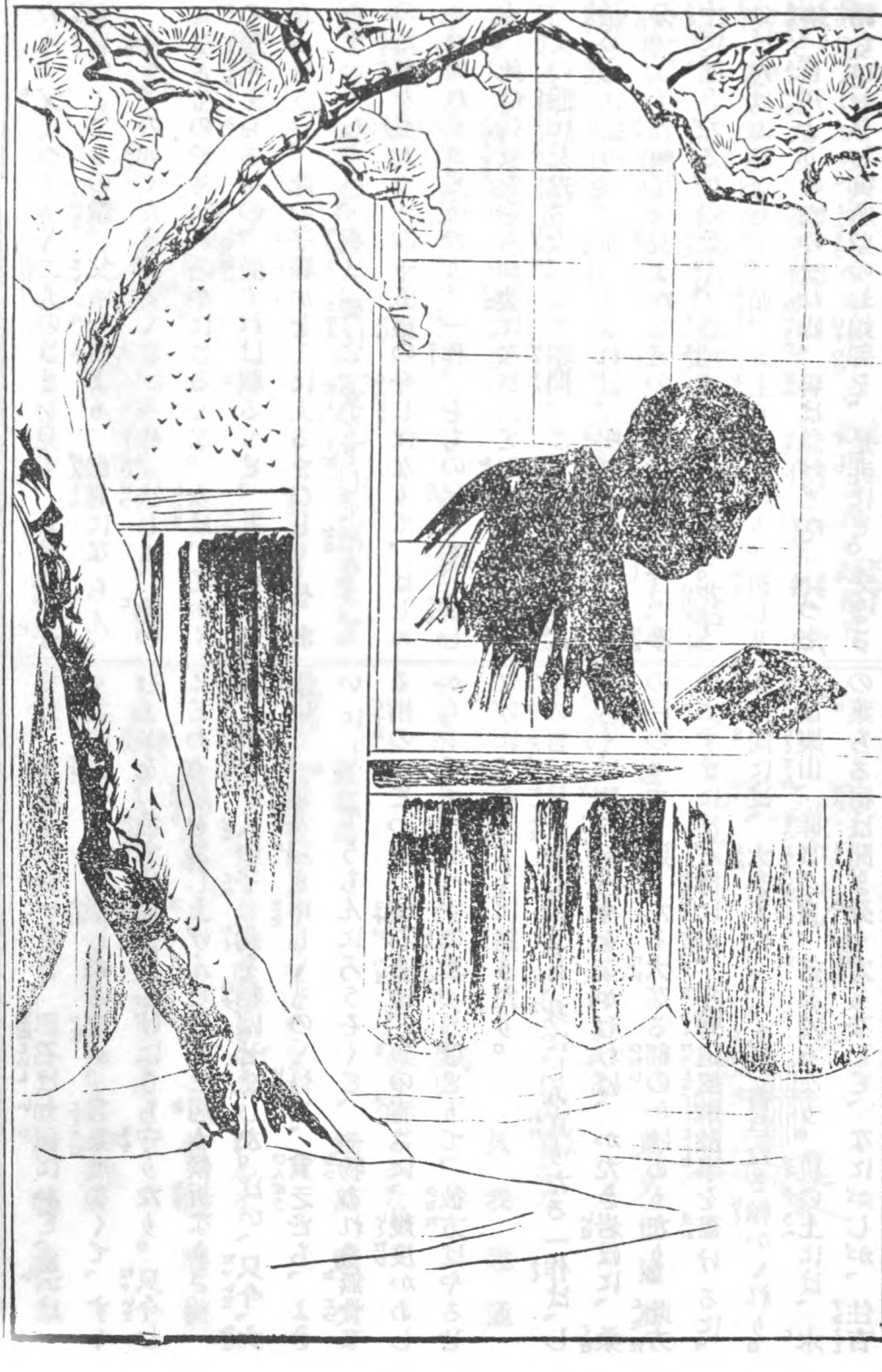
白魚女史

テッペンカケタカ、父様、一聲を月に殘して時鳥の。とう〱、はや初聲を人にとられけるよと、父が窓を叩くは例の花子なり。花子は、つねに朝戸出早し。とく庭をそゞろありきては、花さきたりとて、梢を呼びれこし、水鷄なりとて、父が戸を叩き、時雨か、木の葉かとて、ほと〱と窓をうち、かり〱となくよと云ひては、父が窓をあけつ。香爐峯の雪よとては、すだれをかゝげつして、内より、外より、いたづら事して、毎朝父を呼び起すを、今日のたはぶれのはじめとす。うるさき鳥よと、父はしかれど、花子の少しれくれたる時は、今朝は、雀は如何せしとて、たはぶれ事をまつもをかし。

テッペンカケタカ、あはれ二聲、父様聞えでやと、又も、父の窓を叩けば、さやうのおそき聲聞き給ふ父君にはあらず。もはやふもとの里より、卯花をも折りこらるる頃なりとて、笑ひて窓をひきあぐるは母なり。見入れど、誠に父はかげも見えず、しばしはたゞ見入れたりしが、さらば雪ちやんを起してんと云ふ彼方に雪子、はや帶さへしかとしめて、何處の雪ちやんをとて出で來る。何れも撫子のうつくしく笑へば、はゝそも思はず葉をならす。朝の庭、はやたのしげなり。

朝のきよめもすましたり。あさげの用意もとゝのひたる折りふし、梢は、例の掃除夫をひきつれて來りたり。一作、いざ上れ。おぢ〱するは男子にあらずと、しかと云ひて、いざ〱と迎ふる妻をかへりみ、朝げをとく奥にて。室の用意もよきかなどとひて、まづ奥に己座をしめ、一作てゝにとおごそかに命ずれば、一作も耻を忍びて、梢の傍近く座せり。

父様のおかへりぞとて、花子と、雪子とは、よみさせし書物をおきてかけ出しゝが、嚴然たる父のさまを見て、例のたはぶれも出でず。あしたの禮、殊勝げにの



べたり。父はつく〴〵二人のさまを見て、あはれ、子は教育によるもの哉。父も今日より、嚴君にならん。花、今までの如くたはぶるゝな。一作、決して、此のをこなるものどもにれろかにさるゝな。女は、とかく男の顏色を見るもの、愛すれば馴るゝと、孔子の云はれたるもうべ。此の子等がをこにふるまひしも、皆、我があまかりしため、堯は、舜に二女を下して治めさせ、其の器量を見たり。四十五歲の今日になりて、はじめてあつぱれとさとりたり。一作、そちの父とも、約したり。此の長女をそちが妻になさんと思ふ。十五年が間、父の眼に見たる女、なま學問、なま才智、あつぱれ治め方によりては、貞ともなれば、嗚呼ものともなる隨分、よく治めても見よかしとの梢の言葉、一作は、夢の中に聞きたるかの如く、心地もおぼろげなり。花子、今日はたはぶれならず。頭、え上らざりけり。折しも來客、百川よりのたのまれ媒、善は急げとか、いつぞや語らひおきし御所望のお娘御を、是非にと、先きさまは、たつてのおいそぎ、思召は如何にかと、云はでも其の事ならんと推したる妻が、言葉はなくて、すゝむる茶を、彼方は氣遣はしげにうち守りたり。只今おことわり狀をさし上げんとぞんじ居り候折なりき。娘は只今、人の子と約を結ばせました。はい、只今、大阪にて、浪花屋と申しゝものゝ忰と、貧乏どち、よきいにし、てうちんにろうそくと、一物あれど無骨なる梢のことわり、流石妻は、氣の毒さに、幾度かあしからずとて、かへす寫眞、うけとりて、彼方はやるせなげに、そこ〳〵に歸りたり。

梢の言、只今のことよし、身にしみ亘りたる一作は、しむらくは馴れぬへやをながむれば、かたき岩ほに、桑の弓の一すじ通りたる大なる額のかげありたり。此方のふすまには、柳に蛙、小野道風が故事を畫けるに、床の間には、大きくたゞ、一心と書きたる軸かゝれり。之は樂山、昨日、自、書きたるなり。机の上には、木の葉ちる宿は聞き分く方もなしと、なにがしが、住吉

のやしろにいのりて、つくりたる歌かきたる短冊と、孝經とのせたり。流石性ありてか、一作、見る毎、思ふ毎、耻ぢざるはなし。

梢、誠に、その日より嚴君の威儀をくづさず。とふ毎に一作襟をかき合したり。朝のはやき、夕のおそき、一作覺えず、昨日までのはげみなき心を悔いたり。

ゑにしは何方に結ぼるゝや、花子は、たゞ、昨日まで知らず、夫を、糞土の垣とあざけり、朽木と妹にさへよそせたる事を、我ながら耻ぢて、たゞ一室に顔をあからめてのみ居たり。

百川、その人は如何に、もゝの流れに心もをさまらずとかや。

（をはり）





文林

爐邊歳暮　東久世通禧

埋火のあたりはなれぬわれなれと
こゝろせはしきとしの暮かな

歳暮霰　久我建通

いそかしき年のくれとて吹く風に
あられも庭をはしりけるかな

歳暮鳥　鍋島直大

飛鳥の羽おとをきくもなにとなく
こゝろせはしき年のくれかな

船中歳暮　前田利嗣

くれ行もをしまさるらん年なみの
たつにまかするあまの小舟は

歳暮筏　津輕承昭

早せ川くたすいかたもつねよりは
いとなく見ゆる年のくれかな

都鄙歳暮　前田利鬯

松たてゝ年をむかふることわさは
みやこも鄙もかはらさりけり

家々歳暮　宮地嚴夫

門毎にいているひとのかす見えて
いそかはしくそ年のくれゆく

歳暮夢　北郷久政

行年のいそきにくれし今よひさへ
ゆめはしつかに見はてつる哉

歳暮近　坂正臣

今はとて歳もくるゝをいそくらむ
すゝはく音のきこえそめたる

歳暮鐘　植松有經

むかふさへはつかしき哉年くれて
よはひますみのかゝみと思へは

橋霜　諏訪忠元

里人のゆきゝまれなる芝橋は
ひるさへしものおきわたりけり

父にわかれける人のもとに　大畑弘國

たらちねの教まもりてなきあとも
つかふるを子のみちとこそしれ

舟隨山共走　伊東祐賢

山かけを眞帆にのせゆく風はやみ
みゆるみなとやうれしかるらむ

謠曲をよめる中に紅葉狩を　足立正枝

ぬきはなつますらたけ雄か太刀風に
ものすさましく散る紅葉かな

寒山月　三輪義方

雪の色にまさりてさむしおくやまの
しらかしの葉に照れる月夜は

原公道の母　佐々豊水

はたちあまり八歳のなかき月日をも

一日のごとくつかへてしはや

旅歳暮　鍋島榮子
事繁きみやこはなれてのどかにも
ひなの旅ねにおくるとしかな

爐邊惜年　前田朗子
暮てゆく年のをしさにうつみ火の
あたりの邪もまたれさりけり

寄玉歳暮　柳原愛子
言の葉の玉もひろはていたつらに
くれゆく年のをしくもあるかな

歳暮忙　小池道子
をこたりの積り積りていそかしき
年のくれにもなりにけるかな

漁村歳暮　北島以登子
海士かすむかとによせくる白浪の
おともせわしき年のくれかな

都歳暮　保科節子
いと廣きみやこ大路もせまきまで
行來にきはふとしのくれかな

草庵歳暮　中牟田常子
事しげき浮世はなれてすむいほは
としのくれともおほえさり鳧

雨中歳暮　原田蒼生子
常ならははれま待つへき諸ひとの
くるまいそかす年のくれかな

歳暮訪友　服部磯子
來てみれはみなつとひゐて面白く
としわすれする友のやとかな

驚歳暮　川村重子
あつさゆみはる立しよりゆく年の
早きにこそはおとろかれけれ

冬祝　佐々木濱子
おほみけしぬきましゝ世をかさねきて
たみあたゝかき冬の夜半かな

某の外國留學にいてたつとき　九玉子

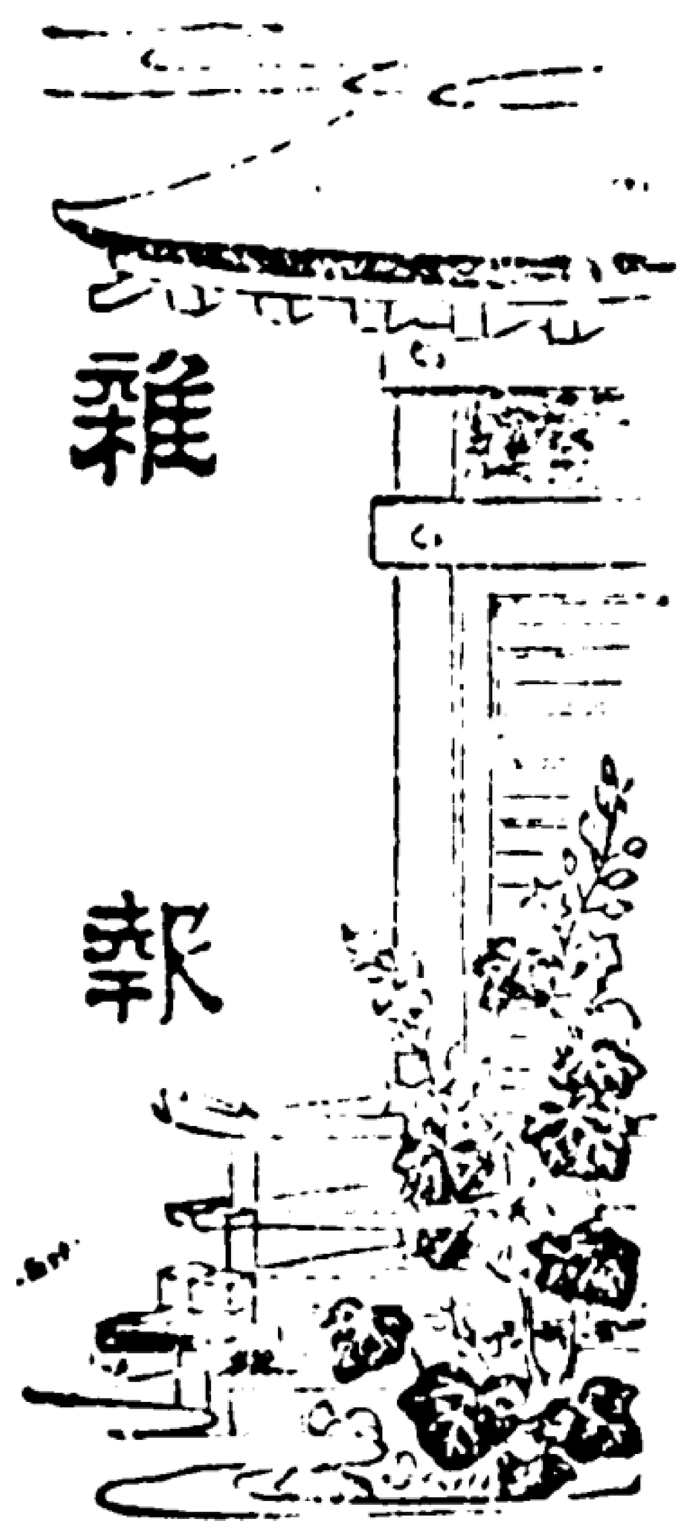
日本のそらをはなれてとつ國に
君が門出をいはふけふかな

竹　高橋みよ子

すゝみゆく敎の庭のくれ竹の
直なるふしに誰もならはむ

社頭霜　足立みつを

神垣のさかきの枝にかゝりけり
冬のたむけの霜のしらゆふ



●久邇宮御婚儀　陸軍中尉久邇宮邦彦王殿下には、故神宮祭主朝彦親王第三の王子におはして、明治六年七月廿三日京都に生誕遊ばさる。初め世志麿王と稱し、明治二十年春、三　陛下京都御駐輦の際、二月十九日京都御所に召され、拜謁を賜はり、同三月八日御繼嗣を仰付られ、邦彦王と稱せしめらる。廿四年十月父宮薨去、翌廿五年十月御一週祭を終らるゝや、府下麻布區鳥居坂に御移住遊ばし、成城學校に御入學、廿六年十二月御卒業ありて士官候補生に成らせられ、第三師團第六聯隊御入營、以來更らに御志願ありて、歩兵一等卒より、上等兵、二等軍曹、一等軍曹、歩兵曹長、見習士官を經させられて、三十年一月陸軍少尉に任せられ、今三十二年二月陸軍中尉に進み給ふ。其の後殿下には一層御奮勵ありて、陸軍大學校に入學の事を御出願あり、去月十五日名古屋に出でゝ御東上あり、東京御別邸より、日々御受驗の爲め、同大學に通はせらるゝ事なるが、去ぬる十日を以てその御事も終らせられし由。同殿下には、今回、御勅許ありて、島津忠重公の姉君俔子姫と御結婚の約成り、京都に鴨川荒神橋の北なる御本邸に於いて、去にし十三日午前十時を以て、

式を擧げさせられたり。俔子姬には八日午前十時十分、新橋發の列車にて東京御出發せられたり。御同乘は、宮内省調度局長長崎省吾氏を始め、島津家々令、家扶、侍女等十二名にして、見送人の重なる人々は、田中宮内大臣、三宮式部長官、土方伯、松方、樺山、西鄕、山本の鹿兒島出身の各大臣、大浦警視總監、其の他貴婦人、令孃等無慮三百餘名にして、送行甚盛んなりき。右に付き、宮殿下に於かせられても、去にし十日の夜、東京御出發、翌十一日午前九時八分七條着列車にて、角田家扶を隨へ、御媒介役田中宮内大臣及同夫人等とゝもに京都御本邸に入らせられたり。長崎調度局長は、先發として是れも夫人とゝもに、九日西京に着せり。御式當日は、勅使として主殿寮出張所長主殿助中川忠純氏は、皇后陛下御使、皇太子殿下御使をも仰付けられ、宮の御邸にいたり、紅白の絹、紅白の縮緬、紅白の眞綿、紅白の糸御交肴等を賜はりしと云ふ。承はる所に依れど、東京に於いての皇族御結婚には、必らず、儀仗兵を賜はるが例なるも、輦轂の外なれど、是に代ふるに、地方警官をして正裝せしめ、姬君の御車輿を警備せしめられしといふ。さて十五日午前十時には、御里開(俗聟入)として邦彦王幷に妃俔子兩殿下、假島津邸なる三井邸に入らせられし由。御料理は、宮の御邸にては、京都室町夷川上る木之枝、島津家は、祇園中村樓承はりたりと。兩殿下には、十八日京都御出發東上ありて、廿日午前參内遊ばされ、同日午後、東京に於いて、皇族方御親戚の公侯伯子の諸爵を招待ありて親宴を設けらるゝ御豫定なりき。

謹みて御慶事を祝し奉り、兩殿下の幾千代の末かけて榮えまさむことをねぎまつる。

●教育家のかゝみ　岩本氏は、長野縣信濃國諏訪郡湖南村士族岩本正明氏の弟にて、嘉永二年十月生れ、元治元年より、或は、東京に出で、或は鄕里にかへりなとして、遊學し、若山莊吉氏に漢學を、飯田武鄕氏に國學を、福田半氏に數學を學び、それより、師範學科

を講習して、明治九年十一月はしめて、諏訪郡落合村なる蔦木學校に在勤を命ぜられ、爾後、今日まで、二十三年あまり、同校に勤續せり。右の學校は、明治廿一年四月以來蔦木机、瀬澤、瀬澤新田の四校を合併して、新に一校を建築し、落合學校と稱し、廿五年七月同校高等小學を併置せしものなるが、氏は既に、落合高等小學校訓導兼校長、及び、落合尋常小學校訓導、兼校長を拜命し、孜々として、育英のことに盡瘁せり。氏は、人となり、温厚篤實にして、深く敎育に心を潜め、又最も慈善の心に富めり。其の敎授法の如きは、いと懇にて、寄留地なる、蔦木より、落合學校まで、一里あまれるばかりの所を、あめふるとも、風ふくとも、雪の積むとも、常に徒歩にて、通勤せるが、生徒の途にて、雪にまろび、雨風になやまさるゝものあれば、手をとりて、往復するなど、實に一身を献げて敎育に從事せるもといはすして何にぞ、同校の進歩著しくして、氏の薫陶をうけたるもの幾百人といふことを知らず。學士も出で、高等師範學校卒業生も出で、おの〳〵樞要の位置にあるもの、亦少からず。かくの如くなれば、氏が徳望は極めて高く、子弟のこれを慕ふこと父母の如く、敎育社會はいふまでもなく、遠き郷人もみな、深く氏を尊信せり。かつて近村富士見村、及び、境村に軋轢のおこりたることありしに、氏は、その害の敎育に及ぼすことの大いなることを歎きて、直接に間接に、その調停の勞をとりたりし程にて、かつて、敎育上の勤勞を賞ぜられ、文部省より、康熙字典と硯箱とを賜りたるものなり。

●孝女　ちよ女は、岩手縣紫波郡赤澤村の農藤田常治氏の妻にて、慶應元年二月に生れ、明治十四年、この家にとつぎけるが、夫に貞節をつくし、舅姑に孝養いたらざる所なく、赤澤村の孝女と唱はるゝに至りぬ。ちよ女は、家貧しきものから、夙におき、夜はにいね、髪を梳る暇だになく、近隣に、にぎはかしき事ありとて趣かんとだにせす、ひたすら、女の第一なる孝貞の

行をもて、こよなきたのしみとはしけり。夫は去年より、出稼にとて、他國に行きて、家にあらず。ちよ女は、家を守りて、晝は、人の雇となり、僅に五錢か十錢ばかりを得て、米稗の類を購ひつゝ、僅かに一家の生計を立て、夜はよるに、なにくれ家事の多きに安くもねふらず。その上舅は盲目にて、業を營む事あたはず。姑は、たゞ四人の孫の傅すれど、かくもちよ女の辛苦をなめて、得たるものもて、菓子に換ふるなどほしきまゝにふるまひ、あまつさへ我心にかなはざることある時は、遠慮もなくのゝしることあるも、ちよ女はさからはざるのみか、さまぐ心ゆくやうすかしなだむるものから、近きわたりの人たち、ふかく憐れみ、爭ひて、此の女を雇へり。女、もし人より衣類などめぐまるゝ時は、直ぐ姑にさゝぐるを常とせり。かくの如く、女が行は始めより、今日に至るまで、いさゝかも變りたることなきが故に、事其の筋に聞えて、縣知事より、左の如く褒賞せられたり。

岩手縣陸中國紫波郡赤澤村
平民藤田常治妻　藤田ちよ

平生、舅姑に仕へ、孝養怠らす、夫に對しては貞操を盡し、家政に勉勵し、志行を變ぜざること十八年一日の如し、誠に婦女の亀鑑たるものとす、依て爲其賞金二圓下賜候事。

明治三十二年九月二十八日
岩手知事正五位勳四等　弘末直方

◉また筑紫の肥後國菊池の郡、菊池村の高田多門が妻に、雪江子といへるがありけり。こは高田家に生れて、多門は某家より、養子に來りけるが、女は母に事ふる事至りて深く、いたく孝養を盡しゝかど、九十一歳の長壽を保ちてみまかりにき。明治二十八年七月十六日褒賞せられしことゝぞ、此處しるす

熊本縣菊池郡菊池村高田多門妻
雪江

平素、孝養の志厚く、母津義、明治十七年以來、老衰精神錯亂、且聾さなり、身体自由ならさるや、日夜床蓐に侍し、只管看護に心を盡し、嗜好は必す、之を備め、亦或時は、自ら脊負して、母の欲する所に遊行し、其の病鬱を慰め、且看護の傍ら、長女茂喜と共に、紡績裁縫等に從事し、僅の賃金を得て、其の家計を支持する等、茲に十有餘年、其の志行一日の如く、誠に奇特とす、仍て其の賞として、金壹圓下賜候事。

明治廿八年七月十六日　熊本縣知事從三位勳二等　松平正直　印

●殊勝なる婦人　愛知縣山田龜三の長女とも、今より十年前聟養子を迎へ、男子をさへ擧げしに、聟は、家政のこゝろゆかぬところありとて、逃亡せしまゝ、行方しれずとなりぬ。とも子、獨り手に遺子を鞠育し、今は、小學校に通學せしむ。其の他の行、世のつねの人の遠く及ばざる所なりと。

●ほむべき少年　福島縣山崎良助長男良次郎、わづかに、十二歳の少年にありながら、八ッの年より、當地名産なる信夫摺の行商を始め、晝となく、夜となく、力のかぎりを盡くし、各旅店を廻り、近來は、其の貫目の他のものより多きより、同業者に妨けられしも、神は誠をすてたまはで旅亭も旅人も、共に皆、少年が心掛を愛し、之を買ふもの、いよゝ多しと。

●女子職業學校のほまれ　府下神田一ッ橋の同學校にては、去二日北條侍從を遣され、生徒の製品を天覽に供し奉るべき旨おふせありしより、職員生徒一同聖恩に感泣して、孜々として、其の製作に勵み居るが、侍從の許まで、其の製品を差出す期は、明年二月頃ならむといふ。

●榊原子爵夫人逝去　越後の國舊高田藩主榊原子爵夫人禮子ば、肺炎、及び、乳巖にて、去にし二日の夜赤十字社病院内に長逝せり。享年四十六、前田侯爵、及び、有栖川御息所殿下近衞公夫人の姉君に當り、淑徳の令聞高かりしを。痛ましくも惜しむべきことなりかし。

●慈善家　京都三條通り東洞西へ入る中井三郎兵衞氏は、去る九月五日みまかれる父三平氏の遺言により、其の葬儀をば質素にして、智恩院、相國寺、壬生寺、東寺の四箇所にて、上下兩京區、及び、朱雀野の貧民六千人に限り、白米六十石を施與せんとて、いにし一日施米切符を各區村役場へ廻したり。猶、盲啞院孤兒院等に、そくばく金員を寄附したり。いと殊勝な

ることにこそ。

●國字改良　國字改良につきては、種々の議論あり。或は假字論者あり。或は、制限漢字論者あり。或は、羅馬字、或は、新製國字等の論者あり。猶、今後種々の異論も出づべし。最も、重要なる問題にして、大に學者の研究を要す。彼の羅馬字の如きは、到底、わが國に行はるべきものにあらず。新製國字論の如きは、唯、學者の一説として、今日は、之を聽くに止まるのみにして、前途、猶、甚だ、遼遠なりといふべし。彼の假字使用の法、及び、制限漢字の論は、刻下切要の問題なるのみならず、學者の奮發によりてはと望まる所もあり、こゝに帝國教育會にては、國字改良部といふを設け、斯學熱心の人々相會して、之が調査に從事したりしが、去十四日午後六時より、同部假字掛委員諸氏集會し、左の原案につきて、協議せしといふ。中には從ひがたき説もあれど、やがて修正せらるべきものなれば、その後に於いて評論することあるべし。

一、文は縦行に記すこと（横記の説を採らず）

一、片假名、平假名並用すること、

一、假名の形に改革を施さず、

一、同音の假名に數種あるを、各一種と限ること、其の例左の如し、

イロハニホヘトチリヌルヲワカヨタレソツネナラムウヰノオクヤマケフコエテアサキユメミシヱヒモセスン

いろはにほへとちりぬるをわかよたれそつねならむうゐのおくやまけふこえてあさきゆめみしゑひもせすん

但し「ヶ」「ト」「は」「ば」「に」の五字を存して、ヶニハに限りて用ゐる假名とすること

一、「わ」「ら」「し」の三字を存して語の中又は末に用ゐる假名とすること（同上）

一、「ゝ」「ゟ」「ん」「ヿ」「片」「ヒ」を存して用ゐること、

一、拗音の下の字を右の方に寄せて記すことゝすべし「キャ」「シュ」「チョ」「きゃ」「しゅ」「ちょ」の如し「クヮイ」「グヮイ」を「カイ」「ガイ」とすること。

一、促聲も右の方に寄す「チット」（夫）「ホッス」（欲）の如し

一、「チヽ」（父）「はゝ」（母）「ヤマ〳〵」（山々）「かは〳〵」（川々）の符字を存す、

一、「メートル」「ピータア」「アルコール」の類を用ゐず（辭書の順列を立て難ければなり）

一、頭字「キャピター」を新作せず（別に標識を付することゝすべし）

一、假名四十七字の中、左の三字を廢す（電信然るが故なり）阿行の

（オ）和行の（ヰ）と（ヱ）と、

一、又左の二音を廢す多行濁音の（ヂ）と（ヅ）と、

一、從來の假名遣を廢して、一切發音のまゝに寫す、但しチモウ（思）ツクロウ（繕）カコウ（圍）サソウ（誘）右の類り末の音を（ウ）と記して（フ）と記さず（他の波行四段の動詞を語尾は皆「ウ」なればそれと一致せしめんが爲めなり）

一、從來の字音假名遣を廢して、一切發音のまゝに寫す、キヤウ（京）キヤウ（興）ケフ（敎）ケフ（夾）右等すべて「キョウ」と寫す、

一、詞と詞との間を放すこと、一テニハ及助動詞を、上の詞に附くること、

一、固有名詞には、右の傍に縱線を附くる事、一句に「、」讀には「○」を用ゐる事、一言文一致なるべき一文中の用語に、成るべく音讀を避くる事、例せばコチサイ（交際）を「ツキアイ」シウカイ（集會）を「ヨリアイ」キヨウソウ（競爭）を「セリアイ」メエヨ（名譽）を「ホマレ」フメエイ（不名譽）をナヲレ（名折）メエシ（名刺）を「ナフダ」の類の如し、

●年狀特別取扱　毎年一月の初めに、郵便局へ輻輳する郵便物の數は、實に非常のものにして、最多數を占むるは、年賀狀なり。殊に近年に至り、人智の開發と共に、社交の増進せし結果、歳一歳と、年賀狀の著しく増加せるを見る。之が爲め、郵便局が、其の取扱の上に、非常なる繁劇と困難とを感ずるは、局外者の思ひ及ばさる程なれど、自然他の緊要なる郵便物を遲延せしむる虞なしとせず。右等の不都合を避け、且一般郵便物の速達を計るが爲め、今般東京郵便電信局に於いて、一新案を設け、東京市内は、江戸橋本局を始め、各支局、及、郵便受取所に至るまで、本年以後は、毎年十二月廿日より、同三十日に至るの間、年賀狀郵便物に限りて、左の各項に基き、特別取扱を爲すと云へば、多數の年賀狀を出す者は、豫め用意して、年内に特別取扱の法に依り、差出さば、他の緊要なる通信の速達を妨げず、差出人も、郵便局も、極めて都合よき事ならん。

年賀狀特別取扱方法

一、年賀狀特別取扱時間は、三十二年十二月廿日より同三十日までとす。

一、特別取扱を爲すべき年賀狀、郵便物は、二十通以上のものたらざるべからず。

但し、二名以上連合して差出すも妨げなし。

一、特別取扱により、年賀状差出すものは、必ず本局支局、又は郵便受取所に持參し、年賀状郵便物受付口と掲記しある窓口へ差出すべし。

一、特別取扱により、差出す年賀状には、紙片を以て結束し、其の上に年賀状の三字、及、通數を明記すべし。

一、年賀状差出人へは、受領證を交付せざるべし。

一、年賀状郵便物引受後　、差し立前と雖、還付の請に應ぜざるべし。

一、此方法により、差出したる年賀状は、明治三十三年一月一日、い號便の日附印を押捺し、同日最先便より、順次差出、及、配達す。

●聾啞治療につきて（承前）　こにしのふはち

此大切なる研究の着手極めて長時日の手續を要せり、頭腦の組織は非常に柔軟にして長時日の手術に堪ふ可らず、故に之に着手する前は先づ之を硬確にせざる可らず、又之を模型に採らざる可らず、之をなすには學者間にムウレル氏液として知られたる液にアルコオルを加へ六月中旬まで之を浸し然後眼を分離して更に三ヶ月餘重クロオム酸に浸し最後にアルコオルに浸して完了せり、合衆國第十人口統計に聾啞を兼れたる盲人五百三人の中二百七十四人は白痴若くは癲狂を以て視聽官及腦力を失へる原因となせり、故にロウラ、ブリッヂマンの如き大患に罹りて心力の幾分を保ち得たるは不思議の幸といふべし、試に此腦を解剖せば視聽兩覺の存する位置と信ぜられたる部分の發達の模樣を發見し得べしとは學者間の輿論にして之に着手するに當り先づ六個の檢點を定め撮影し又之を膏石摸型に採りたり、之を衡りしに千二百四グラムあり、實に英國及全歐羅巴人の腦の平均重に比すれば極めて些細の差なりブリッヂマンの死する時には六十歳にして身長は五英尺三英寸體重は九十八磅あり、故に同女の腦の重さは同年齡同体格の女子に比して少差を見ずといふも可なり。

ドクトル、ハウ氏が米國心理學雜誌に腦の解剖に就き學術上長文の論を載せたり、其中に左の數言あり。

腦神經は味覺聽覺及び眼球外筋と結合せる神經と共に其太さを減じたり、又腦神經は總て縮少せり、是畢竟之を用ひざるに依れり。

腦の兩球の研究により詳に論ずれば左手は右手よりも甚だよく發達せり、ブリッヂマンが僅に有せる談話の力も全く是に基くなるべし。

左手の人に於ては言語の中樞は左球に在りといへり、之に反して左球の或部分は之に符合せる右の諸部より遙によく發達せり、此事は同女の大患に罹りし從數年の間右眼は光線の感覺ありされど左眼には全く元によるべし、故に右眼の附きたる半側即右半よりもよく發育せり。

又腦の積畝を測りしに之と同一の統計に比して其全量に比すれば少しく小さく其大さに比すれば稍重しといはざる可らず、然れども全體に論ずれば今までの成績にては常人の腦と甚だ著しき差違を發見するを得ず、且其少差とする所は充分に發育すべき部分の發育を遂げざるに基くといはざる可らずして結局の研究は未だ完了に至らず、一層趣味ある有益の報告は將來の研究に屬せり、今日までの成

識にて得たるものは腦の某部分の某知覺の中樞なりとの證を確實にし其所在地畧知せしむるに至れるのみ。(チハリ)

●少年の喫煙禁止　少年の喫煙については、國家の前途にも人々の行末のためにも、甚だ憂ふべき事にして、豈ひとり生意氣に見ゆるが如き、些細なることのみにて、禁煙を唱ふるものならむや。この頃國會議員の中にて、少年禁煙に關する法案を提出せしより、世人の、これに注意するもの、やう〳〵多くなれるが如し。この際莨の害毒をあげて、いさゝか諸嬢の參考に供へむ。

喫煙は、成人を害すること尠からざれども、殊に少年を害すること甚し、即喫煙を嗜む少年は、其の身體の發育充分ならず。成人たるべきの年齢に達する前に、成熟し、又、羸弱にして、身を終ること往々あり。嘗て佛蘭西の一名醫、常習として、喫煙せる九歳より十五歳までの兒童三十八名を試驗せしに、中九名は、確にニコチン中毒の徴候として、智力に於て、大に、欠乏せる點ありて、又アルコール性の飲料を熱望し、三名は、心臓病に罹り、八名は、其の血脈の質惡しくなり十二名は、屢、鼻孔より出血を起し、十名は、夜中、動もすれば、安眠するを得ざるの癖あり。又四名は、其の口内の粘膜に腫脹物を生ぜしと云ふ。

△喫煙と遺傳　喫煙家に向て、莨の害を喋々述ぶるも多くは、己嘗て害を蒙りしことなければ、そば容易に信じ難しと答ふるなるべし。斯る人々に對して、吾人一言すべきことあり。即喫煙家の血液唾液等には莨の毒混合し居り、又、其の腦髓神經は、多少、其の中毒にて、痴鈍となり。居るが故に、其の子孫に疾病多き身體と、薄弱なる精神とを遺傳す。而して、身心共に、不健全なれど、動物性の肉慾のみ發達し、智性徳性は、漸々力を失ふに至るべし。父の罪が子に報い來ること、即遺傳の恐るべきことは、喋々を待たずして、能く人々の知る所なり。莨の害が、個人の上に現はるゝ如く、國民の上にも現はるゝや必せり。爰に屈

強なる體格と體力とを有する、一人種あらんに、其の子女をして、幼時より喫煙の習慣を養はしめ、成長するに及んで、互に相婚せしめ、斯くて、幾代も經ば、其の子孫の體格は、次第々々に衰へ行き、遂には、其の祖先より、數等劣等なる人種を見るに至るべし。實に神經系統を強く壓迫して、直接に心臟に作用し、又血液中に毒素を混和し、以て生命の根源を惱殺する毒物こそ、人種を衰頽せしむる能力を有するや疑もなし。

△喫煙と飲酒　人喫煙すれど、口内の粘膜は弛みて、多量の唾液を分泌するが故に、消化機能をなすにあたりて、大に、唾液の不足を生ずるなり。凡そ、體内は、不用なる水分並に、鹽分を體外に排泄するは、主として、心臟と尿道の用なるべきに、既に口中にて、多量の水分を排泄すれば、口は消化機たるの本領を棄てゝ、排泄機となり。又、腎臟尿道は、已か職分を、他人に奪はれて、簡慢懶惰に日を送るに至るべし。而して、口中にては、食物消化の用に供すべき唾液を、多く徒費し、鹽分のみを餘すを以て、大に渴を覺ゆ。隨て、アルコール性の飲料を渴望するに至るべし。故に喫煙と飲酒とは、甚密接の關係を有し、飲酒は喫煙より來ること多けれど、人禁酒せんと欲せど、先、禁煙より初めざるべからずと云ふ。

△喫煙と傳染病　喫煙は、血液を過度に流動せしむ。亦、血球に變狀を來たさしめ、胃弱を起し、心臟の力を弱め、且つ、其の運動を不規則ならしむるを以て、煙草製造者や、喫煙家は、傳染病に感染し易く、且つ、容易に、快愈し難く、幸にして死を免るゝも、以前の健康に復するは、甚難きものなり。又莨の煙が、屢、彼の忌むべき口中、及び、氣管の腫物の傳染の媒介をなすことあり。且つ、患者が、用ゐし煙管を用ゐて、甚恐るべき病毒に感染せし例も尠からず。

△莨か精神上に及ぼす害　以上は、皆、莨が身體上に及ぼす害なれども、尚、恐るべきは、精神上の害、即、智力を衰へしめ、德義心を微弱ならしむることなり。

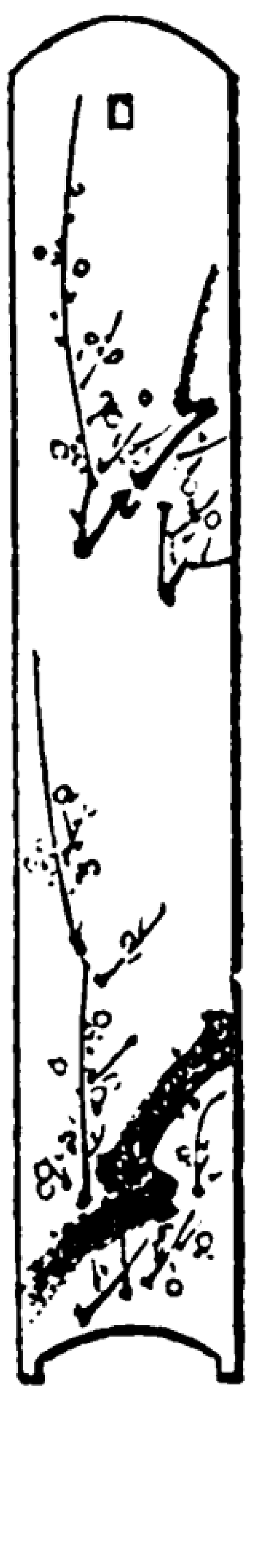
記憶力の如きは、殊に、其の影響を蒙ること著しきものなり。

佛國巴里の、或る學校にて、いと面白き統計作られぬそは、生徒の喫煙家　、禁煙家とを、別ちて、種々なる學問上の試驗を行ひし處、其の成績喫煙家は禁煙家に劣りしこと、數等なりしと、又、喫煙家、入學試驗にても、通例、下位を占むるが上に、進歩も遲ければ遂には禁煙家に尠からぬ懸隔を生ずといふ。米國カルホルニヤ州の公立小學校に於て、男生は、女生に比して、一般に、其の成績惡しかりければ、評議員等は這は敎授上敎員等の注意の足らざりし爲か、或は、其の訓陶宜しきを得ざりしによるならんかと種々取調べたるに、遂に十五歲十二歲までの男生百人の內、十九人までは、常に卷莨を吹かせしを發見し　是こそ、學力劣等の原因なりしを知りたり。

喫煙家、或は云はん、凡そ過度に喫煙すればこそ、其の恐るべき害も、身に及ふべけれど、其の分量だに制限せば毫も差支なしと、然れども、世人の熟知する如く、凡て魔睡劑や、興奮劑の類は用ゐる度每に幾分づつか、其の量を增さゞれば、功を奏せざるものなり。而して適宜と過度との境界は、極めて、不分明なれば、喫煙の如きも、人、一度、其の味を知りて、用ゐるの習慣を作りては如何で、其の量を制限し得べき。次第々々に、其の量を增加するに非ざれば滿足せずして、遂には、其の奴隷となりて、身を滅ぼすに至るべし。然れば人々よ、莨の害を知り給はゞ度を過さぬ樣注意すと云はず、斷然、之を棄て給へ。殊に願はしきは、後來、我國の榮枯盛衰に直接の關係ある少年をば、初より此の毒草を手にせざる樣勸誘し、以て災を未發に防がんことに盡力し給はんことなり。蓋、世界に雄飛すべき國民は强壯なる身體と健全なる精神とを要すればなり。

●東西南北　△古墳發見　大和國宇陀郡榛原町、大字、上井足五十六番屋敷松浦富三郎といふ者先月廿六

日、石材採取のため、裏方にわたる小丘を發掘したるに、古鏡、其の他數種の古器物を發見したるを以つて、翌日同地警察分署へ屆出てたり。發掘の場所は、井足丘の麓城山の西にわたり、稍圓形をなしたる所にして、愛宕神社と稱する一小祠あり、其の周圍、およそ、五尺餘、發見の所有地なり。發見物は、地下三尺餘のところにありて、下には川砂礫を敷きかため、上には、大小の石をおほひたりし由。口碑傳説として、別に聞ゆるものなけれど、西方の高丘は、往昔城壘のありし地にて、今に城山の稱あり。又城山の地續北の方に宇陀水分神社鎭座ます、創立は、崇神天皇の御代にして、凡、二千年も經たりし古神社なりといふ。今回發見せしものは、古鏡二面殊數玉の如きもの二百五十個、環玉一箇、土器十三箇刀大小二本、鎧樣のもの一箇、鎗樣のもの一本、長刀樣のもの一本、矢の根やうのもの二本なりと、深く發掘せば、必ず石棺の露はるゝ見込なりといふ△黑奴の文字　亞米利加の黑奴中文字を有するは、ひとりヴァイと稱する種族のみなり。彼等が、其を使用しはじめたるは、今より二百四十年以前のことにて、西洋の文字に似たる二十六字、之を綴りて、二百二十六字を使用しをれりといふ　△小作人と地主　信州の中津村字御馬寄といふ村にては、何やかや害を蒙りて、田畠の收獲例年の如くならざりしかど、小作人一同協議の上地主に納米八分減の請求をなしゝに、地主も、亦、其の情狀を酌みて、請求にもまして一割減納のことを許諾せり。斯りければ、小作人等は、深く地主の厚意に感じ、納米は總べて、期日に先ちて完納し、一村は和氣靄々人々の心は、霜月師走より、既に正　月なりといふ。△自費にて道路を開鑿す　北海道國後東沸村の清水平右衛門といふ人は同村より泊村に至る四里餘の新道路を自費を以つて開鑿し、このごろ、其の工を竣へたりといふ。篤志の人といふべし



女鑑兼題

一月廿日發行の分

歌　爐邊會談
文　わが里の新年

一月八日限

二月五日發行の分

歌　雪中梅
文　歌文の添削を乞ふ文

一月廿三日限

●女鑑月次兼題歌文投稿書式

歌書式

題
姓名

用紙は半紙半截の事。一題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其他は悉く假名、若しくは一の漢字にて認むべし。

文書式

題
住所
姓名

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

○總べて文字は分り易き樣、漢字、楷書、假名は普通の平假名にて別々に離して認むべし。
○書式に違ひたるは總べて沒書とす。
○女子は、なにびとにても隨意に投稿することを得。



教の庭

十二月廿日兼題　煤拂

天

こん年を迎へんものとをちこちに
すゝはらふおとのいさましきかな　京都市蛤御門前　川端まさ子

地

年の内につもるちりをは拂ひてぞ
こゝろのうちにはるはきにける　下谷區下根岸町三十一番地　椎野ぬき子

人

煤はらふ竹の小えだのさやさやに
とし男の聲もにぎはひにけり　肥後國菊池郡城北村　佐々小琴子

秀逸　（十首）

あら玉の年をむかへんいとなみに
すゝはらふおとのにきはしきかな　甲府　名取正代子

ひとゝせの塵を拂はむとわが宿は
をさゝのおとのにきはしきかな　神奈川田尻ゑい子

よのちりをのかれし庵も夏の日の
かやりのなこりけふはらひけり　石見　道家靜野子

こゝ彼處ちり打ちはらふ音きけは
いとゝせかるゝとしのくれかな　金澤　戸倉信子

さゝ竹のよは變れどもかはらぬは
としごとにするすゝはらひかな　四谷　都水春子

賤かやも年をむかふる志るしとて
のきはのちりをはらひつるかな　赤坂　田中元子

年ことにはらへるすゝや色かへて
ひとのかしらのゆきとつむらん　周防　村上操子

心からきよくなりけりひと年の
つもれるすゝをはらひつくして　同　田村多豆子

心まですが〳〵しくもなりにけり
のこるくまなくすゝはらひして　伊勢　河原芳子

笑はれつわらひつすゝをとる人の
かほにそ見ゆるみよのゆたけさ　安房　鈴木秀子

（以下原稿到着順）

こむ年も早むかへたるこゝちして
すゝはらふひはうれしかりけり　宇高まつ子

冬の日もはつかばかりになりぬれば
すゝたはらひてみなはるをまつ　中原虎子

たかき屋もしづが伏屋もおしなへて
すゝはらひするこゑぞにぎはふ　佐々有郷子

すが〳〵しこゝろにかゝる塵もなく　羽田三緒子

まこと〳〵まことをすゝはらひして

をちこちに煤はくおとを聞きてより
先づあらたまるわがこゝろかな　加納鈴子

一とせのちりをはらひて行くとしを
きよくもおくるすがたなるかな　山田稻子

新たまのとしむかへんといつかたも
すゝはらひにぞいとまなげなる　友永章子

あさ夕にすゝけしちりをあらたまの
としむかへんとはらひつるかな　那須昌子

うつばりのすゝははらへど年つもる
かしらのゆきぞやるかたのなき　村崎包子

年もはやくれんとすればたれもみな
いそがはしくもすゝはらひする　黒田明子

いたづらに月日とともにつもりたる
すゝはらひするとしのくれかな　下田龜子

いつとなくふるびし煤を拂ひとりて
としのかはるをまつぞたのしき　服部倫子

いさやまづすゝはらひせんあら玉の
としのいそきはあまたあれども　永井さい子

わびしげに煤はらへどもこんはるを
おもへは勇む今日にもあるかな　田代綾子

ふるとしの煤はらひしてあたらしき
はるのもうけにいそがしきかな　田代艷子

ふゆごもる里のすみ家のすゝはきて
ゆたけき御代のはるをむかへん　石井登子

煤はらふさゝもてつくろいとなみの
ひげのながき代いはふ今日かな　佐々冨枝子

おのがゐるへやたに掃ぬあるしさへ
けふは煤はきとはゝきとりつゝ　横山柳子

いさぎよくさゝ取りいれて煤はらふ
けふはあるしもいそがしげなり　横山すが子

かへりこん春やまつらんしつの女の
いとうれしげにすゝはらふみゆ　坂田弼代子

としくれぬこゝろの罪ともろともに
いざやはらはむけふのすゝはき　佐藤君子

としうちに積れるちりをかきはらひ
やがてこゝろもきよくなりけり　西川順子

しかすがにはるの設けといへ〳〵も
きのふけふよりすゝはらふかな　福原菫子

もろ人のはるまちやとのすゝはらひ
いはひさゝめくとしのくれかな　木村きく子

あたらしき春むかへんとことしうちに
やどてふやどはすゝはらふなり　木村君子

雲の上もしづがふせやもおしなへて
くれゆくとしはすゝはらひする　德永萬壽子

くれてゆく年のなごりはをしめども
いとどたのしきすゝはらひかな　德永識子

筵の海老をそなへまつりてみやびとの
とりどりいはふすゝはらひかな　小森田輝子

ひと年のすゝもあくたもうちはらひ
さよあらたまのはるをまちなん　澤田春子

こゝろから身もさむからず煤はらひ
わか葉のはるをきよくむかへん　澤田十萬里子

年うちのけがれしすゝをはらひ置て
ゆたけきはるをむかへてしがな　立田原登美子

たゝみ打つ音いとはげしとなりには
けふひとゝせのちりはらふらし　目黒佐喜子

やすらけきみ代のめぐみにもれずして　立田原直子

ひなもゆたかにすゝはらふなり

いさゝらは間こさく〜のちりを拂ひ
こゝろのさかにはるやむかへむ　立田屋くに子

かほも手もまくろになりて賤の女の
わらふはすゝをはらふなるらむ　山根久子

家ごとにすゝさるおさのせはしきは
くれゆくさしのしるしなるらむ　影山やま子

あらたまの清きさしをばむかへなむ
ひさゝせつもるすゝはらひして　栗林奚雪子

ふるさしの煤うちはらひきよめつゝ
はるをむかふるこゝろうれしも　石川類子

こゝろまで清くなりけりあらたまの
さしをむかふるすゝはらひして　石川樂子

年のくれいさゝむけれはもろひさか
すゝさいゝつゝすゝはらひけり　石川久子

あら玉のさしをむかふるきよめには
こゝろのすゝもはらひてしかな　石川なゑ子

一させのすゝはくまなくはらひけり
こゝろのちりはいかにしてまし　熊武久子

あたらしき年むかへんさこゝかしこ
すゝうちはらふおさぞきこゆる　上田綠子

少女子かかひ〜しくもいてたちて
すゝはらひするいへぞゆかしき　藤村説子

みるたにもひふせかりける賤かやも
すゝはらひせしけふのきよけさ　松木下枝子

にきはしく軒はつゝきのすゝはらひ
こゝにはおそきあらたまのさし　永山豐子

あたらしき年をむかふるうれしさに
ひさよりさきにすゝはらひせり　山本龍子

人もかくすゝはらひしてすみなれし
いへさしもなきこゝちなるらん　伏脇米子

あたらしき年むかへむさくれはつる
なこりわすれてはらふすゝかな　森川ため子

あはらやの内外のすゝをはらひつゝ
めでたきさしをまつゆふへかな　福岡郁子

しずか家のをさこをみなもさも共に
世のちりはらふけふにもある哉　駒澤まつ子

けふよりはこん春をのみまたれけり
こなたかなたのすゝはらひして　尾崎嘉子

すゝはらふけふのいさなみ冬の日の
ここにみしかきこゝちのみして　賀茂挺子

ふたさしのちりをはらひて新らしき
さしのひかりをけふよりそまつ　加藤數子

くものすもすゝたるくまも打ち拂ひ
すゝかくしくもさしやまたまし　服部正子

すゝはらふ年のをはりのけふのみさ
世すてし身さへしつこゝろなき　服部萬子

たゝみうちすゝはらひして寛かなる
さしのくれこそにきはひにけれ　伊東千代子

家のうちのすゝはらひしてこむ年を
すが〜しくもまつそたのしき　伊東いさ子

すゝはらひ家内きよめて湯あみして
すか〜しくもなるこゝろかな　河合ぬひ子

こんさしもまたつもる野端のすゝさりて
をいのやまぢのさしこゆるなり　鵜澤千代子

わかみのみかさぬる年にあられさも
すゝうちはらふおさそわひしき　本多靜子

すぎつ行く月日のながき世なりせば　石川多那子

すゝはらふ日のうれしからまし

をしめどもなかれゆく日のあすか川
はらひしちりのみづにつれつゝ
石川よし子

いとまなきとしの暮とはなりにけり
すゝはらふをとたえずきこえて
柿野靜子

ちりひちをはらひきよめて家ことに
またこんとしのさちいのるらん
八木沼里子

一とせのちりをはるふやをちこちに
をざさまじりのこゑぞにぎをふ
南里さた子

たまさかにひのはゝきもくろみけり
かまどのけぶりたつぞうれしき
田山芳子

くるとしをきよめし家にむかえんと
こゝにかしこにすゝはらふらん
井川澄子

いづかたもにきはふ暮やすゝはらひ
いへをきよめてとしをむかへん
神谷露朝子

こん春をこゝろきよらにむかへんと
しづかいへゐとすゝはらひつゝ
由井淚子

すゝとりし今よひのまどにさす月は
ことさらきよきこゝ地こそすれ
二宮ゆきえ子

世のちりにそましとしめし宿なから
なほもきよむるすゝはらひかな
名取よし子

年としにつもれるすゝははらへとも
おこたりのちりそうつみのこれる
坂田喜美子

限もなくすゝはらひえしゆふべこそ
ことのはなさへはるこゝちすれ
村山てる子

朝な夕なかしくけふりのかくはかり
つもれるすゝにおどろかれぬる
山田靜子

朝ゆふのけふりはかくもつもりつゝ
はらひなやめるすゝもあるかな
山田婦美子

山をなすすゝをみるにもおもふかな
こゝろのすゝはいかばかりかと
宮城野小萩

とし毎にはらひてもなほやまなせば
さぞなこゝろはすゝのあらまし
青柳糸子

名こりなく我家のすゝははらひけり
こゝろのちりものこらざらまし
田中ふさ子

家ことにすゝとりはらふちりよりぞ
はるもまたきにかすみたちける
森こと子

家の内のすゝはらひしてこむとしは
こゝろにちりもおかしとぞ思ふ
野中朝子

打ちはらふ窓より見ればわがやどの
となりもけふはすゝはらひせり
二宮はる枝子

いかばかり嬉しからましすゝのこと
こゝろのうさもはらひはてなば
長谷川まつ枝子

家の内はいときよらにもなりにけり
こゝろのちりもはらふよしもか
中村きよ子

けふはらふうつばりの上の煤にこそ
ひきゆくこまのあとは見えけれ
中村良子

いたづらに古きしるしやのこさじと
すゝうちはらふとしのくれかな
山崎ひろ子

年のうちにふりにしことやのこさじと
きよらにはらふくれのすゝかな
駒井うたの子

煤はらふ子等が手ぶりに知られけり
くれなんとしのいそがるゝこと
田中こま子

冬ははやいく日もあらぬ今日の日に
いそがはしげにはらふすゝかな
堀内たえ子

乙女子がはらふおとまていそくなり
すゝとるいへのとしのくれかた
柳塲はつえ子

身につもるとしのすゝをばうちはらひ
齋藤ふさの子

ふり積るすゝやはらふはゆくとしを
きよらにまたんあらたまのとし　松本みよし子

こん年なむかひとなりのすゝはらひ
いそきておくるなぐさなるらん　佐加井ため子

家ごとにけふぞなはりのすゝはらひ
清けくもはらへちりのこゝろを　柴田久尾子

こむ年にあはんと思へばすゝはらひ
わびしきものゝにぎはしきかな　三木蕗子

晴らかにすゝはらひするとしのくれは
わびしきものゝたのもしきかな　兆八千代子

みやこべもしつかわらやもおしなへて
いつくのいへもあらたまりけり　兆眞澄子

おちこちにすゝはらふおともいさましく
すゝはらへするとしのくれかな　杉村壽賀子

煤はらふそのいふせさやいかならん
としあらたまるこゝちこそすれ　鶴山綾子

すゝはらひ今日はすましつ松むかへ
はなみるはるをまつとおもへは　高砂きよ代子

やとことにすゝはらひして大かたは
いざこれよりははるを待たなん　高砂菊代子

人なみにすゝははらへどおこたりの
またこんはるを今日よりそ待つ　吉崎世根子

ひと年につもりしちりを打ちはらひ
身のちりはかりいかゞしてまし　久松誠子

清らけきとしむかへんとすゝはらふ
こゝろきよらにはるをむかへむ　川口文子

事しげくすゝはらひなす今日の日を
おといさましきとしのくれかな　月野さへ子

今日こそは家のうちよりこゝろまて
そとに見なせるわがつくゑかな　三野ていい子

あらたまのとしむかへんとかさ毎に
はらひきよめてとしをむかへめ　木谷ひで子

煤はらひこゝろもともにきよめつゝ
こゝもかしこもすゝはらふかな　阿保松子

あすの日もあらぬ斗りとをちこちに
また来んとしをいさやむかへん　矢田部信枝子

はや處々に煤うちはらふおとぞする
すゝ取りはらふはゝき木のおと
さてもせかるゝとしのくれかな　德永そう子

十二月廿日兼題　埋火

天　甲府市山田町　名取正代子

吹雪はげしきわした、散たばしる夕べ、とひける人もいとうと〳〵しうなりゆく中に、獨り親まるゝ心の友は、埋火になんありける。さるは、かきおこすまゝに、あたりいとゞのどけうなりまさりて、鶯も、軒端の梅もまだしらぬ程に、はや春をしめたる心地せられ、さしそふる櫻炭は、名におひて、花のにほひいづべくぞおもほゆる。まして、そらだきのかほりゆかしうくゆらせたるなど、いはむかたなし。かくて、かしらのやう〳〵白うなりゆくまで、我身の爲につとめて、室をあたゝめ、筆とる手先、さては硯の海の水さへ打とかして、霜夜の寒さも、露ばかり身におぼえしめざるよ。冬の日の、こよなうゆかしくなづかしきは此友をおき

て、はた何かあらむ。

地　但馬國出石町　西川順子

雪ふるあしたのむしろにも、これなくてはともてはやされ、月かげ凍る夜のまとゐにも、これこそはとむかへられつゝ、昔語りをわたゝむるものは、埋火なりけり。あられたばしる窓の下に、ひとり書讀む友ともなり、ものおもふ人の、何となく心なぐさむるよすがともなるべきは、これになむ。おのれも、常にこの埋火を友として、燈の下に昔物語などひもとくが例なるを、こよひしもおもしろきまゝに、火桶の事をも、しばし忘れしを、すきもる風の身にしむに、ふとおどろきて、床しき友はいかにやと、そとさしのぞけば、白き灰がちになりたるこそ、清原のおもとならねど、いとわろく覺えらるれ。

埋火のおもひおこして事もみな
　はかなく消えて夜は更にけり

など口吟みつゝ、枕につく。

人　越中國氷見郡氷見南上町八五ノ一　伏脇米子

冴え渡る夜寒もしらで呉竹の
　ふしよかりけり埋火のもと

あなゝつかしの埋火よ。客人に進むるも、日頃はまづこれなりけり。種々の話も、これを圍みて集ふなりけり。是なくば、如何にしてか冬を凌がん。實にや、命はこれにこそ。耆と言はず、夜と限らず、さし添ふる炭のつぎ〳〵語らへば、まだきに春の心地せらるなむ。小瓶の梅も催されてか、微笑みにけり。さても、長閑さは有情にのみ限らざりけりと、そゞろをかしうなん。あはれ、何はおきても、冬は埋火にこそ。埋火のもとに、己が斯くものしゝを、埋火のもとに選び給ふらん。埋火のもとに、見る人は見給ふらん。あなをかしや。

人　和泉國泉北郡深井村　福原菫子

月花も、折に觸れたる友ながら、老も若きも、冬の埋火ばかり、なつかしくむつぶるゝものはあらず。霜の朝、雪の夕は、殊に其のあたりはなれ難く、思ふどち語り合ふ折は更なり、獨居のつれ〴〵を眺むる友ともなり、たぎる湯の松風に通ふ音をきゝなす時は、さながら、春の日の光りにあたる心地して、狐なく寒きよすがらも、火桶の元によりて更行そらもおぼえずてなん。

人　松山市一番町　宇高まつ子

雪の朝しもの夕はさらにもいはず、ながき夜のつれつれをなくさむる友として、しばしもはなれかたくしたしまるゝは、埋火になむ。ことにうれしきは、一日の業なしをへて、父母はらから打つどひ、温けき埋火とりかこみて、罪もなきものがたりに笑ひ興ずる夕のたのしさは、げに、花も紅葉もものかはと、打むかはる

ろや。

（以下原稿到着順）

佐藤きみ子

立田姫の織なせし錦かさながめし、木々の梢の紅葉葉も、なごりなう散りはて、木枯いとつよう吹きすさび、六ツの花大空よりちりくる夜中など、わきて、なつかしう思ふは、埋火になん。我はらから、あるは、心しる友どちなどゝ、あたりのどかにまとゐして、おのが思ふことゞも打語り、とひつ問はれつ、ふけ行く夜中もしらず。暁しらす遠山寺の鐘の響におどろき、火桶はきゐはてゝ、炭さし添ゆるもなかしく、またたのし。されど、日の本の恵の露にうろほふ靑人草の、そが中には、身も切らるゝ如き霜夜のさむしろに、つゞれの衣みにまとひ、行きこふ人の恵もて、露の命をつなぎつゝあるは、世にもあはれなることなり。數ならぬ身ながらかゝる人々の心はつゆしらず、消ゐはてぬ火を娯悦の友として、樂しくむすび合ひつゝ寒けき夜もよそ事と過すは、げにも、豐けき御代のたまものにこそ。

影山やま子

春のあした、霞の野邊に若菜つみ、みどりゆかしき櫻の下に、秋すゞしき風をめで、くまなくすめる月かけに、思ふどちかたらひつゝ、腰折れども讀み出でんなど、こよなき樂み多かれど、わきて、をやみなかりし吹雪の、今日しも、風さへとみにしづまりて、見渡すかぎり白妙の色けざやかに、さながら銀の世界にやさばかり思はれ、はかなかりし庭の面さへ、何となく趣きゆかしう、野洲にとびかふ小鳥さへ、いとすてがたふ見なされて、埋火の元に、一人見ん事のあたらしや。たぞ訪ひ來なんにはなど思ひわびつゝあなるほどに、ゆくりなくも、外面に人のけはへするに、もしやとうれしう、いらへもなしあへずかけ出づれば、あななつかしや。親しき友の、二人三人打つれ立ちて、今日しも、こなたにて雪見のむしろ開かばやと、おしてまかりつるよ。なめげのつみはゆるさせ給へやなど、のゝしりあひて、おのがじしあやしき歌どもよみいで、あるはなかしきすさびなどして、日あしも知らですごしき。いつしかなごりなう暮れゆくまゝに、寒さのみいと堪へがたうおぼゐて、かたみにかへりみもせざりし埋火の元、いとこひしう、云ひあはせたらんやうに、いつしかと皆つどひ來て、埋火けたつるさまの、ものぐるほしう。すさびも今はものかはと、ふけゆく鐘の音もしらず、何くれと心のゆくかぎり語りあかせしは、げにたぐふべきかたなく樂しかりき。かゝるはみな彼の埋火のたまものなりけり。

河村君子

埋火よ、埋火よ、あはれ埋火よ。いましは、山の陰、谷の底を厭ひて、世になげきこる山賤の斧にふれ、きりやかれて黒染の衣をまとひ、更に火さりの中に入れられて、花の姿をなし、もてはやさるゝをこよなきほまれと思へるか。冬、宮殿にめされ、黄金の火桶、化粧灰の上にありて、ねならぬ香にたきしめらるゝにかへて、夏さりくれば、賤がやの片隅に、靑やかなる木の葉さし入れられて、蚊遣ふすぶる身とせらるゝはかなさよ、かゝるあいなのさかゐ、はかなのほまれをたのみ、盛衰榮枯の浮世に從はんよりは、奥山に生ひ茂り、こゝらの春秋をすごし、天つ齢を保ちて、いとやすかるべきを。埋火よ、埋火よ、あはれ埋火よ。埋火、答へけらく。いなさよ。我は、かゝるあいなのさかゐ、はかなのほまれをたのむものかは。霜のあした、雪の夕、文机のそばに侍りて、おだやかにあたゝむる徳をまもり、まばゆき光を放たず、功にも恩にも、なれずほこらず、まめ〳〵しく仕へまつる、此の身には侍らずや。いかで、あいなのさかゐ、はかなのほまれをたのむ己れとはのたまふぞと、得意けなるに、我また詞なくてやみぬるも、げに恥しや。

目黒佐喜子

吹きすさぶ木枯寒き冬の日は、文字書かむとて取る筆も、衣縫はむとて持つ針も、はか〳〵しうは運びかね、身を切るばかりなる隙間の風の堪へ難きに、屏風打繞らして、埋火のもとに寄れば、忽ちに、寒さを忘れ、そが温りのみは、火知らぬ心地ぞする。わきて、親しきどち、膝近う圍坐して、庭の雪折れの音なんど聞きつゝ、語りあふ夜は、實に埋火こそ

絹まるれ。つぎ添ふる炭の、やがて色かゆる頃は、いよ〱放れ難う覚ゆて、媚めきたりとて笑はるゝとも、冬ごもりには、まことに、此埋火こそ、またなき友なれ。

佐々有鄰子

いさゝ木枯の風ふきまきて、伏いほの軒の木の葉は、あさらのこさずちりはてゝ、窓のこゑのみさむくきこゆ。老翁はさしなり。若人も、手足ともに霜にやけたゞれ、ひびといふものさへあらはれて、いといとくるしきものから、老人にさきだち、埋火のもとによりそへば『木からしの風のさむさもよそにしてはるのねふりぞはやきざしぬる』世の常隋ものゝ本情のあらはれて、あなくるしや。

富田郁子

しもふり、木枯ふきすさみ、いとゞさむき夜、埋火おこし出ててすびつによりそへば、げに心地よさ得も云はず。埋火は、其の昔いづくの山に生出し木なるらん。心まゝにしげらば、百年の後までも悠久しくやすかるべきを。然あれ、かくては世に出て人の手にはならざるまじ。幸なるかな。山かずにきりやかれ、かゝる炭してこそ、冬の一時は此上なきものと、もてはやさるゝなり。されど、宿世はかなき埋火は、一度火箸もてかきあらされなば、あはれにもやがて命はきゐて、灰の底にをちいらん。

柿野しづ子

寒さいみじう、雪いと降りしきりて、とふ人もなきやどの淋しさに、只友となしつゝかきおこすは埋火になん。さゆる風霜も打わすれ、窓のうちは、さながら春のやうなる心地して、散りかふ雪を花と見なし、松にさへ咲そひたるいぶかしさなど、なかしきながめの此のさけき、こゝろなも軒端なる梅に柳に、など知らずあるらむ。さはあれど、妾もかされて、すきもる風いとさゆる賤がふせやの寒さは、いかにしのぐらん。民をおもほし、やらせ玉ひて、御衣をぬがせ玉ひしは、いふも畏きことながら、そゞろ思ひ出されてなん。さるを、おのれ、心知りたる人とすびつかこみて語り明したる夜などもありき。まして、さびしき閨の友となすに若くものはあらんや。雨風霜雪の寒さも露知らぬ冬ごもりは、げに埋火ありてこそ過しつれ。

八木沼里子

北山おろし吹きすさぶ冬の夜、かげあかき燈火の下に文繙くころ、そがかたはらにさふらへる埋火こそ、げにゆかしくもまたなつかしくおもほゆれ。されば、さはさほるさむさにも、わが身のみは春のこゝ地して、永き夜のふくるも知らで、學びのみちをいそしみけり。さて、倦み来るころほひには、埋火も、いつしか霜のいろとかはりぬれば、膝押しむけて、やゝかきおこしゝに、小釜の音たてゝ、木の芽煮るへくたぎるもいとうれし。

畑中澄子

秋もいつしかくれて、早や冬の最中となりぬ。夜の更け行くにつれて、雨戸幽かに訪ふ響耳に聞ゆ。寒風は我が身をきるばかりなり。雪ふり積るにやあらん。いざや文よまんと氣をあせれど、あはれ、寒さに身はふるひて、手より落つる本、とりあげて開けど、讀む勇氣だになし。いかにせばやとあたりながむれは、味も香もなき冬花は、今を盛りと開きけり。良き友よとやゝありけるに、あはれいつしか火花はほころびて、元の灰とぞなりにける。あゝ、人生僅か五十年、いかで此の火に異なるべき。老て悔も追付かず。さらばや、若き中に學ばゞや。

村山てる子

世に、埋火ばかりあはれにして、しかも世を導くものは稀なりけり。常に、あやしげなる灰の下にうづもれゐて、外にも立てず、世をもは見でかこつめり。されど、身にきらきらしき光と、人を救ふ暖さを有するからに、冬の日は、人々誰をしふるとなく集ひ来、これをかこみてまとゐし、あるはかたり、あるは歌ひ、寒忘るゝことよなき友とぞすなる。あはれ、人もかくざゑと徳とを供へなば、いかなる賤がふせ屋に住まはむも、破れたる苫屋にかくろひゐむも、人々訪ひ寄れ来て、はては引き用ゐられ、やがて、人の人たる稱も全うせむ。宜なりや。唐人も、桃李も見目よき花だに開きなば、いかなる荒野にそだゝむも、人の探りきて、

花の下なる荒草もふみもてゆき、遂には道をも作らむと云へりしよ。此のことわり、大和もろこしおしなべて一なりけり。

山井浪子

四時折々の樂しみはあれど、冬の埋火ばかり親しくたのしき物はあらじ。さるは、日足短かき晝間は、なにとなくいそがはしき身にしあれば、夜長なる夜さりに、影さむき燈火のもとに、埋火ばかりを友として、古しへの書くりかへし讀むこそいとたのしけれ。庭の松風音はげしく、すきもる風も、身にしむ夜中、埋火かき起して打ふしたる、雪ふる朝、へだてなき友どち、火桶うちかこみてむつまじう打語らふに、ある友のがらすごしにふりやみし雪を見て、『雪に草木も埋火の』といとほこりがほにいひ出てしを、又一人が炭かきおしつゝ、『かきおこす櫻炭にこそ栄ん春のたのしさはあれ』とうちいでければ、はては打どよめきつゝ、花鳥の色音ゆかしき物語に、埋火のあたりも時ならぬ春のこゝちせられてなむ。

二宮草以子

冬みれば、老も若きも、おしなべてなつかしきものは、うづみ火にこそあなれ。何くれの用事どもなしはてゝ、埋火のあたり、父母の側に、はらから打よりて、宇治の木のめ煮つゝ、昔の忠臣孝子、さては烈婦貞女のものがたりなど聞く折こそ、さながら長閑けき春の心地せられて、冬の夜さむも、忘らるゝぞかし。

二宮春枝子

月花も折にふれたる友ながら、冬の埋火は、又そむかれがたきものになん。さて、北山おろしふきすさび、いとゞめざましき冬の夜さむにも、中垣の心へだてぬ友と、打むかひて埋火とりかこみつゝ、心おきなく、花鳥の色音ゆかしく語り出でたるは、冬ながら、昔の春もかきおこされてなん。

三木蕗子

四方の山に立田姫の織りなす紅葉の錦も、吹く木枯のまに〳〵やれはてゝ、時雨にくるゝ空となりしより、松吹く風も音さびて、窓もる月影さへ物すごく、さらぬだに、寒さいみじく肌をつんざきて、いとたへがたければ、幼きものは、長閑けく樂しき春の日をのみまたるゝになむ。されば、今より後はたゞ埋火をなん友とはせまし。あはれ、この友は、いかに玉殿の樓の板屋に降り亂れ霰の水のつらゝする夜寒にも、親しきどちと、ほど近きあたりに圓居して、文つくり歌よみなどせんには、寒さの忘草には、こよなきものなりかし。その火をかきまはしつゝ、ちりくる雪を春の花かともみて、軒の根長き冬の夜も、短きほどに思ほひて、學びの道をひたすらにいそしみはげむになむ。

松本きくの子

『埋火の匂ふあたりは長閑にてむかしがたりも春めきにけり』とこそ縣居の大人はのたまひしか。すみなれたる破窓の下に、親しき友垣のまどゐして、隔てぬ心打明けつゝ、四方山のはなしより、からやまとのうたの評など、或るは、學びの業の種々の樂しき物語ども打ちかたらふ折こそ、いかに喜ばしく長閑にはあれ。破れし壁の隙間ふき來る木枯の風、いと烈しう、寒さもたらすとも、屋根漏る月影の、いたく哀れに物すごくさしこむるとも、まこと心打かたぶけつゝかたらふあたゝかさに、何とて寒さなど感ずべき。『語らへば思ひもとけつ思ふどちむかふ埋火なかだちにして』

駒井うた子

『埋火のもとみし友をかぞふれば消え殘れるぞすくなかりける』五十とせの命、年たつ毎に、殘れるもの今幾何とあらじ。實に死てふものこそあはれなるものなれ。まいて、色香もふかくおひさきこもる若木の花の、あへなく散々ぞとりわけかなしかし。梓弓ひきてかへらぬことながら、思へばまだ今年の春のことなりけるよ。諸共に炉邊かこみつゝ、歌よみに、かるた遊びに、打ち興ぜし親しき友の君には、其の後落花散りしく春の末つかた、なしまれつゝも、散りてかへらぬ數に入り、今にうたゝ恨みの念長くつきずなりぬ。あはれ、悼しむ人また知らじな。『埋火のきゆれば同じ灰となる身を』

森こと子

木枯ふきすさひていとたへがたき夜も、埋火のもとさらずすみさしそへてより添へは、此の頃の寒さをも打忘れ、獨り古のふみどもひもとき居たるに、日ごろこゝろあひの友一人二人とひ來ませりと下婢の案内に、とりちらしゝふみどもうちかたづけ、迎いれて、埋火かきおこし、あたりちかくまとゐて、言葉の花さかせつゝ、たのしく語りあひたるは、春の心地せられて更行ほどをもうち忘れ、長き夜を語りあかしたるぞをかしき。實に冬のまとゐの主は、埋火にこそ。『おもふどち夜はの寒さも忘れつゝむつかたりする埋火のもと』『埋火のあたりは春の心地して言葉の花を咲にほひけり』

長谷川まつ枝子

いにしへ人も冬はこれぞといひけむ、埋火ばかりなつかしきはあらし。雪ふりつみて、いみしく寒き朝、又霜いと白くおきて、風はげしき夕なども、此あたりは春の心地して、窓の外にちりかふ雪も、たゞ花とのみ見るらむかし。まして、ねざめがちなるながき夜、此友なくては、いかでとぞおぼゆる。さても貧しき人の、いかにして此頃の寒を凌ぐらむ。着たる衣さへいとうすく、はつかに燃火てふものして暖まれども、其の料つきて消はてたる後はよ。さおもへば、火桶かゝへたる身にも粟立ちぬ。かゝる際もあるを、終日埋火の傍去らで、歌よみ、あるは春のまうけの衣を調ふるも、いとうれしき親のめぐみになむ。

高砂き代子

春は花、夏は夕涼、秋は紅葉、其の時々の樂こそあれ。冬は、唯降る雪をのみ打ながめ、人目も草も枯れはてゝ、見る目なきに、埋火のもとによりつゝ、中垣のへだてなき友どちとかたり合ふこそ、こよなき樂みなれ。木枯吹きすさび、霰たばしる其夜はも、このもとにありては、さりとも覺えず。雪降る其の日も、寒さは知らで、花とめづるもいとおかし。まして、おきなの身は、一日なりとも、このもとならでは、かゝる寒さのたへらるべき。げに、幸多きは埋火にこそ。春の花、秋の紅葉もさもこそあれ。埋火は又一しほの樂なりかし。

吉崎世根子

冬きては、老の身の、火櫃のみしたしまれて、今日も空のけしきあやしく、折々白きものなどの見ゆるに、いとゞ、たれこめてつれ〴〵なるがまゝ、火櫃の元にて、むかしへの文などひもときて、心やる折柄、したしき友の、此の雪にふりはへて、訪へ來しぞ嬉しき極みなる。互に、櫻炭いけし火櫃とりかこみて、何くれとなく長閑けき話しに、外面の寒さもわするゝばかり、一間は春の心地せられてなん。『昔しへをかき起してのむつ語り寒さわするゝ埋火のもと』

大谷津峰子

冬の夜のたのしさは、思ふどちあつまりて、埋火の元に、日比ありつる事ども、諸共にくづし出る事になんありける。外面には、片われ月の光もいとゞさえ渡り、宵まで降りつもりし雪に、ふす閨離れても寒さの身にしむ計りなるを、猶、埋火の元は、さながら春の心地して、夜は更け行けど、いよよたのしうてのみ。

月野さつ子

寒さ身をさくばかりなるこのごろ、さらぬだに火かげのなつかしきを、木枯の枝をならして、時ならぬ梢の花をば、なさけなくも吹きちらす夜は、嵐の音を外にきく、のどけき埋火にて、はらからまとゐしては、はかなき物語も、一際心ゆきて時うつるをも得知ず。ほのかにひゞくかねの音の、たゞ一つなるにおどろきあひて、各々ふしどにいそぐもおかし。

三野てい子

埋火のあたり、永閑にまとゐせむ友垣もなく、はた待つ人もなし。たゞ、師とも友ともたのむものは、女鑑にぞありける。淋しさをなぐさめむとて、埋火のほとりに寄りそひ、ひもとき初めぬ。それさへいつかうみて、文机の上にうつふし、文の道たどらで、ゆめ路に深く入りぬ。さて、日頃なつかしくこがれし北海道におはします姉上の姿の、あり〳〵とあらはれ、さながらうつゝの心せられぬ。常盤なる松の操の正しき道、よくしり給ひし御身にしあれば、妾をよひて草々の女の教の物語りし給ふこそのいとゆかしきうれしさに、言葉がはさむとすれば、忽その面か

けはうせて、あたりなく、窓の月かけさへて、ゆめはさめたり。起きて硝子障子をおしあくれは、月にはあらで、よひより降積りし白雪の、銀世界をなせるにてそありける。みや人ならは、いかに興ぜさせ玉ふらむ。くれ竹の一ふしなりとも口すさみてはやと思へとも、とみにいてこす。長き夜も更けて、肌寒く、埋火さへも白う山なして、心細くも螢火なすはかりにそなりける。

河原芳子

寒けれはとて、おのづから怠りがちにのみなりゆきて、一間の内にゐこもりたるまゝ、なすこともなく、埋火をばこよなき友とはして、ひとりさびしくも、文などくりひろげみもてゆくうち、ふと思ひ浮べしことこそあれ。指折かぞふれは、また十月もへぬことなり。吹雪まじりに風いとはげしき夕、六七人の友垣か我家につどひきて文の会ひらきし時、おのれは、埋火といふ題をとりたりけるに、如何なる趣をのべん、如何なる様につくりてんと、ひとり思ひをなやましつゝ、よき考もやと火桶ひきよせて、灰などかきならし居けるうち、友垣はみなつくりをへて出すめり。いよゝ心せかるゝまゝに、いよゝ思ひのかきみだれて、太き息のみはきつゞけつ。せんすべなさに、かきつゞりし一章。われながらはづかしうてはいださゞりしを、せめらるゝ切なさをいかにせん、笑ひたまふなとて、數に入れたりけるこの文。今となりて、見もて行けば、そゞろ悔しうなん。かゝるものを、よく〳〵皆の席にいだせしことやと、身に冷汗しつ。埋火と文とをかはる〳〵に見くらべては、またもやその時の苦しさを思ひ出て、ひとり心をおのゝかせてけり。『今日はとてまたも埋火によりそひつなすこともなしにくらしける哉』

大谷奘子

月花は折にふれて親しき友ながら、冬の埋火ばかり親しきものはあらじかし。雪あられ降りしきるを、木枯吹きすさぶ夕、うち向ひて、親しき友と心おきなく花鳥の色音ゆかしく語る夜は更なり、埋火かきならしてはひとりゐのつれ〴〵ともなり、あたりはさながら春の日のこゝちせられてなん。むかし、岡山の法庭に年久しく結ばれたるはらからがもつれさへとけたるも、此埋火なりけり。此の日、はなれがたくいとむつましきものは、此の埋火にこそ。

木谷ひで子

世の中に、埋火ばかりあはれなる物はあらず。初め、奥山に生ひ出で、あらしに、雪に、あてられながら、四とせ五とせの後には、花も咲き實もむすべきを、つひには、しづの男の斧にかゝりてきりとられ、あるは、炭に燒れて火桶の中に埋めらるゝぞあはれなる。人もまた是に同じさまなるを、人々心得してなむあるよ。『はひがちになる埋火をおこすかなふゆのよさむのたへがたければ』

宮武文子

園守の翁がつちかひし庭の白菊も移ろひ、山姫の心染しゝ尾上の紅葉も木枯に吹き誘はれて、いとすさまじき冬とはなりにけり。されば老たる人はもとより、年若き身すら、何となう埋火のほとりなのみぞ戀はしく思ふなる。殊に、今朝より空かき曇り、ふたひらみひら六の花なへ散りかひければ、いよゝなつかしく、日ねもす其の傍をかきなでつゝぞ、くらしける。折しも、おとなふ一人の友とちあり。かゝる寒けき空を、あながちに訪はれつるは、おほろげならすなどうちよろこび、まづ、いろりのもとに手さし伸ばし給へやといへば、其の傍も、今日こそ埋火はまたなき賜なりとほゝゑみつゝ、やがて手をあたゝめながら、四方八方の物語をぞしける。とかうする中に、日ははや西の山にかくれて、三日月の影も凍りつらむと思ふばかりに、さはわたりたれば、いよ〳〵冬の夜寒覺ねたり。くりやの方より、めのとの、夕餉など調じ出けるに、ますく〳〵溫まりを添ねにたり。互に其の傍なる菓などを手にとりて、過ぎにし昔の物語より、今のうつゝ世のことにいたるまで、とり〴〵のことごもうちかたらひつゝ、夜をなんいたく深しける。あはれ、埋火は冬の夜寒にかひあるのみかは、折々に筆の留あたゝめて、吹きすさぶれいるを助け、稀には、火とりにかはりて、空たきものゝなまめかし香立つるはかりをやくにて、あやぬひものにまつはれ、やんごとなきあたりにまちかくいつくしまるゝは、いかなるすくせにやと、かすはあやしく、か

つはうらやましきも、埋火のかたへ去らぬ翁さひたる心くせなりと人のもとかんも、いかがはせん。

熊本縣肥後國菊池高等小學校女子部訓導平塚千代子先生を送る文

德永貞子

世のうきふしとは、かゝることをやいひ侍らん。平塚の師の君の、爲の跡ふみ見る人ごとに、其のうるはしくにほひゆかしきを、いと尊くしたひ侍りて、あまたのなでしこ、其のをしへの庭に生たちて、さゝきもおろかなるも、おなじめぐみの露にうるほひ、そが中には、いとめでたくさきにほふ、錦の花もありけれは、遠近より、菊池の里のかぐはしさとうらやみ侍るも、鹿のいのちけ末ながく、榮ゆかまほしさおさひたまひて、松のけふりのこまやかに、数たまひし、御めぐみのほど、山よりもたかく、海よりもふかく、おもひまゐらせつる。時しもいかなる不幸にか、うたがたのうき別れをつげ、霜をわけて、かへるかりかれさともに、故郷に立さりたまふ。御なごり惜さは、なににたとへんかたもなく、梶なき船のおもひにしづみ、あまたの教子、御わかれのかなしさに、三組の銀盃をさゝげて、雨にしをるゝ、ありさまになん侍りぬ。まして、妾は、學窓も半にて、閉させられし、こゝちし侍りて、つかのまも忘れかれつる身のいさゞ、たもと露けくおぼゆ侍れば、師の君もあはれさみそなはして、行末ながく導たまひてよあなかしこ。

かきながす水くきのあとすゑながく
　きみがめぐみをわするべきかは

末ながくきみがめくみぞくまれける
　をしへのにはのふでのはこびに

竹をめづる詞

谷口房子

木にもあらす、艸にもあらす、ひとり竅なる物にて、世に愛てはやさるるものは、竹になんありける。さて此竹よ。身は賤が垣ほに生ひたちなから、頭に日の御旗をかざして、九重の御門に立ち、或は老の身を助くる杖ともなり、あるは笛ともなりて、いとも妙なる音を出して、獸によまれ、繪にうつされぬるぞ、いとごめてたきかぎりなりける。そは、置きそふ霜にも枯れず、ふりつもる雪にもたわ忍び、さて、みさをたゞしく、姿すくなれはこそ、かくは、世にもめてはやさるゝなれ。人もまたたとひ身は、賤が伏屋に生るとも、みさをは此の竹に習ひ、心の直ぐなることと、又、此の竹の如く、ならんには、いかで、世にもてはやされぬことのあるべき。いさまなひてん、そのみさを、いざならひてん。そのすがた。



瓮

あつふすま重ねてもなほかされても
　霜さゆる夜はさむくぞありける

福原董子

和氣清麿

君がためその身をすてゝ大みすち
　亂さぬみさを高くもあるかな

谷口ふさ子

平重盛

日の御かげおほふ若木のながりせは
　小松は千代に咲にんものを

有明月

しのゝめを待けてなくなるさりとふるに
　このまをもるゝありあけのつき

清河てる子

●●● 第壹號十一月六日發行 ●●●

正價一冊金拾錢 六冊五拾七錢 十二冊壹圓八錢 ●郵稅一冊壹錢

活文壇

郵券代用一割增 每月一回十日發行 ●紙數每號百二十頁以上

文學の沈靜既に久しく、革進の氣運將に積弊の堤を決して來らんとす。我活文壇は實に之が先覺者として敢て自ら先驅をなすものなり、死せる文學を葬むり、眠れる文學を覺醒する是此本領とする所、刮目本號を見て其眞相を知れ。

美文、新體詩、和歌、俳句、漢詩を募集す

正岡子規君序 節村道人編

美文 紅葉青山

◎紙數三百二十頁◎正價●三十錢◎郵稅●四錢

掲載目次

發兌 東京神田壁大工町五番地 大學館

武井義述

執中考

和裝半紙本
全壹冊
定價金拾五錢

武井義述

執中考附言

和裝半紙本
全壹冊
定價金拾五錢

この兩書は、著者、多年、蒼海副島先生に從學し、儒敎の蘊奥たる、執中の義を講究し、普く、經典の中に於て、執中の義に于係せる法言を指摘して、中說の脉絡を正し、一々、師說によりて、その本旨を詳述せられたるものなり、修辭謹嚴、一句苟もせず、卷首に曰く、

吾好讀儒書、受敎蒼島副島先生、益尊信斯道、而今者竊有所感焉、因草執中考、孔丘曰、知我罪我者、其惟春秋乎、我於此篇亦云爾、

以て、著者深意の存する處を知るべし。

此の書を繙く、者は、親く、蒼海先生の高妙深邃なる講話を聞くの思あらむ、又、これによりて、最、精粹幽微なる、孔孟哲學の根本的要義を窺ふことを得べし

發賣所　東京築地二丁目二十一番地　國光社

三版

家庭の鑑

菊版美本

全一冊

定價金拾八錢

郵税金四錢

本書は章を親子、兄弟、夫婦、繼母、嫂、養子、師弟、主從、朋友、寡婦、の十章に分ち明治の現代に於ける忠孝節義友愛貞操等の事實を詳叙せるものにして句々血を吐き言々人の肺腑を貫き讀むものをして感奮興起感極つて殆泣かしめむとするものあり書中收むる所のもの或は勅定の綠綬褒賞を賜り或は地方の美事として旌表せられたるものなれは皆是人の子弟婦妻の摸範に供すべき事實なり之に加ふるに婉麗哀痛の筆を以て事實を精密に寫したれは其情味の津々たる實に小說を讀むが如く身恰其地にありて其境に臨める感あり今や刻成りて出版す世の教育家父兄及子弟婦妻の坐右には一日も此可憐の書册無かる可らず家庭及學校にも亦必此種の册子を備へざる可らず、

發行所　東京市京橋區築地二丁目廿一番地（電話新橋八八）　國光社

社告

○代價は現貨又郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送の事○郵便爲替は東京**新富町**郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料添附の事○未納稅の來書は一切受取不申候事

女鑑
毎月五日廿日發行

定價		廣告料
一冊	拾錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊前金(三ヶ月分)	五十五錢	
十二冊前金(半年分)	壹圓	
全國無遞送料		

明治三十二年十二月十九日印刷
明治三十二年十二月二十日發行

編輯兼發行人 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 川崎直衛

印刷人 東京市京橋區南八丁堀二丁目十一番地 並木良雄

東京市京橋區築地二丁目二十一番地 (電話番號新橋八八) 國光社

新製金銀煙管

今般弊堂に於ては愛願諸君日用の御煙管至極の廉價にて御購求に相成り從前の如く無用の御失費なからん事を冀ひ新に金銀煙管を製造し以て廣く愛顧諸公の御需に應し發賣仕候右發賣に附き特に御注意を冀ひ置候は

第一　弊堂に於ては各種の煙管みな其量目を以て其實價を定め候

- ●十四金製無地一匁に付…價三圓六十五錢
- ●十八金製無地一匁に付…價四圓五十錢
- ●純金製無地一匁に付…價五圓
- ●純銀製無地一匁に付…價廿五錢
- ●仝石目槌目一匁に付…價廿八錢
- ●千段卷の類一匁に付…價卅五錢
- ●七子綱代類一匁に付

(彫刻料片切彫)價壹圓五拾錢ヨリ五圓迄○平象嵌參圓ヨリ八圓迄○高象嵌價五圓ヨリ拾五圓迄(市外遞送料金廿錢)

但し精工を要する彫刻象眼等は御注文に應して特に廉價に調進仕候

第二　畢覺本堂の煙管新製は職工の餘暇を以て多數に製作するを以て敢て利益を專にするの目的に非ず故に普通に比すれは廉價にして且つ銀の質も之を保證して確實を旨とするなり

右の如くなれば多少に限らず御購求下され御注文の程奉冀候

東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八、十九番地
(電話番號新橋三百二十三)(長距離電話加入)

時計及寶玉類
貴金屬美術品商　天賞堂



妙技一等賞牌

- 天賞堂小川町出張所　東京神田小川町電話本局(二一六〇)
- 天賞堂横濱出張所　横濱市尾上町電話番號(八七六)
- 天賞堂大阪出張所　大坂市心齋橋北詰電話東(七三三)
- 天賞堂名古屋出張所　名古屋市玉屋町二丁目十七番戸
- 天賞堂廣島出張所　廣島市大手町三丁目六十五番地
- 天賞堂熊本出張所　熊本市上鍛冶屋町十番地
- 天賞堂長崎出張所　長崎市今鍛冶屋町四十番地
- 天賞堂福岡臨時出張所　福岡市橋口町榮屋方
- 天賞堂小樽臨時出張所　北海道小樽色内町越中屋方